
日常物語

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常物語

【Nコード】

N1128U

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

化物語が好きでなんとなく登録して勢いだけで書くので内容・誤字・脱字が酷いかもしれませんが暇つぶし程度に見て頂けると嬉しいです。

最初に言つときますが本当に適当にグダグダした内容が多かったりキャラが崩壊したり設定無視があると思いますがそこはご勘弁を。

この物語は、阿良々木暦の平凡な日常を淡々と描くものです。過度な期待はしないでください。

こよみデイリー（前書き）

人はそれぞれ日によって嬉しかったり、怒ったり、悲しかったり、楽しかったりがある。

それは僕も例外ではない。

これは、彼女である戦場ヶ原、後輩である神原、一番の友達である八九時、大事な妹キャラの千石、愛すべき羽川、一生のパートナーである忍、一番のお人好しの忍野、僕のでっかい方の妹である火憐ちゃん、ちっさい方の妹である月火ちゃんとの日々の何でもない話である。

今回はそんな僕の周りで起きる日常の出来事を晒そうと思う。

じよみデイリー

今日はとある夏の平日の最終日である金曜の放課後である。周りではクラスメイトが土日の予定を話合ってる子達もいる。

そんな僕はというと戦場ヶ原待ちである。

話があるということでは僕は今席を外している戦場ヶ原を待っているのである。

「あら、こんなところに大きな犬の死骸が転がってると思ったら阿良々君じゃない。」

「人を待たせておいて戻って来た一言目がそれかよ!!!」

「アーワルカッタワネ。サーセン。サーセン。」

「謝る気一切ねえなあ!!!」

「何よ、うるさいわね。阿良々木君なんて私の中の人がいなかったらリク of 少年の時の回想が出来なかったのよ。」

「出てきていきなりメタ発言かよ!!!」

「当たり前じゃない。私は戦場ヶ原ひたぎよ。」

「だから何だよ!!!何堂々と自分が一番偉いみたいなこと言ってんだよ!!!」

「ギヤーギヤーうるさいわね。そんなことより阿良々木君。」

「自分で振つといてそれかよ。何だ？」

「週末、海に行きます。」

こよみデイリー（後書き）

とりあえず1ページだけ途中まで書いてみました。

どうだったでしょうか？

まあ思った以上に酷い内容ですが、これから良くなったらいいなと思っと思っています。

こよみデイリー 2 (前書き)

早くも挫折しそうななってまいりました。
まあぼちぼちとがんばっていきます。

こよみデイリー 2

「週末、海に行きます。」

この一言を聞いてテンションがMAXになるのはそう時間はかからなかった。

「違うわ。こつじゃないわ。海に……海に行き……海に行き……
……ませんか？……海に行っ……たらどうな……です。海に行きま
しょう、阿良々木君。」

「結局そこに落ち着くんだな。」

「何？嫌なの？」

「いえ、行きます！！行きたいです！！行かして下さい、戦場ヶ原
ひたぎさん！！！」

「そ、ならよかった。」

こつしてガハラさんとの海デートが決まった。

「一応話はこれで終わったのだけれど。ゴミ……阿良々木君はまだ
帰らないの？」

「今自分の彼氏をゴミと言ったな!？」

「ごめんなさい。ついちゃっかり」

「わざとじゃねえか!！」

「うるさいわね。仕方ないじゃない。暦とゴミって似てるし、紛らわしい名前をつける方が悪いんじゃない。」

「似てねえよ!！だいたい戦場ヶ原お前似てる似てない以前に僕のこと阿良々木って言ってたじゃねえか!！てかその前に、名前が悪いつて暦ってつけた僕の親に謝れ!！」

「はいはい。メンゴ、メンゴ。」

「適当極まりねえなおい!！」

そんなこんなあって、羽川とクラス委員の仕事があるため今日は戦場ヶ原には先に帰ってもらうことにした。

そこへ丁度先約の用事を済ませた羽川がやってきた。

「ごめんね、阿良々木君、遅くなって。」

「その言葉を戦場ヶ原にも聞かせたいよ。」

と小さく僕は呟いた。

「戦場ヶ原さんがどうかした？」

「あ、いや何でもなし。それより仕事なんだけど。」

「それならほとんど終わらせておいたから後は日誌を書くだけだから。」

「えっマジ！？いつの間に！？悪いな。」

「いいよ、別に。私が勝手にしただけだし。」

「そついや日誌の今日の感想みたいなのころって何も考えずに過してたらネタが無くて話を盛ったりしてしまうんだよね。」

「そうだね、話題がないと盛ってしまいがちだよ。私もたまにするし。」

「えっ羽川も盛ったりするの！？」

「盛るぜえ〜超盛るぜえ〜」

「どうした羽川！？お前までもしかしてメタ発言か！？」

「だって戦場ヶ原さんもメタ発言してたし私も言った方がいいのかなと思っただけ。」

「しなくていいよ！てかあの場に羽川いなかったら！何で知ってるんだよ！本当お前は何でも知ってるな。」

「何でもは知らないわよ。知ってることだけ。」

この言葉を聞けただけで僕は幸せだった。

クラス委員の仕事を終え、とはいってもほとんど全部羽川がやったのだが、僕は学校の門の前を出た時に僕の頭上を人のような黒い影が飛び越えた。

まあ大方の予想はついている。人を飛び越していけるやつなどあいつ以外に居れば教えてほしいものだ。

「やあ、阿良々木先輩。奇遇だな。」

「こんな仕組まれた奇遇があつてたまるものか!!」

「そうかなら脱げばいいんだな。」

「出てきていきなりやりたい放題すんじゃねえ!!なんでお前はそうすぐに脱ぎたくなるんだよ。」

「それは私が変態だからだ。」

反論が出来なかった。

「それより何か用か?」

「特にはないのだが阿良々木先輩と話しをしたかったから待たせて

もらっていた。」

やはり可愛い後輩である。

「そうか。」

「迷惑だったか？」

「いや迷惑じゃないよ。」

「そういや週末に戦場ヶ原先輩と海に行くらしいな。」

「なんで知ってるんだよ。まあ、戦場ヶ原本人が言ったんだろっけど」

「その通り、さすがは阿良々木先輩だ。戦場ヶ原先輩が門を出てきて私を見つけるなり20分程その話をしていた。」

「どんだけ話したいんだよ、あいつは。」

「いや、羨ましすぎるぞ阿良々木先輩。戦場ヶ原先輩と一緒に海で露出プ」

「それ以上は言わせるか！！筆者の初投稿の小説でお前の下ネタ全開の会話をさしてたまるか！！」

「ほお、阿良々木先輩ともお方がメタ発言か。」

しまった。僕としたことがついメタ発言をしてしまった。
いや、しかし神原を止めるにはこれしかなかったんだ…これしか。

「その前に何故私は脱いではいけないんだ。中は同じだっていうのにベル坊は全裸ではないか。」

「お前もがつつりメタ発言してんじゃねえか！！だいたい向こうは赤ん坊だろうが！！」

いや、赤ん坊でも全裸はどうかと思うが。

「なら私も赤ちゃんになって赤ちゃんプ」

「もついいよー！」

周りから見れば冷たい目を向けられそうなそんな話をしながら途中で神原とは別れた。

こよみデイリー 2 (後書き)

いや〜今回もめちゃくちゃで原作レイプに近い形になってしまいました。

まあ自己満足で書いてるんで面白くないかもしれませんが、これからもよろしくです。

こよみデイリー 3 (前書き)

いや〜投稿したやつ見直したんですが酷いですねえ〜。

何がつて全部が酷いです。www

誤字・脱字・改行ミス。

クソっ1P目いきなり八九寺が八九時になってるじゃねえか。

そして1番は内容が酷すぎるwww

まあまだ悪あがきはしますけどwww

では3話です。どうぞ

今日は何故こんなに皆メタ発言をするんだ。

そんなことを思っていると前髪を目元まで伸ばした見慣れた少女が歩いてきた。

「あゝ曆お兄ちゃん。とうっとうる。」

「千石、お前だけはメタ発言をしないと信じていたのに。一言目で言ってしまったんじゃないか。」

「メタ発言？なんのこと？」

「あ、いや、千石がメタ発言するわけないよな。ただたまたま挨拶の仕方が一緒だったただけだな。」

「そつだよ。撫子がメタ発言するはずないよ。」

そつだ、千石は僕の中では妹よりも妹キャラなんだ。そんな千石がメタ発言をするわけないじゃないか。

「それより千石、今学校の帰りか？」

「うん、そつだよ。曆お兄ちゃんも学校の帰り？」

「ああ。」

「そつだ、曆お兄ちゃん麻婆豆腐って食べられる？」

「まあ食べられるけどどうかしたか？」

「撫子この前美味しい麻婆豆腐があるお店見つけたから教えてあげるね」

あれ？これってまさか某アニメの激辛麻婆豆腐じゃないよな？

いや千石のことだ。純粋に麻婆豆腐が美味しかったところがあつたから教えてくれるだけだ。

妹よりも妹キャラなんだぞ、さつきもメタ発言？何それ？バカなの？死ぬの？みたいな反応だったじゃないか。

それを僕はなんてことを思ってるんだ。

「そつか、じゃあ楽しみにしてるよ。」

「うん、楽しみにしてて。」

そんな約束をして千石とは別れ、ようやく家に着いた。

そついや戦場ヶ原のやつ週末に海に行くって言ってたけどまさか泊まり掛けではないだろうな。

てか今思えば行くと決めただけで何も決めてないじゃないか。

仕方ない後で電話でもして聞くか。

そして、夕食を食べ、お風呂に入って今はベットでゴロゴロしながら電話を掛けているところである。

「もしもし」

「もしもし、戦場ヶ原？僕だけど。」

「只今電話に出ることが出来ません。電話主が阿良々木君なら爆発しなさい。」

「なんでだよ！！爆発する意味がわかんねえよ！！てか最初にもしもしって言ってたじゃねえか！！」

「うるさいわね、切り落とすわよ。」

「どこの部位をですか！？」

「冗談よ。爆発しろっていうのは。」

「切り落とすのは事実かよ！？」

「それより何かしら？」

「あゝ海の件だけでも決めてなかったから聞こうかと思って。」

「そうだったわね。本当は土日を使って泊まり掛けで行く予定だったのだけれど生憎明日は予定が入ってしまっているから日曜の早朝に出ようと思っているのだけれどどうかしら？」

「僕は全然構わない。」

てか泊まり掛けで行くつもりだったのかよ。

「なので悪いけれど明日は神原と水着でも買いに行つて頂戴な。」

「まあ、新しい水着をかうのはいいが何で神原なんだよ。」

「あの子たまには構つてあげないといけないから明日は代わりに阿良々木君が遊んで頂戴。」

「まあいいけど。」

「とりあえずそういうことだから明日は頼んだわよ。」

「ああ。」

「あと日曜は朝4時に私の家に集合ということぞで」

「了解。」

「それじゃあ、よろしく。」

電話を切つた後に気付いたのだが朝の4時つて始発もないじゃないか。

まさか、またジープの父親同伴！？てかそれしかないな、時間的にそんなことを思いながら次は神原に電話をかける。

「神原駿河、特技は超電磁砲だ。」

「嘘つけ！！お前はどこぞの能力者だよ！！」

「その声とツツコミは阿良々木先輩だな。」

「お前は相変わらずその判断の仕方かよ。」

「私の電話番号を知ってる人は少ないからな。それよりどうしたのだ？」

「あゝ明日なんだけどお前暇か？」

「買い物のことだな。それなら大丈夫だ。」

「なんだ知ってるのか。」

「ああ、戦場ヶ原先輩から連絡があつたからな。」

「そうか、なら話が早いな。明日何時ぐらいがいい？」

「私は何時でも構わないぞ。阿良々木先輩が呼ぶのならいつでもどこでも駆けつけるからな。」

「それは頼もしいな。じゃあ、1時に呼びに行くよ。」

「了解した。」

切った後、明日の予定も決まったところで僕は眠りについた。

はずだった。

じよみデイリー 3 (後書き)

撫子との絡みをどうしていいかわからないためガハラさんとバルカ
ン後輩中心になってるんで次からなんとか頑張るようによします。

次回予告

八九寺Pと忍が出るかもよ。

こよみデイリー 4 (前書き)

今思ったんですが日常物語って言うより海物語になりそうですよね。海ネタは最初からやるうとは思ってまして、しかし海物語にすると僕の中でパチンコと被るので泣く泣く日常物語にしました。さてさて今回も内容は酷いですが見てやって下さい。ではこよみデイリー4です。どうぞ。

こよみデイリー 4

眠りについたらはずだった。

だとシリアス展開に持っていきそうになるのでこれからの展開を考
えるところは

眠りにつこうとしていたのに

が合っているな、たぶん。

「起きろお前様。緊急事態じゃ。」

「何だよこんな夜中に。」

時計を見ると深夜2時を回っていた。

「だから緊急事態じゃと言っておるのじゃ。」

「もしかして怪異絡みか！？お前が緊急事態って言ってるぐらいだ
からそれほど厄介なやつなんだな？」

「いや怪異ではない。」

「じゃあ何だよ？」

「いや最近ミスドに行っておらんかったじゃろ？禁断症状みたいな
のが出て全く我慢が出来ないのじゃ。」

「知ったこつちやねえよ！！お前はそのためにも僕の大事な睡眠時間を遮ったのか！？」

「そんなこととはなんじゃ！！僕にとつては一大事なことじゃよ！！最近行つてない間に焼きドと言うものが発売しとるんじゃよ！？」

「んなこと言われてもこの時間帯に起こされてもミスドは開いてねえよ！！！」

「マクドは24時間営業があるのになぜミスドは24時間営業の店がないのじゃ。」

「それはドーナツ1個とコーヒー1杯で居座り続ける人が出るからじゃないのか？」

「てか実際に24時間営業の場所があるのかわからないが。」

「24時間営業であれば夜中に僕が毎日のように買いに行くのに。」

「お前が買いに行くんじゃなくて、僕のお金で僕に買いに行かすんだらうが！！てか僕が同伴しないと行けないじゃないか。」

「だいたい毎日行かれたらこの歳で借金を背負う人生になるじゃないか。」

「こんな話をしたら余計食べたくなってしまうたではないか。」

「だから知ったこつちゃねえよ!!お前が勝手に話を進めてるんだろつが。まあ確かに最近連れて行ってなかったからなあ、明日神原との買い物に帰りに買ってやるよ。」

「本当かお前様!？」

「ああ。だから今日はもう寝ようぜ。」

「そうか!!明日は何を買うかのお。そうじやお、やっぱり焼きドは全種類は買うべきじゃな。」

「フリーバー焼きドのダブルベリーは必要じゃな、まあゴールデンチヨコレートは必ず買うが。そうじやお前様何が良いと思うか?」

「知らねえよ!!お前が食いたいものを買えばいいじゃねえか!!」

「本当か!？どうしたお前様、太っ腹じやお。」

「しまった。こいつ完全に全種類を買い占めるつもりでいるじゃねえか。」

「それだけは絶対阻止しなければ。」

「僕のこれからの生活を賭けて。」

「そうじやお、ゴールデンチヨコレートと焼きド全種類とポン・デ・リング全種類と…」

「結局興奮した忍を止められるはずもなく夜が明けて朝になってしまった。」

その忍はと言うと日の出と共に寝てしまった。
全く脳天気なものである。

僕がベットのの上に座って呆けているといつものように二人の妹の火
憐と月火が起こしに来たのだが

「あれ？兄ちゃん起きてるじゃん。今日地球が爆発するんじゃない
の？月火ちゃん。」

「それは言い過ぎだよ。真夏なのに雪が降るぐらいだよ。」

本当に朝から失礼なやつらである。

「なんで今日は早かったんだよ兄ちゃん。」

「あ〜ちょっと寝れなくてな。それよりその右手に持ってるいかに
も重たそうなダンベルはなんなんだ？」

入って来た時から気になって仕方がなかったんだ。

確実に30キロはあるうダンベルをでっかい方の妹は軽々片手で持
ってるんだもん。

「これ？これは兄ちゃん用に昨日買ったんだよ。結構高かったんだ
ぜ。」

「僕の趣味に筋トレはない。僕用って一体何に使って言うんだよ。」

「だから今日朝起こすためにこれを持って来たんじゃないかよ。頭に落としたらさすがに起きるかなと思って。なのに兄ちゃんったらこれを落とす前に起きてるんだもん。この苦勞とお金を返して欲しいよ。」

「そんなもん落とされたら二度と起きねえよ!!！」

「何!?!これでも起きねえって言うのか兄ちゃんは!!！」

「そついう意味じゃねえよ!!二度と目を覚まさないって事だよ!!！」

全く恐ろしい妹である。

もし昨日忍に起こされず寝ていたら僕は今日命日を迎えていたのか。これは忍に感謝をしないとダメだな。

よし、今日のミスドは5個プラスしてやるよ。

「とりあえず起きてるなら朝ごはん出来てるから早く食べてね、お兄ちゃん。行こう火憐ちゃん。」

ちっこい方の妹は優しく声をかけた。

ただ気になったのが手に千枚通しが見えたような気がしたんだが。いやそんなはずは無い……そうだ月火ちゃんはたこ焼きの練習をしてたんだ。

そうしかない。

そうであってほしい。

もしあれで僕を起こすために持っていたらのなら僕は阿良々木姉妹をヒステリック姉妹として世界仰天ニュースに応募してやる。朝からいろいろあったが朝食を済ませ、これでも僕は受験生なので勉強をするべく机に向かった。いつもは羽川が戦場ヶ原のどちらかに勉強を見てもらっていて、今日は羽川の番であったが予定があるということをもっと聞いていたので特に予定に変更はなかった。

そこで神原と待ち合わせしてる時間まで勉強をしようというわけである。

机に座るとたまに思うのだがこの引き出しから青色の猫型ロボットが出てきて何か楽に記憶が出来る道具を出してくれないかと思ってしまうことがある。

ただ僕はアンキパンだけは勘弁だ。

僕が覚えなければならぬ量は胃がいくつあっても足りない。

しかも、トイレに行くと排出によって効果が無くなるらしい。

前日に全部を暗記しようと思ってもそんなに食べられないし、かと言って何日か前に食べるとトイレに行けなくなるのでお腹が爆発しそうである。

そんな馬鹿なことを考えてから勉強に取り組んだ。もちろん真面目に。

何事も集中していれば時間は時が経つのは早く感じる。

まだ時間は少しあったがキリが良いところだったので勉強を切り上げ少し早めに家を出ることにした。

家を出て少し歩いたところで僕の前に大きなリュックを背負ったツインテールの小学生が現れた。

八九寺であった。

以前までの僕なら興奮しながら猛スピードで八九寺に抱きついていただろう。

しかし、僕は今受験生であり、ましてや彼女がいる。

もうそんな変態ロリコンみたいなことはもうしない。

悪いな、八九寺。

と回れ右をしながらそう心の中で言った後、僕はさらに回れ右をして全速力で走った。

八九寺に向かって。

こよみデイリー 4 (後書き)

予告通り忍は出せたんですが八九寺Pを出すともっと長くなりそうだったので名前だけだして次回に持ち越しです。

ネタがあまり浮かばないためか余計内容が酷くなったような気がしますwwww

次回予告

ついに八九寺P登場です。

こよみデイリー 5 (前書き)

いよいよ八九寺Pのご登場です。

当たり前である。

「シャー！ツシャーッ！」

「大丈夫、敵ではないお前の味方だ」

「しゃーっ！しゃー！」

「よし、ゆっくり深呼吸をしよう」

「しゃー！……すーはー、すーはー」「しゃー！……すーはー、すーはー」

それにしても初号機もビツクリの暴走だな。

もしかしたら初号機よりも強いんじゃないかねえか？こいつ。

「よし、いいぞ。僕だ、わかるか？いつも誰にでも優しく評判の良
いごく一般の高校生で……」

「ん……っ……」

八九寺はだんだん我を戻して髪もいつも通りになり姿も戻った。

「大丈夫か？」

「これはこれはクララ木さんじゃないですか」

「僕をアルプスを舞台にしたアニメに出てくるキャラみたいな名前
で呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

確かに噛まれた後に噛まれたけど今回は僕が悪い。
しかし、いつもの流れをしないと僕の中でモヤモヤ感が残るのでい
つも繰り返すことにした。

「違う、わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃない!？」

「カビ炊いた」

「そんなもん炊くんじゃねえ!!」

楽しい時間であった。

「阿良々木さんお出かけですか？」

「ああ、神原とちょっと買い物にな」

「ああ、あのBL女子高生ですか」

「どんなあだ名だよ」

「そついや今日は明日行く海のために水着を買いに行くんでしたね」

「なんでお前が知ってるんだよ!？」

「私を誰だと思っているんですか？」

「さすが八九寺P」

「その気になればこの小説を終わらせることなんてちょちょいのちよいです」

「何!？そこまで権力持つてるのかお前は!？」

「当然です。明日の海行き先をカリブ海にして阿良々木さんをデイヴィ・ジョーンズの手下として働かせることもできます」

「世界をも巻き込むのかお前は!？だいたいデイヴィ・ジョーンズは前作で死んだよ」

「なら私の手下として働いてもらいます」

「なんでお前の手下にならなきゃいけないんだよ」

「だって阿良々木さんの一人称って僕じゃないですか？僕の読み方

つてもべとも読めるじゃないですか？ほら」

「ほらじゃねえよ！！何の答えにもなつてねえよ！！」

「わがままですなえ阿良々木さんは。だから最近の若い者とは言われるんですよ」

「全く関係ないし、なんって言われる代表が僕なんだよ！！だいたいお前も若いじゃないか、僕よりも」

「生きていれば私の方が年上ですし、二十歳を越えています」

「申し訳ございませんでした」

「分かればいいんですよ分かれば」

それにしてもよく次から次へと話が出てくるなこいつ。
まあいつもだけど。

「それはようやく私の出番になったからです」

「僕のモノローグを勝手に読むな」

「前は予告されていたにも関わらず出してもらえませんでしたか
らね」

「確かに前々回の予告に出ていたな」

「はい、私は終わらせる権力があると言いましたけど自分が出ないうちに終わらせるのは嫌だったので続けさせていたんですよ」

「どんだけだよ!？」

「まあこれで私も出れたことですし終わらせますか!！」

「笑顔で言うことじゃねえよ!！」

こいつ怖えよ。

僕の物語を中途半端で終わらしてたまるか。
頑張れ筆者、負けるな筆者。

「まあ冗談はここまでで。時に阿良々木さん、傷物語が映画化みたいですね」

「冗談は終わってもメタな会話は続くのな」

「メタメタ続きます」

「めっちゃめっちゃ続きますみたいな言い方をするな」

映像化記念でちょこちょこ映ってもよろしいでしょうか？

「良いわけねえだろ!！」

「今考えてる場面は阿良々木さんとエピソード君が闘ってるのを見

ている羽川さんの横で一緒に見てるところと阿良々木さんっ忍さん
… 傷物語ではキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブ
レードでしたね、お二人が闘ってるのをグラウンドで見てる場面を
考えています」

「どつちも良い場面じゃねえか！そんなところで関係ないやつが出
るなよ！！」

「だって良い場面じゃないと映らないじゃないですか」

「お前は若手芸人かよ！！てか最初エピソード君って言ったよな？
あいつそんな若いのか？」

「猫物語（白）の時点で誕生日1ヶ月前で6歳だと本人が言ってい
ましたよ」

「何！？あいつそんなに若いのか！？どんだけ成長早いだよ」

「まあ詳しいことは買って読んで下さい」

ネタバレになるといけないんで買って読んでみて下さい

「ちなみに羽川さんと戦場ヶ原さんがあんなことやこんなことをし
ていましたよ」

「八九寺、僕は用事が出来て今から宮脇書店へ行かなくなったから
後は頼んだ」

「本当救いようのないダメ人間ですね」

そんなやりとりも楽しかった。

まだ話してはいたかったがこのまま話していると日が暮れそうなので話を終わらせ神原の家へと向かった。

こよみデイリー 5 (後書き)

八九寺P「ようやく私の出番ですか」

クロネコ「仕方がなかったんです、八九寺さん」

八九寺P「まあ出てくるのが遅かったのは別にいいです。それより何なんですか！？この薄くてぺらぺらな内容は！？」

クロネコ「グダグダと適当な話ばかりなんで話はすぐに思いつきませんが内容がぺらぺらなんで残念な小説になってしまってます」

八九寺P「自分で言っているとより惨めに見えますよ。あとこれより酷くなると打ち切りにしますからね」

クロネコ「はい、がんばりますorz」

こよみデイリー 6 (前書き)

活動報告にも書きましたが、見やすいように改行を行いました。

それでは見てやって下さい。

こよみデイリー6です。ごっご。

こよみデイリー 6

八九寺と話していたため結局13時丁度に神原家に着きおばあちゃんにいつも通り神原の部屋へ案内された。

神原の部屋はドアではなく障子になっている。

その障子を開けた。

「やあ、阿良」

その瞬間、僕は障子を閉じた。

何故かって？

そんなもの決まってるじゃないか。

年頃の女の子が裸で仁王立ちしていたら誰だって閉めると思っ。障子の向こう側から声がした。神原の声だ。

「何故閉めるのだ？阿良々木先輩」

「なんで裸なんだよ！？服を着ろ！！」

「いけなかったか？阿良々木先輩が呼びに来ると言っていたから脱いで待っているという意味だと思っただが」

「なんでそうなるんだよ！？」

「むっ。私は昔誰かから呼びに行くということとは脱いで待ってるということだと教わった気がするのだが」

「デタラメを言うな！！しかも誰かって誰だよ！！もしそんな奴がいるなら今すぐ僕の前に連れて来い！！説教をしてやる」

待てよ以前星空デートに行く途中の車の中で神原の師匠は戦場ヶ原つてことがわかったような……いや、でもあいつに限ってそんなことは……大いにあり得る。

「とりあえず着たぞ阿良々木先輩」

「じゃあ、入」

本日2回目の瞬間障子閉めである。

「着てないじゃねえか！！なんで下着のみなんだよ。ほとんど変わってないじゃねえか」

なんだよこのリアルア八体験みたいなのは。

「私も服を着たとは一言も言っていないぞ」

「そんな屁理屈はいらねえよ！」

「あゝずっと立っていたら胸が凝った。誰か揉んでくれる人はいな

いものかな」

「それで一体誰が損をするんだ!？」

本当こいつはいきなり何を言い出すんだよ。

いつかこの小説排除させられるぞ、某知事によって、
てかPTAが黙ってないぞ。

そここうしている間に神原はようやく服を着た。

「ところでそのPTAなんだが」

「お前も勝手に人の心の中を読むな」

僕にはプライバシーってものが存在しないのか？
どこに行った個人情報保護法

「読心術だ」

「うるせえ!!お前にそんな仕様はねえよ!!」

「そうなのか!?!つきりあるのかと思ってたぞ」

どれだけこいつは才能を持つ気なんだよ。

「で、PTAがなんだって?」

「PTAの意味は、Parent Teacher Associationだが最近Protect Teacher Associationを作った方がいいのではないのかと思ってな」

「教師を守る組合か。確かに最近はモンスターペアレントってやつが増えて教師も大変だって言うしな」

「うむ。これでは生徒が保護されすぎて教師と生徒の禁断……」
「結局そついう話かよ!!」

たまには神原も真面目な話をするんだなと見直した自分が馬鹿みただった。

家を出て向かう先はこの街で唯一のショッピングセンターである。わかりやすく言うとイオンみたいなものである。

着いて早々と神原は

「さてどのブルーメラン型の水着を買うのだ？」

「なんで勝手に決めてんだよ。普通のハーフパンツデザインのでいいよ」

「それは残念だな。それを着た阿良々木先輩と忍野さんとの絡みを想像しようと思ったんだが」

仕方がないので神原をスルーすることにした。

「さすがに今日は土曜で学校が休みだし子供が多いな」

「ああいいぞ、阿良々木先輩。とてもいい放置プレイだ」

喜ばすだけであった。

クソっこいつは無敵か!?

無敵艦隊神原駿河。

なんか中国語っぽくなってしまった。

「無敵艦隊かあ。私はフェルナンド・トーレスが好きだ」

「サッカーのスペイン代表の話をしてんじゃねえよ!!」

「さすが阿良々木先輩だ。よくわかったな」

「だいたいなんでお前がサッカーの話わかるんだよ。バスケの話ならまだしも」

「それは筆者がサッカーが好きだからだ」

今更だが誰がメタ発言しようとも何の気にもしない。もうツッコまないからな。

「あゝなるほどな………つて納得出来るか!!」

やっぱり無理なものは無理であった。

筆者の話をしながら買うべきものも買い2時間ほどウィンドウショッピングを楽しみ、神原はその後、BL小説を買いにどこかへと去って行った。

さてこの後は昨日忍に約束をしたミスドに行かないといけない。てかこのまま買わずに帰ったら僕は心渡を持った忍に襲われるのかな…。

そんな物騒なことを考えてるうちにミスドに到着した。その瞬間、僕の影から金髪美少女……いや忍が出てきた。

「お前様早く行くぞ。売り切れてしまう」

「そんなすぐに無くならねえよ。どこのタイムセール中のスーパーだよ」

と言いながら店に入ると不思議な目と言うか、不審者を見る目と言うか、なんとも言えない視線が突き刺さる。

そりゃそうだな、こんな田舎町に金髪少女を連れだした高校生なんて合わないもん。

いや都会でもギリアウトだろうと思うが。

まあただし、僕は通いなれてるため特には気にしない。

「お前様よ、これ全部食っていいのの？」

「良いわけねえだろ！！」

そこまで僕を苦しめたいのかお前は。

さてはお前、僕のこと嫌いだな。

横で項垂れている僕を横目に金髪美少女はキラキラした目でドーナツを見つめていた。

今となつては怪異の王の欠片すら見えない。

「お前様よ、焼きドの他にもクールミスドがあるぞ。ぱないの！」

いつからだ？このロリババアがギャル語を喋るようになったのは。

「ん？お前様今なんか良からぬ単語を出しよつたな？」

「そ、そ、そんなわけないだろ」

「そうか。ならいいが」

「危ねえ、もう少しでロリババアと言ったことがバレるところだった」

「お前様、心の声が筒抜けじゃぞ。まあ今日はミスドだから勘弁してやるっ」

さすがミスタードーナツ様。怪異の王を手なずけるとは。感謝します。

結局忍は、焼きド全種類、ポンデシリーズ全種類とゴールデンチョコレートを2つを買わされた。財布は現在とは真逆の季節の冬みために寒くなっただけど今日の朝、命を救われてるからこれで借りは返したことにしよう。

店を出て家までの帰路を忍は、影の中に入らず自らミストを手で持ち満面の笑みを浮かべながら歩いていった。

「ところでポン・デ・忍」

「僕をドーナツみたいな名前で呼ぶでない」

「いや、だってなんか3文字なら合いそうだなと思って」

「ならポン・デ・暦も合うではないか」

「何！？まさか忍お前天才か!？」

「我が主様は相変わらず馬鹿なんじゃの」

金髪幼女に馬鹿呼ばわりされた記念日になってしまった。家に着いた僕は夕飯後、明日の用意をした後、また机に向かって勉強を始めた。なんてったって僕は受験生なんだもん。

一方忍はというと、あれだけあったドーナツを20分もかからないうちに全部食べきりやがった。

その小さい体のどこにそれだけ入るんだよ。

僕でもそんな食えねえよ。

そして、さつき勉強をし始めたと言ったが何を嗅ぎ付けてか妹達が部屋に入ってきたため勉強は中断した。

「兄ちゃん、海に行くの！？いいなあ…で、一人で？」

「んなわけねえだろ！！」

どこに一人で海に行く男子高校生がいるんだよ。

「じゃあ、誰と行くんだよ？」

「か、彼女だよ」

「兄ちゃん、二次元に興味を持つのはいいけど現実とは区別つけよ
うぜ」

「三次元だよ！！人間だよ！！本物だよ！！」

どこまで信用してないんだよ、このでっかいのは。

「嘘だ！！」

叫んだのはちっこい方の妹である。
てか何？このひぐらし的展開。

「お兄ちゃんに彼女が出来るはずないよ！！」

「ストレートに失礼だな！！」

「じゃあ証拠を見せてよお兄ちゃん」

「わかったよ。今度紹介してやるよ」

「それで兄ちゃんがラブプラスとか見せてきたらぶっ飛ばすからな」

「だから人間だよ！！」

こいつには一回説教が必要だな。

そして、勉強もそこそこにいつもより少し早い眠りについた。

じよみデイリー 6 (後書き)

今回は私情を入れすぎましたwww

フェルナンド・トーレスの流れは完全に思いつきです

そついやガハラさんと阿良々木姉妹って原作では面識ありましたっけ？

完全に忘れてしまったので会っていない体でお願いしますwww

あとダメ出しとかでも良いんで一言くれるとやる気が出るんで書いてくれたら嬉しいです。

まあちゃんと最後まで見てくれる人はいないと思いますがwww

こよみデイリー 7 (前書き)

原作ではガハラさんはまだ阿良々木姉妹とはまだ会ってないみたいですね。たぶん。

偽物語で夏休み明けに紹介すると書いてたので。

あと1日1話ぐらいのペースで進んでるんですが内容が内容ですし……ね。

こよみデイリー7です。どうぞ。

翌日、いつもより睡眠時間は短かったものの寝不足感は全く感じなかった。

準備を終えた僕は戦場ヶ原の家へ向かうことにした。

まだ暗い道を一人ママチャリを漕ぎながら戦場ヶ原の家へと向かっていた。

すると目の前に物体が現れた。

その物体が何で誰なのかは吸血鬼の部分が少し残っている僕にはすぐ認識できた。

八九寺である。

なんでこいつはこんな時間に歩いているんだよ。

僕はママチャリを置いて八九寺に向かってダッシュしようとした瞬間、八九寺はこちらを向いた。

その時、僕はビククリした勢いで前に転けてしまった。

「これはこれは語り部さん」

「確かに僕はこの話の語り部ではある。しかし、もう一度だけ言う、僕の名前は阿良々木だ」

「すみません、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない!？」

「夏の間近」

「真っ只中だよ!！」

いや、筆者のリアルタイムだと本当に間近だな。6月下旬だし。

「偶然ですね、阿良々木さん。私は今たまたま散歩をしていたんですよ」

「そんな仕組みまれた偶然があるか!！そんな偶然神原だけで間に合ってるよ!！てか子供が散歩するような時間じゃねえよ。散歩と言うより徘徊だよ」

今何時だと思ってるんだよ。
まだ午前4時前だぞ。

「徘徊とは高齢者扱いですか。これで私もロリからロリババアの部類に移籍ですか」

「お前のどこにババアの要素があるんだよ。がつつり子供じゃねえか。」

ロリババアと言うのは、しん…おっと危ねえ。

もう少しでミストを店ごと買わされるとこだったぜ。

冷や汗をかきながら街灯で出来ている僕の影を見ると忍が目元まで出して睨んでいた。

何だよこの光景…子供の幽霊に、影から目元まで出ている金髪幼女。完全にホラーだよ。

貞子もビククリだな。

「まあ、ここで待ち伏せしていたのは事実ですけどね」

「目的はなんだよ」

「決まってるじゃないですか阿良々木さん。出番ですよ！で・ば・ん！！これを逃すと阿良々木さんは海に行ってしまうので私の出番はしばらく無いと思いますので眠気を我慢して待っていました」

「どんだけ体張って出たいんだよお前は！」

しばらくって1話か2話ぐらいじゃないのか？
僕にはメタ的なことはわからないが。

「出番が欲しかっただけで話はないんですけど…気をつけて行って来て下さい」

「ああ。土産話でも期待しておけ」

戦場ヶ原の家に着くと戦場ヶ原は家の前で待っていた。

「おはよう。ムササビ君」

「僕をグライダーのように滑空する動物みたいな名前で言うな。僕の名前は阿良々木だ」

「ごめんなさい、噛んだわ」

「違う、わざとだ。てかそれは八九寺のネタだ!!」

「ええ、わざとよ。何？何か文句あるの？」

「逆切れかよ!!」

「何よ。どうせ阿良々木君なんかポケモンを初めてする時に何も持たずに草むらに入ったら普通はオーキド博士が止めに来てポケモンをくれるけど阿良々木君は草むらに入っただけで誰も止めてくれなくてそのまま、ポケモンと戦闘モードに入ればいいのよ。」

「ダイレクトアタックで死んじゃうよ!!常に目の前が真っ暗になった状態じゃねえか。てかこうなったら状態じゃない、常態が合ってるよ!!なんで僕だけ丸腰で闘わなきゃ行けねえんだよ!!」

生身の人間が鼠や鳩と闘うってシニール過ぎだろ。

てか下手したら、動物愛護団体が黙っちゃいねえぞ。

「大丈夫よ。ポケモンには、道具にげんきのかけらがあるからそれを使えば」

「その主人公が瀕死で動けねえんだよ！！」

だいたいそんな序盤でその道具は出ないよ。

「まあ、私は家を出た瞬間に手持ち6匹で6匹ともLv100だけ」

「お前プロアクションリプレイ使いやがったな！！てかそれの何が楽しいんだよ。ああいうのは育てながら越していくからこそ楽しいんだろうが」

てかプロアクションリプレイってまだあるのか？

「だって強いポケモンを使って弱いポケモンを倒すと尋常じゃない早さでライフが減って瞬殺でスカツとするじゃない」

「小さい頃からそんなこと思ってたのかよ！！」

未恐ろしい子である。

「何か今余計なこと思わなかった？」

「い、いや何も思っていないよ」

相変わらず鋭いやつだ。

「そ、ならいいけど」

「そつだ戦場ヶ原、今度会ってほしいやつがいるんだけど」

「何？結婚するの？」

「お前は僕の何なんだよ！！」

「恋人よ」

僕が悪かったよ戦場ヶ原。

「妹だよ。妹。あいつら僕に彼女がいることを信用してないんだよ」

「そりゃそつよ。だって阿良々木君だもの」

「何だよ、その僕の全てを否定する言い方は！」

自分の彼氏をそんな風に言うのはお前ぐらだよ。

「それより、そろそろいいかしら？お父さんも待たせているし」

「ああ、そうだな」

「ってやっぱり父親同伴ジープかよ。」

「車に乗り込むと」

「言っておくけど阿良々木君、今はまだ深夜・早朝割増料金だから」

「金取るのかよ！！」

「うるさいわね。少しの間だけお口セメダインにしてくれる？」

「二度と開かねえよ。言っただったらお口チャックだろうが！！」

「お金に関してはもちろん冗談よ」

「セメダインは本気なのかよ」

「阿良々木君の素行次第よ」

「僕がいつ悪い行いをしたって言うんだよ。どちらかと言うとお前の方がよっぽど悪い子だよ」

「お父さん、あなたの娘は素行が悪い子らしいわよ」

なんだよ、前にもあったような似た展開は！！
これがデジャヴか！？

「それより戦場ヶ原、気になったんだけど神原と遊ぶ時っていつもどこ行つてんだ？あの部屋にいるのはさすがに無理だと思うから」

「それは私に言ってるのかしら？それともお父さんかしら？お父さん、阿良々木君が神原といつもどk」

「ひたぎさんです！！僕が聞いているのはひたぎさんです」

まあ、逆に戦場ヶ原のお父さんと神原の絡みも見てみたいっちゃ見てみたいけど。

「そうねえ、ショッピングセンターでぶらぶらするぐらいかしら。他に何もなし」

「そうか。あとあいつを呼びに行ったらいつも裸なのか？」

「いつもあの子が私の家に呼びに来るからわからないけど、今の部分は流せないわね。どういうこと？まさか私の可愛い後輩に手を出してないでしょうね？」

「出すわけねえだろ！！」

そんなことしてみる。
以前のホツチキスひたぎに逆戻りじゃねえか。

「ならいいのだけれど」

「少しぐらい僕を信用しろよ」

「信用してなかったら神原のことを任していないし、こんな話もしないわよ」

「そうか、ありがとう」

「何よ。気持ち悪いわね」

「気持ち悪いとは何だよ！！人が感謝しているのに」

「今日は暑いわね、って言おうとしたら噛んだのよ。私がそんなはしたないこと言っわけないじゃない。変な言いがかりはやめて頂戴」

「適当なことほざいてんじゃねえよ！！どこをどう噛んだらそうなるんだよ。てか冒頭で出てきていきなり僕を犬の死骸呼ばわりしてたじゃねえか」

「それは遠い昔の話よ。あの頃は若かったから」

「近いー昨日の話だよ！！」

こうした話を繰り返してるうちに海に着いたのであった。

こよみデイリー 7 (後書き)

クロネコ「勝手に出てこないで下さいよ。」

八九寺P「というか阿良々木さんと戰場ヶ原さんを会わずまでの繋ぎが欲しかったんでしょ？」

クロネコ「バレたか」

八九寺P「バレバレです」

クロネコ「ちなみにPV2000、ユニーク300を越えました。こんな駄作に付き合っ頂いて本当にありがたいことです」

八九寺P「本当そうですよ。てかあなたPVとかユニークの意味わかってないでしょ？」

クロネコ「うん。なので誰か知っている親切な方がこのページを見たら教えて頂けたら僕は嬉しくて泣きます」

八九寺P「そこまですか」

こよみデイリー 8 (前書き)

いや〜そろそろネタが思いつかなくなってます。まいりました。

てか今更ですが標準語って難しいですねwww

いつもは関西弁なんで何か変になってしまいます。

では、こよみデイリー8です。どうぞ。

「よみデイリー」 8

海に着くと戦場ヶ原のお父さんは帰って行った。

これから仕事らしい。

仕事があるのに早い時間から送ってもらって本当ありがたいですよ。

「ところで阿良々木君」

「あん？」

「朝食まだだったわよね？」

「ああそついやそつだな」

現在7時前である。

「思ったより早く着いたので朝食にしましょう」

「朝食って言ったって、海の家はまだ開いていないし、近くに店やコンビニもないぞ」

「だからそのためじゃない」

まさかこれは、手作りのサンドイッチを作って来てるから食べましょう的展開!?

「それってもしかして」

「そうよ、今から阿良々木君に海に潜ってもらって魚を採ってきてもらいます」

「なんでだよ！！なんで僕が黄金伝説的なことを朝一でしなきゃいけないんだよ！！」

クソっ少しでも喜んだ僕が馬鹿だったのか？……不幸だ

「じゃあもう1つ選択肢を増やしてあげる。この道を5キロ程行つたところにコンビニがあると思うから全力疾走で行って来て頂戴。」

「どっちもやだよ！！だいたいなんで全力疾走だよ。倒れるわ！！あとあると思うって知ってるのかよ？」

「ええ、感よ」

「知らねえんだな」

なんで海の家開いてないんだよ。僕ってやっぱ不幸な人間なのか？

「そうね、阿良々木君に幸福なんてやってくるわけないじゃない」

「だから人の心の中を勝手に読むなよ。しかも言ってることは失礼極まらないし」

「違うわよ、モノローグを読んだのよ」

「ほとんど一緒だよ!」

「まああれね、不幸中の災いよ」

「何も上手くねえよ!」

「冗談よ、ちゃんと作って来てるわよ。サンドイッチだけど」

「え!?!マジで!?!本気で嬉しい」

「ベ、ベツニアンタノタメニツクツタンジャンインダカラネー。」

「別にツンデらなくてもいいよ!」

てか出来ないんだっいたらするなよ。
カタコトで棒読みじゃねえか。

「さ、食べましょう」

「お」

戦場ヶ原手作りのサンドイッチはお世辞抜きで抜群に上手かった。
てか、こいつ料理の練習でもしてたのか?

そうこうしているうちに人も集まりだし、海水浴らしい賑わいにな

ってきた。

到着して1時間半、僕達はようやく着替えることにした。

本当1時間半も何してたんだ僕達は。

着替え終わった僕らは合流した。

戦場ヶ原の水着姿は初めて見たが………まあ文句なんてあるわけないじゃん。

と見ていると

「何ジロジロ見てるのよ、この変態ロリコン野郎」

「人聞きが悪いぞ。僕がいつロリコン紛いなことをしたって言うんだ!!」

「略してクズ」

「何も略してしてないよ!!違う悪口が出てきたただだよ!!」

「変態ロリコンクズ野郎」

「繋げるな!!」

こいつは悪口を編み出す天才か!?

「それより夏ってテンション上がるわよね」

「僕には年中同じように見えるんだが」

「失礼ね、私だって夏の曲を聴くとテンション上がるのよ」

「へえ、それは初耳だなあ。どんな曲聴くんだよ」

「aikoとか結構好きね。歌詞が可愛いし」

「aikoのオススメとかあるのか？」

「この流れからしたら夏には関係ないけどカブトムシとか好きね」

「あああの曲か。確かに良いなあ」

「少し背の高いくあなたの耳に寄せたおでこ」

なんか歌い出したぞ。

まあガハラさんの歌なんて聴くことなんてないし、このまま歌わすか。

「甘い匂いに誘われた私は下柳」

「カブトムシだよ！！オッサンが誘われたら気持ち悪いだけだろうが」

てか何で阪神タイガースの投手の名前なんか知ってるんだよ。

「あと大塚愛のスマイリーもいいわね。」

「まあ夏らしくてテンションも上がるが」

また替え歌するんじゃないかねえだろうなあ。

「殴りたい時にはとそつと側に移動する　笑つてと笑つてと君と明日会いたいと」

「そんなの歌われて会いたくなるわけねえだろ!!」

なんだよこのDVな曲は。
お前にぴったりな曲だよ。

海に入るまでにツッコミ疲れが出そうだ。

「こんなもんで疲れるとは阿良々木君も落ちたものね」

「だから平然とモノローグを読むなって言ってるんだよ」

「読心術よ」

「神原の師匠はやっぱりお前だったか!!」

「先に言っとくけど神原をエロくしたのは否定しないけど変態にな

ったのは知らないわよ」

「まあお前は少しは関与してるよ」

「話は変わるけれどこの話の筆者も結構ツツコミの場面に出くわすらしいわよ」

そうなのか？なんか話が合うかもしれないな。

「本当に変わるなあ。例えばどんなだ？」

「その前に、この筆者はコブクロが大好きだと言ったことを覚えておいて頂戴」

「ああ」

「以前コブクロがCD発売の時にライブ映像をプリントした箱のテイッシュュを2種類、数量限定のローソン限定で発売したのよ」

「ああ」

「3件周ってようやく1種類は買えたのだけれど、あと1種類がどうしても売ってなくて、仕方がないからバイト終わりに近くのローソンに行くことにしたの。夜12時ぐらいに行ったら探しても無くて、ダメ元で聞いてみようとしてレジに行ったら丁度若い人からおじいちゃんに変わったのよ。まあこの時点で誰でも嫌な予感はあるわよね」

「正直おじいちゃんよりかは若い人の方が良いな」

「その時に「すみません。コブクロのティッシュ買って売っていますか?」と聞いたら「はいはい、コブクロのティッシュね。こっちこっち」と返事が返ってきて筆者はティンションMAXで付いて行ったら、鼻セレブのポケットティッシュを渡されたの」

「コブクロのティッシュじゃなくて、小袋のティッシュじゃねえかよ!!!字にしねえと分かりづれえよ!!!」

しまったツツコミを入れてしまった。

「話のオチを一文も間違いないと言わないでくれるかしら?」

「あ…悪い」

「KYね」

「空気読めないか…今は言われても仕方がないな」

「違うわよ、暦ヤダよ」

「僕自身を全否定!?!」

「まあ筆者と阿良々木君が違うところは、筆者は心の中でそれを叫んだそうよ。周りのことを考えて」

「その言い方だと僕が周りを考えていないと聞こえるんだが」

「え…いや…その…」

「濁すなよ!!!どうせならちゃんと見えよ」

「わかったわ。邪魔」

「その選択肢は間違ってる!」

「そんなことより泳ぎに行きましょう」

「うやむやにするな!」

と言いつつも泳ぎに行く僕であった。

じよみデイリー 8 (後書き)

話が進まねえ W W W

文字稼ぎに僕の実話まで入れるとかもうこの小説終わってるな W W W

まあ地道に頑張りますよ。

てかさろそろ囀物語発売じゃないか!!

こよみデイリー 9 (前書き)

早くも9話なんですけど普通小説ってこんな早く書くものじゃないですよね？

いや…まあ…これは小説とは言えませんがWWW

てか、グダグダな会話ばっかやからすぐ書けるんかノ(^ O ^)ノ

とりあえず、こよみデイリー9です。どうぞ。

ようやく、海に来て初めての水に触った。

いやーやっぱり夏の海は気持ち良くていいな。

どうせなら神原も誘ってあげればよかったかな。

「そついや戦場ヶ原、お前って泳げるのか？」

「ええ泳げるわよ。あの出来事以来泳いでいないけど」

あの出来事とはご存知の通り蟹の件である。

蟹に行き逢った少女、戦場ヶ原ひたぎである。

戦場ヶ原は以前おもし蟹に憑かれ、重さを根こそぎ持っていかれた。

しかし、現在はその件も解決し重さも戻っている。

まあ適当な神様だったため一時的に僕の体重が増え1000キロになったのはビックリだったが。

だが、シリアスな話は今回はNGだ。

本当にKYになってしまう。

「へえ意外と泳げないのかと思ってたよ」

「見くびらないで頂戴。私の昔のあだ名はかつぱつぱよ」

「お前はどこそぞの喜翠荘の従業員だよ!!」

人のあだ名を勝手に自分のものにするんじゃないよ。
てか、いろいろなマンガやアニメを出すなよ。
いつかギャラが発生するぞ。

「嘘なんて言わなきゃバレないのよ」

「今、自分で嘘だと言うことを言ってしまったてるよ」

もしかして、こいつって案外天然なのか？

少し遊んで時間を見に行くと時間は正午を過ぎていた。
まあ、あれだけ喋っていたからな。
一体何しに来てるんだよ僕達は。

「お昼にしましょう、阿良々木君」

「そつだな」

僕達は海の家で昼食を食べることにした。

僕達は、たこ焼きと焼きそばと冷やし中華を1つずつ頼んだ。

「阿良々木君、たこ焼き食べさせてあげる。あーん」

前もこんな状況あった気がするが、悪い気なんてするはずがない

「あ、あーん」

その時、戦場ヶ原はたこ焼きを床に落としてしまった。

「ごめんなさい、私としたことが滑ってしまったわ」

まあ、今のはどう見てもわざとじゃないように見えたので

「ああ別にいいよ」

戦場ヶ原は、その後ゆっくりたこ焼きを拾うとそのまま

「ではもう一回、あーん」

「あーん。じゃねえわ！！落としたものを食わすんじゃないよ」

「何？阿良々木君、もしかして30日ルール知らないの？30日以内だったらセーフなのよ」

「アウトだよ!!言うんだったら3秒ルールだろうが!!30日も経っていたら菌が付くどころか腐るわ」

てか30日も落ちてたらただのゴミだよ

「ということは阿良々木君は30日経った状態ってことね」

「誰がゴミだよ!!」

もうモノローグを読まれることに関してなんの抵抗も無くなった僕であった。

昼食を食べた後、戦場ヶ原は

「そっぴゃ私ってスイカ割りしてたことないのよ」

「そっぴゃ僕もやったことないな」

「というわけで今からスイカ割りをします」

「唐突過ぎだろ。あとスイカなんてないじゃないか」

「大丈夫よ。阿良々木君の顔を緑と黒で塗ってスイカの代わりに割ればいいじゃない」

「事件だよ!!割って流れてくるのは果汁じゃなくて血液だよ!!」

「いいじゃない、色は一緒だし」

「そういう問題じゃねえ!!」

「じゃあ、今回は許してあげる」

今回はって、次はするのかよ。

とりあえず僕は、なんとか身を守ることができた。

「それより誰かジョーズみたいなサメに襲われるグッドイベントは起きないかしら」

「バッドイベントだよ!!何を恐ろしいこと言ってんだよ!!」

てかこいつの誰かって絶対僕のことだな。

「ひたぎクラブよりひたぎシャークの方がよかったのだけれど」

「知るか、そんなこと!!」

ヤダよ、鮫に行き逢った少女って。

恐ろしい話をされたものの、その後は当然平和に過ごせた。

てか僕に何かあったらこの話が出来てないし。

楽しい時間はすぐに過ぎるもので気付けば海が太陽でオレンジにな

る時間になっていた。

「戦場ヶ原、そろそろ帰るか」

「そうね」

そうして、僕達は着替えを済まして駅へと向かった。

電車の中で戦場ヶ原は、

「冬は以前言ってた通り北海道に行くから予定は空けときなさい」

「北海道？」

「忘れたのかしら？私の家で阿良々木君に私が裸を見られた時に言っただじゃない」

「僕が無理矢理見たみたいな言い方をするな！！お前が勝手にあの状態になっただらうが！！」

「女性の方が立場が弱いのを利用して泣き寝入りにさせようて魂胆ね。酷いわ阿良々木君」

「人聞きの悪いこと言うんじゃないか！！てか僕とお前とならお前の方が立場上じゃねえか！！」

「自分で言うって情けないと思わない？」

「うるせえ！！そんな哀れな目で見るな」

言った瞬間に思ったよ。

思ったけど事実じゃないか。

「それより思い出したかしら？」

「思い出すもなにも、あれ本気だったのか？」

「当たり前じゃない、私は嘘をついたことがないのよ」

「その言葉が既に嘘だよ」

「私が言っているのは嘘じゃないの、冗談よ」

「屁理屈だ！！」

「物は言い様よ」

「どっちでもいいよ！！」

「とりあえず冬は北海道行くから」

「行ってくて言っただって推薦で決まっている戦場ヶ原とは違って僕は受験があるし」

「そんなものセンター試験で受かりゃなんの問題もないわよ。そう

すれば2月中旬ぐらいには行けるわよ」

「簡単に言うなよ!」

「何?私と羽川さま…羽川さんが見てあげてるって言うのに受かる気配もないって言うの?」

「今、また羽川様って言ったか!」

「言っていないわよ、変な言いがかりはやめなさい。それよりどうするの?受かるの?どうなの?」

うつ…たしかにこれで受からなかったら僕はもうどこも受からないかもしれないぞ、本当に。」

「うつ…受かるようにします」

「当然よ。これで阿良々木君が滑ったらもう人生終わりよ」

「そんなになのか!」

「そうよ。話も滑っているのに大学まで滑ったらどうするつもり?」

「うるせえ!!いつ僕の話が滑ったんだよ!?!あと何回も滑るって言うな」

「え…そんな…本人に言うと…ねえ」

「何だよそのリアルな感じは!？」

落ち込むぞ。本気で落ち込むぞ。

そして、地元の駅に着き、戦場ヶ原を送った後、自分の家に帰宅した。

こよみデイリー 9 (後書き)

ついに裏サブタイトル「海物語 - こよみシー」が終わりましたWWW

次はどんな展開にしようか今考えています。

次回、久々にファイヤーシスターズの登場です？

じよみデイリー 10 (前書き)

ついに二桁いきました。

ちて、今回もおふぢけが過ぎてますが見てあげて下さい。

じよみデイリー10です。ごんげ。

家に着くやいなや妹達が駆け寄ってきた。

こんな風を書くとは兄の帰りを待っていた感じで微笑ましく思われそうだがこいつらは絶対違う。

いや、ある意味待っていたか？

「（お）兄ちゃん、お帰り」

「ああ」

「で、何か面白いことあったか？」

「面白いことって？」

「例えば、ジョーズに襲われたりとか」

「お前は戦場ヶ原か！！」

このでつかいのもいつか戦場ヶ原みたいになるのか？
……てか、ダンベルを頭に落とそうとしてる時点で同じようなもん
じゃないか。

「じゃあ、イカが侵略してきたり」

「しねえよ！！」

どごそのイカ娘だよ。

「なーんだ、イカは侵略しないでゲソか」

「語尾がおかしい!？」

「それより、お兄ちゃんいつ彼女さんを紹介してくれるの?今日は連れて来てないみたいだけど」

「ああ、そういやそんなこと言ったなあ。今度な今度」

「兄ちゃん、そんなこと言って本当はいないんじゃないかねえの?」

「いるよ!! 戦場ヶ原ひたぎって名前にいるよ」

「二次元で?」

「現実リアルだよ!! しかもこの話は2回目だよ」

「あゝ私、都合の悪いことと良いことは忘れるように作られてるんだよ」

「全部じゃねえか!! この鳥頭!!」

「何言ってるんだよ兄ちゃん、私ポニーテールだからどっちかと言ったら馬だぜ。それぐらいわかれよ」

「その頭のこと言ってるじゃねえよ!!」

こいつは馬鹿なのか？真正馬鹿か？
この先が本当に心配だよ、こいつ。

「とりあえず、約束だから忘れないでよ、お兄ちゃん」

「ああ、わかってるよ。僕は火憐ちゃんじゃないからすぐには忘れないよ」

「私がいつすぐ忘れるようなことをしたって言うんだよ？」

「おい、でっかいの。すぐ忘れたことをすぐ忘れてるじゃないか。」

つい今までそのことで話してたじゃないか。

とりあえず、このまま話していると疲れそうだったので自分の部屋に戻ることにした。
部屋でくつろいでいると携帯が鳴った。

ディスプレイには

「戦場ヶ原ひたぎ」

の名前が表示されていた。

「もしもし、どうした？戦場ヶ原」

「あら、その声とアホ面は阿良々木君ね」

「テレビ電話じゃないんだから顔が見えるわけないだろ!!」

てか自分でかけてきたのにわからないのかよ。
さすが神原の師匠。

「冗談の反対よ」

「事実じゃねえか!!」

「それより今日はありがとう。楽しかったわ」

「ああ、僕も楽しかった」

「それで考えたのだけれど夏休みに勉強の息抜きに今度は山に行こうと思うのだけれど」

「ああ、僕は全然構わないが」

「私あのアニメみたいに一回アルプスの山で大きいブランコに乗りたいのよ」

「あれは実現不可能だ!!」

「何のアニメだったかしら……思い出したわ。大自然の女ハイジね」

「アルプスの少女ハイジだよ!!」

なんだよその野性味溢れる生活をしてそうな女は。

クララもビックリですぐ立つよ。

「知ってるわよ、一緒にいる犬の名前も」

「なら聞いてみようじゃないか」

「パトラッシュ」

「ヨーゼフだ！！最終回になってもハイジは天に召されねえよ！！」

「ちょっとフランダーズの犬とアルプスの少女ハイジが混ざっただけよ。これでも私はアニヲタよ。」

「ほお、自信ありげだな」

「ええ、昔のアニメも今のアニメもどんと来い超常現象よ」

「お前、誰がTRICKの上田次郎を知ってんだよ」

「それより問題を出してみなさい。阿良々木君をギャフンと言わしてあげるわ」

「じゃあ、アップ程度に…マルコが母アンナを尋ねるためにアルゼンチンへ旅に出る物語は？」

「馬鹿にするのも大概にきなさいよ。ほとんど答えが出てるじゃない」

「だから、アップだよ」

「答えは、母をたずねて三千歩」

「近えよ！…！ご近所じゃねえか！！」

「今のはわざと間違えてあげたのよ」

「じゃあ次は、女子高生が武道館を目標に音楽をしたり、高校生活の日常を描いたほのぼのアニメは？」

「へいおん」

「けいおんだよ！確かに平穩だけど」

「もっと簡単なの出しなさいよ」

「逆ギレ！？てか、けいおんも結構簡単だよ！！」

「化物語でひたぎクラブの主演は誰でしょう。とか阿良々木暦の彼女は誰でしょうとか西尾維新さんが書いてる小説の中で斎藤千和が担当してるキャラは誰でしょうとか出しなさいよ」

「全部お前じゃねえか！！」

そんなひたぎ無双な問題がどこにあるんだよ。

「話は戻るけど山って言ったけどキャンプみたいな形で1泊するつもりだから」

「ならその辺のキャンプ場じゃダメなのか？」

「阿良々木君、この前私が連れて行った天文台覚えてる？」

「ああ、星が最高に良かった」

「あれを超えるぐらいの星をもっと近くでみたいの。だから山がいの」

「なるほどねえ」

「だから阿良々木君、それまでに探しておきなさい」

「はいはい、わかったよ」

「はいはの回よ」

「それじゃ無視だろうが！！お前絶対怒るだろ」

「当たり前じゃない。誰だって無視されたら怒るわよ」

「無茶苦茶言うんじゃないか！！」

「探して見つかったら、いつも通りのある日に今夜星を見に行こうって言いながら立ち上がって言ってよ。そうしたら、皆でたまには良いこと言っただねって笑ってあげるわ」

「完全に君の知らない物語じゃないか！！！」

ここで名曲を出すなよ。

いや、ホント名曲だよあれは。

次世代の子供達へと伝えていきたい曲だよ。

「まあ、探しておくよ」

と電話を切り何気なくカレンダーを見た。

今日は7月3日の日曜日かあ。

あれ？僕なんか忘れていないか？

それも重要なこと…。

その時、忍が出てきた。

いきなり出るなよビックリするなあ。

「お前様よ、重要なことっていうのは、あの蟹の娘の誕生日じゃないのか？」

そうだそうだがハラさんの誕生日………だ!?

そうだ、戦場ヶ原の誕生日だ!!

ナイスだ忍!!

フラインプレーだよ

「忍よく気付いた。」
「褒美にチューをしてやるっ」

「それで儂になんの得があるのじゃ!？」

とりあえず、明日何かプレゼントを買いに行くか。

こよみデイリー 10 (後書き)

え〜囃物語発売ということで読破してきました。

なんていうか…うん…まさかの展開というか…あまり言っとネタバシになるんで言わないです。

さすが西尾維新さんですよ〜

あれを見たらこんなふざけたやつを書いてて良いのかを本気で思います。

書くのを止めようかとも え

とりあえず、次回をお楽しみに〜

こよみデイリー 11 (前書き)

まあ、特に前書きはないです。

いつも通りのグダグダ感です。

では、こよみデイリー11、いってみよー。

僕は気付けば寝ていたらしく今日は妹達に叩き起こされた。

叩き起こされるといふのは普通は無理に起こされることだが僕の場合は文字通り叩き起こされたのだ。

ここで叩き起こされるまでの回想を教えようと思う。

昨日、お風呂に入った後、忍にご褒美のキスをしてやるうとした時、吸血鬼パンチをアゴに喰い、1R、TKOとなったのだ。

その時、気絶しそのまま眠りについだらしい。

永遠の眠りにつかなくてよかったよ。

そして今朝、妹達に叩き起こされたのだが、起こし方が、ちっさい方の妹が、耳の横でフライパンを叩いて、僕がビツクリして起き上がったところをでっかい方の妹の右ストレートを喰らったのだ。

どんなコンボだよ。

月火ちゃんのはまだ百歩譲って良いとしよう。

「おい。」

「お、兄ちゃん起きたか!!」

「ああ、起きたよ。お前達に対する怒りがな」

「なんでだよー。私達は兄ちゃんの為に起こしてやってんのにさあ。後、前兄ちゃんに怒られたからダンベルは使わなかったのに」

でっかい方の妹はブーブー横で言っている。

ダンベルを使わないのは当たり前だよ。

お前は僕を人間だと思っていないだろ。

いや確かに純な人間じゃないんだけどな。

「おい、でっかいの。起こしてくれるのは良いよ。ただ、お前が殴る必要はなかったよな？」

「え〜！！だってフライパンだけで終わってたら私の出番ないじゃん」

「お前の出番なんか知ったこっちゃねえよ！！」

僕は月火ちゃんを先に下に降ろし、でっかいのには軽く説教をし、学校へと向かった。

しかし、説教と言いながら例の歯ブラシ勝負になりかけたのは口が裂けても月火ちゃんには言えない。

何で言えないかって？

だって言ったら僕の体が裂けそうだもん。

通学路を歩いていると目の前に大きいリュックを背負ったクワガタ
…ではなかった。

ツインテールの少女がキョロキョロしている。

八九寺である。

しかし、僕は学習能力はある。

この前の件で、悪いことをしたと思っている。

だいたい僕は八九寺のことそんなに好きじゃないし。

仕方ない、遠回りして行くか。

僕は走り出した。

八九寺に向かって。

「はーちーくー」

その瞬間、僕の右足を何かが掴んだ。

と同時に、アスファルトの上で綺麗なヘッドスライディングをする
ことになってしまった。

犯人は、わかっている、忍だ。

「痛え。おい、忍何するんだ!？」

忍に小さい声で聞くが返事はない。

その時、八九寺が近づいて来た。

「何を一人でアスファルトの上でヘッドスライディングを決めているんですか？斧乃木さん」

「おい、八九寺、僕を「僕はキメ顔でそう言った」という語尾を付ける僕っ娘みたいな名前で呼ぶな」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない!?!」

「針撒いた」

「危ねえよ!?!」

お前はまきびしを撒く忍者かよ。

てかお前その時いないじゃないか。

なんで、余接ちゃんのこと知ってるんだよ、さすが八九寺P。

とにもかくにも今日も楽しかった。

「海はどうでしたか？阿良々木さん」

「ああ普通に楽しかったよ」

「そうですか、残念です」

「なんでガツカリしてんだよ！」

「だって阿良々木さんのことだから当然ジョーズ並のサメに襲われたりとかしたんじゃないかと思ってましたもので」

「なんでお前までそうなるんだよ！」

「阿良々木さんは襲われる以外に需要があると思ってるのですか？それって一体誰得なんですか」

「得もクソも関係ねえよ！！何だよ需要って！！お前らは僕をどこまで不幸にする気だ！！」

「それは阿良々木さんの右手に宿る幻想殺しのせいです」

「そこまで言ったら完全にアウトだよ！！お前はどこの世界と混同させてやがる！！」

「私を誰だと思ってるんですか？別の世界を持ってくるぐらい私に

は容易いことですよ上条s」

「アウトー！！それ以上喋んじゃねえ」

これ以上八九寺と話していると、とある世界に飲み込まれそうだったので僕は無理矢理話を終わらして学校へ向かうことにした。

あくまでもとある世界っていうのは僕はわからないので皆さんの想像で補ってもらおう。

だって、わからないから」とある」と言っているのだから。

と心の中で一人で思っている

「まあ、とある世界というのは魔術や科学が交差してるのよ」

「僕がせっかく濁していたのに綺麗に説明してんじゃねえよ、戦場ヶ原！！」

「綺麗だなんて朝から大胆ね。そんなこと朝からストレートに言われたらさすがに私でも恥ずかしいわよ、阿良々木君」

「お前のことを言ったんじゃねえ！！」

「そうよね、阿良々木君ごときの虫けらが私の魅力に気付くはずないわよね」

「気付いてるよ！！僕には勿体無いことぐらい知ってるよ！！」

「そ、ありがとう」

気付けば周りのクラスメイトは僕達の方を見ていた。

やられた、完全に戦場ヶ原に嵌められた。

そこへ

「朝から楽しそうだね、阿良々木君」

「おお、羽川」

「おはよう」

「ああ、おはよう。てか楽しくもなんともねえよ。どう考えてもあいつが僕をいじって楽しんでるだけじゃないか」

「そんなこと言っちゃって」

「いやいやマジだって。あと今日の勉強の担当って羽川だったよな？」

「うん、そうだよ」

「すまん！今日は休みにしてくれ」

「それはいいけど何かあるの？」

「実は、戦場ヶ原の誕生日プレゼントを買いに行こうと思って」

「そついやもうすぐ戦場ヶ原の誕生日だったねえ。それなら今日は特別に休みにしてあげる」

「サンキュー羽川。その分夜にしっかりやります」

「それより誕生日覚えてるって阿良々木君偉いね」

「え…う、うん。ア、アタリマエダロ」

「カタコトになってるよ」

「ソナナコトナイゼヨ」

「どこの時代のどこの人よ。まさか忘れてて忍ちゃんが教えてくれたとか？」

お見事です、羽川さん。

てか羽川がツツコミを入れた!?

なんでこんな時にボイスレコーダーを回してないんだ僕は。

「何でも知ってるな、羽川は」

「言わないよ？」

クソっバレたか。

良いパス出したと思ったのになあ。

オフサイドになってしまったか。

「忍ちゃんに今度お礼にミスド買ってあげなよ？」

いや、羽川。すでに土曜日に購入済みだ。

てかなんてことを言うんだ!?

これで忍が起きてたら今日の帰り大変なことになるぞ。
頼むから寝ておいてくれよ。

そうして僕は、忍が起きていないことを祈りながら学校での1日を
過ごした。

こよみデイリー 11 (後書き)

八九寺「不覚です」

クロネコ「いきなり何をでせうか!？」

八九寺「以前出た時に後書きで出るのを忘れていました」

クロネコ「いやーおかげで書くのが楽でしたよ」

八九寺「もうこれは死ぬしかないです」

クロネコ「そんなにですか!？てかもう死んでるじゃん」

八九寺「幽霊は2度死ぬんですよ」

クロネコ「死なねえよ」

八九寺「成仏する時です」

クロネコ「僕が悪かったです。それだけは勘弁して下さい」

八九寺「まあ、こんなクソ小説で私は成仏しないですよ。それこそ悔いが残ります」

クロネコ「う…」

こよみデイリー 12 (前書き)

補足ですが前話での阿良々木君とバサ姉が話している時、ガハラさんは席を外しています。

ガハラさんがいるのにガハラさんの誕生日の話をする阿良々木君は馬鹿になってしまうので一応補足をさせていただきます。

授業が終わり、戦場ヶ原と一緒に帰ろうと誘われたが、なんとか誤魔化して現在、例のショッピングセンターにいる。

さて何を買ったら良いものか。

誰か連れてこればよかったかな。

神原は、暴走するからアウトだし、羽川はわざわざ勉強を休ましてもらってるから何だか悪いし、千石はそういうなわからなさそうだし、八九寺に関しては小学生だしどこにいるかすらわからないし。僕って本当友達少ないな。

なんだかアンニュイな気分になった僕であった。

「あ、兄ちゃん」

なんだか聞いたことのある声だなあ。

振り向くと僕より身長の高い女の子が立っていた。

「こんなとこで何してんだ？でつかいの。また正義ごっこか？」

「だからごっこじゃねえって、正義そのものだ」

「まあ、どっちでもいいけど。月火ちゃんと一緒にじゃないのか？」

「うん？そりゃ時には別行動もあるってもんだぜ兄ちゃん」

「ふーん。で、何してんだ？」

「何ってシヨツピングセンターなんだから買い物に決まってんじやん。そんなこともわからねえのか？馬鹿だなあ、兄ちゃん」

鳥頭で馬鹿な妹に馬鹿呼ばわりをされてしまった。

「いや、それはわかってるけど……まあいいや」

「それより兄ちゃんは何してんだよ？」

「何ってシヨツピングセンターなんだから買い物に決まってんだろ」

しまった。馬鹿な妹と同じ返しになってしまった。

「ああそうか！！買い物か。なんで私は気付かなかったんだよ」

それはお前が馬鹿だからだよ。

ほんの十数秒前の自分の言動を覚えてねえのかよ。

「で、何買いに来たんだよ？兄ちゃん」

「まあ、誕生日プレゼントだよ」

「自分の？」

「んなわけねえよ！！彼女のだよ」

「兄ちゃんいい加減目を覚ませよ。存在してない人物に買っても金の無駄になるだけだぜ」

「だからいるっつてんだろっが！！」

「じゃあ証拠見せるよ」

「だから今度会わすって言うてるだろ」

「写真とかないのかよー」

「写真？」

写真なんてあつたか？
と携帯のフォルダを開く。
すると一枚のツーショット写真が出てきた。

あーそっぴや海に行った時にテンション上がり過ぎて撮ったんだっ
たけ？

「この前海に行った時のやつなら」

と若干ドヤ顔で見せる。

「う、う、嘘だー。嘘だー。こんな綺麗な人が兄ちゃんの彼女なわけがない！ーあーそうだ。これは夢なんだ。兄ちゃんビンタをしてくれ」

僕は実の妹にビンタを食らわした。
しかも往復。

「ほら痛くないってことは夢だ。よかったー」

「お前はどこまで頑丈なんだよ！ー本当に神経通ってるのか！？」

「じゃあ、次は兄ちゃんが叩かれるよ」

「なんでそうなるんだよ！？お前がビンタしろって言ったからやせ」

「パチーン」

説明しなくてもわかるだろう。

ビンタをされたのだ。

実の妹に。理不尽な理由で。

「痛えー！ー何しやがるこのでかいのは！ー」

シヨッピングセンターで実の妹をビンタしビンタをされる。
痛くて痛い人になってしまった。

「わかったよ。兄ちゃんに彼女がいるのは認めるよ。てか写真見せられた時点で認めていたよ」

「じゃあこのビんタは意味ないじゃねえか」

「え！？私は兄ちゃんにビんタされただけで得したと思ってるぜ」

「Mかっけー」

うん。実にMカッコイイ妹であった。

「で、何のプレゼント買った？」

「いや、それで今迷ってて。ほら、プレゼントとかあげたことないし」

「無難にペンダントで良くね？」

「ペンダント？」

「そう、ペンダント。自分もお揃いのやつ買ったらいいいじゃん」

「そうか。サンキュー我が妹よ」

「なになに礼なんていらぬよ。お金さえくれれば」

「がっつり貰う気じゃねえか！ー！」

その後、結局妹と一緒に買いに行ったのだが、というか勝手に付いてきただけなのだが、店員に「彼女さん大事にしてあげて下さい」と言われるハメになってしまった。

その言葉に火憐ちゃんは何故か上機嫌になっていた。
こいつは一体なんなんだ。

「私達恋人同士に見えるのかな？兄ちゃん！！」

何を満面の笑みで言ってやがる。

「彼氏のいるお前が何でも喜んでるんだよ！！しかも、実の兄相手に」

「それは心配ない。瑞鳥君は好きな人で兄ちゃんは愛する人だからセーフだ！！」

「アウトだよ！！いろいろとアウトだ！！」

こいつには一回、話し合いが必要だな。

ショッピングセンターを出て、火憐ちゃんは走って帰るということ
で別々に帰ることにした。

途中家へ向かって歩いていると

「お前様よ。ミスドはこつちじゃないぞ」

うん。影の中から忍さんである。

ミスド、ミスドってこいつさてはCM狙っているな。

「え？いや、別にミスド寄る予定なんてないが」

「何じゃと!?!」

と忍は水族館のショーのイルカ並のジャンプをしながら影から出てきた。

「俺が蟹の娘の誕生日をせっかく教えてあげたって言うのにそんな扱いをするかのう。あの委員長も言っておったじゃる。礼をしると」

起きてたのかよ。聞いてたのかよ。

なんであの時間に起きてるんだよ。
いつも寝ているのに。

「この前買ったところだろ」

「それとこれでは別じゃよ」

「今度買ってやるよ」

「ほお、恩を仇で返すんじゃないな」

「そんな大それたことじゃないだろ」

「僕にとっては重要なことじゃよ」

「わかったよ。5つぐらいでいいなら買ってやる」

「10個」

「なんだいらないのか」

「5個でお願いします」

結局ミスドで忍にドーナツを買って家へと帰った。
家に帰ると玄関にびしょ濡れの火憐ちゃんが立っていた。

「なんだ？風呂にでも入ったのか？」

「いや、全力疾走で帰って来たから汗かいたんだよ」

いや、それは汗ってレベルじゃないぞ。

完全に水をかぶったみたいになってるじゃねえか。

そんなことを思っているうちに僕の体が一気に湿った感触を帯びた。
でっかい方の妹が抱きついてきたのだ。

「いきなり何しやる!!」

「いやーこの不快感を兄ちゃんにも味わって欲しくてー」

「味わいたくねえよ!!なんの嫌がらせだよ。離れろ!!」

その時、2階からちっこい方の妹が降りてきた。

「何してるん？」

なんで関西弁なんだよ。

「頼む月火ちゃん、こいつを引き剥がしてくれ」

「玄関で兄妹で何イチャイチャしとんねん。ちょい待ったとき」

だから、なんだよその関西弁は。

そう言いながら奥へと歩いていった。

ん？これってヤバいんじゃない？

「おい、でっかいの！今すぐ離れる。離れないと大変なことになる」

「何言ってるんだよ兄ちゃんは。まさか抱きついたことで欲情したとか！？」

「するわけないだろうが！！」

そんなやりとりをしてるうちに月火ちゃんが戻ってきた。
右手に果物ナイフを持って。

「いつまでそうしてるつもりなん？」

僕は本気で身の危険を感じたため火事場の馬鹿力というやつが出たのだろうか。

でっかいのを引き剥がすことができた。

その後、僕と火憐ちゃんは月火ちゃんに説教をされたのは言うまでもない。

その後は何事も無く日々が過ぎ、7月7日、戦場ヶ原の誕生日を迎えた。

こよみデイリー 12 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「なあなあ月火ちゃん、今日関西弁使ってたよな？」

月火「そうだねえ。私自身は関西弁よくわからないけどここの筆者が勝手に使っちゃうから使うハメになっちゃうんだよ」

火憐「とんだ迷惑やろうだな」

月火「本当そうだね」

火憐「それでは予告編クイズ」

月火「クイズ」

火憐「最近ではこの小説の癖が出てるのか日常でも標準語でツッコミをいれてしまう筆者だって」

月火「クイズじゃなくて筆者の現状報告だね」

火憐&月火「次回、こよみデイリー12」

火憐「次は沖縄の言葉とか言われたら大丈夫か？」

月火「なんくるないさ」

こよみデイリー 13 (前書き)

なかなかネタが思いつかず間が空いてしまいました。

今回は少し短いですがこよみデイリー13です。どうぞ。

7月7日、今日もいつも通り妹に叩き起こされた僕がいた。

今日は八九寺に会わなかったためかいつもより早く学校に着いた。

うーん：八九寺に時間を合わせて会わなかった時のことを考えていなかったなあ。

そんなことを考えていると

「あら人の死体が転がっていると思ったら阿良々木君じゃない」

「前より酷くなってる！？てかそれは事件だよ！！人の死体が転がっていたら」

「商談よ」

「キャリアウーマンだったのかお前！？」

「私にかかれば交渉事なんてあつという間よ」

「お前に任せると全て破談になりそうだよ」

「失礼な。阿良々木君も私の件の時にわかったはずよ。沈黙と無関心を約束してもらった時、阿良々木君ったら言葉を発するどころか口を閉じて2回頷いて交渉成立したじゃない」

「無理矢理じゃねえか！口は閉じてねえよ！！てかお前が閉じたんだろ。ホッチキスで」

「さあ、なんのことがさっぱりだわ」

「とぼけんじゃねえよ！！」

「私の脳は阿良々木君に関しての記憶は消えるようにできてあるのよ」

「ピンポイントかつ悪質な脳だな！！」

「冗談よ。阿良々木君の良いところだけ忘れるだけよ」

「それだと僕が残念な子にしなければならないじゃないか！！」

てかマイナスなイメージしか残ってないじゃないか。

「残念な子は今更始まったことじゃないから安心していいわよ」

「なんの安心だよ！！」

戦場ヶ原が冗談を商談と囁んだことで僕への口撃はヒートアップしていくとは思わなかったな。

そんなこんなでいつの間にか時間は過ぎHRの時間になるうとしていた。

とりあえず、戦場ヶ原からは誕生日のキーワードが出なかったので僕が動揺することはなく、今日の授業を終えることができた。

授業を終え、僕は戦場ヶ原の家へ向かった。

「お邪魔します」

「邪魔するなら帰って頂戴」

「いきなりなんだよ!!」

「吉本新喜劇みたいな流れになるかなと思って。本当ノリが悪いわね阿良々木君」

「僕は関西人じゃないから知るわけないじゃないか」

「嘘よ」

それからしばらく目的である勉強をしたが

「そろそろ休憩にしましょう」

「ああそうだな」

「そうしないと阿良々木君の脳がパンクするわ」

「一言余計なんだよ」

「阿良々木君の頭の容量って100キロバイトよね？」

「少な過ぎだよ！携帯だと写メ1枚で終わりじゃないか。ギガとかテラですら足らないよ！そんな値も越えてもつとあるよ！」

「え！？そうなの？」

「なに真面目にビックリしてやがんだ！」

「だって阿良々木君の口からギガとかテラって単語が出たから」

「お前僕を馬鹿にしてるんだな！？そうだな！？」

「馬鹿にしてるんじゃないわよ。馬鹿なのよ」

言い返せなかった。

いや、言い返すとより酷くなって返ってくるので諦めたが正解だ。

「お茶入れてくるわね」

「ああ、ありがとう」

戦場ヶ原がお茶を入れて返ってきたところでプレゼントを渡した。

「戦場ヶ原、誕生日おめでとう」

「え！？何！？爆弾？それとも何か悪いことでもしたの？」

「素直に喜べよー！！」

「冗談よ。ありがとう。とても嬉しいわ」

「ならよかった」

「阿良々木君は誕生日プレゼント何が良い？ゲーム？」

「お前は僕の親か！！」

「だって阿良々木君って友達少ないからゲームの中だけでも友達を多く作ってもらおうかと思って」

「そんな気遣いは要らないよー！！」

「ならどんな文房具がいいのかしら？」

「僕は以前のお前じゃない」

「いや、私も今では使わなくなったから処分に困っているのよ。こんなにハサミやらホッチキスは要らないもの」

「僕はお前のゴミ収集業者じゃないー！！」

「当たり前じゃない。阿良々木君はゴミそのものよ。燃えるゴミよ」

「またゴミ扱いかよ。僕は燃えるゴミじゃない!」

「え!?! 燃えないの? ならお葬式の際は火葬ではなくて埋葬ね」

「そついう意味で言ったんじゃねえよ!」

「なら何が良いの? 婚約届?」

「急に重たいよ!」

「ガハラジョークよ」

「なんだガハラジョークって!」

いや、正直ガハラジョークってネーミングセンスは有りだな。

「まあちゃんとしたやつプレゼントするから楽しみにして頂戴な」

「あ、ああ、楽しみにしてるよ」

色んな意味で楽しみだよ本当に。

この後、僕達は何事もなかったかのように勉強に戻った。

こよみデイリー 13 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「実はこのこよみデイリー13って戦場ヶ原さんの誕生日に合
わして7月7日に投稿するつもりだったらしいぜ」

月火「結局、間に合わなかったみたいだね」

火憐「その理由が間に合いそうだったのにニコ動を見ていたらいつ
の間にか日付が変わってたんだって」

月火「とんだ間抜けバカ野郎だね」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「私は来週出るでしょうか？」

月火「筆者すらわからない答えを読者がわかるはずないよー」

火憐&月火「次回、こよみデイリー14」

火憐「短冊には神様が昇進します様にと書いたぜ」

月火「神様が最高位だよー」

こよみデイリー 14 (前書き)

最近ネタが本当に浮かんできません。

でも見てくれている人が1人でもいる限り書き続けます!!!
うるせえ
う

戦場ヶ原の誕生日も無事に済み、早くも週末を迎えようとしていた。時は金曜日の夕方、僕は一週間の疲れを感じながら帰宅をしていた。

「なんか僕って一週間を早く感じる割にはやたら疲れるな」

と一人言を呟いた時

「そうなのか？」

そう言いながら僕の横を駆け抜けて目の前で急ブレーキをかけたように止まる少女

「やあ阿良々木先輩、奇遇だな」

神原である

「お前これに関しても奇遇じゃねえだろ」

「さすが阿良々木先輩だ。お見通しつてわけだな。いや、なに、学校にいと阿良々木先輩が呟いたのが聞こえたのでな。走ってきたのだ」

「お前の耳は地獄耳か!!」

地獄耳でもそんな聞こえねえよ。

「何を言ってるんだ阿良々木先輩。阿良々木先輩の音が聞こえるのだぞ?天国の耳ではないか」

「そういう意味で地獄って言ったんじゃないよ」

しかも、道端で堂々と恥ずかしいことを言いやがった。

てか聞いてるこっちが恥ずかしいよ。

「そついや今週、戦場ヶ原先輩の誕生日だったな」

「ああ、そつだよ」

「本当偶然だな。こればかりは」

「え?もしかしてお前も誕生日だったのか?」

「ああ、私の愛読しているBL本の新巻の発売だった」

「知るか!!そんなこと!!」

その言い方だったら完全に誕生日が一緒だろ。
なんの偶然でもないよ。

「しかも日にちも戦場ヶ原先輩と一緒にだぞ」

「だから聞いてねえよ!!」

誰かこいつを止められるやつはいないのか。

「それより神原、今週の日曜空いているか？」

「空いていなくても阿良々木先輩のためなら無理矢理にでも時間を
作る」

相変わらず頼りになる後輩だ。

「そろそろ部屋を片付けに行こうかなと思ってな」

「それは助かる。そろそろ部屋が変態…おっと、私がいまに
変態のために大変を変態と噛んでしまった」

「無理矢理過ぎるだろ。あと少しぐらいは自分で片付けてみるよ」

「いや〜ほら言うじゃないか、片付けより三度の飯って」

「ただの規則正しい生活してるやつじゃねえか!..!」

まあこれが神原なんだが。

「まあそついうことだから頼むよ」

「ああ、了解した」

その後颯爽と去って行った。

家に帰ると家の前に一人の少女が逆立ちの状態で立っていた。

いや、あいつしか居ないんだけど。

あのでっかい方の妹である。

「おい、でっかいの。一体何をしてるんだ?」

「おお兄ちゃん、お帰りー。今丁度逆立ちで街を一周してきたところだ」

「頼むから僕をこれ以上疲れさせないでくれ」

「勉強できない兄ちゃんがなんで疲れるんだよ」

「勉強はできなくても勉強はするわー!!」

「保健体育の？」

「中学生か!!」

このまま逆立ちをした女の子と話す男子高校生がいるのを見られては阿良々木家の評判にも繋がるのでとりあえず家に入れた。

「お兄ちゃん、火憐ちゃんお帰りー」

「ああ、ただいま」

「ただいまー!!」

「珍しいね、お兄ちゃんと火憐ちゃんが一緒って」

「ああ、帰ってきたら家の前でこいつが逆立ちでいたんだよ」

「今日もトレーニングお疲れー」

どんなトレーニングだよ。

「なんて言っただって火憐ちゃんはファイヤーシスターズの神風特攻隊だからね」

「ほお、片道分の体力だけを持って行くのか」

家に帰ってこれないじゃねえか。

この街にどんだけ命をかけてんだよこの妹達は。

「そつだお兄ちゃん、最近この辺で都市伝説が増えたの知ってる？」

「都市伝説？」

「うん。学校のパソコンで調べてたら見つけて、今度はその調査するの。それで火憐ちゃんはトレーニングしてるんだよ」

「へえ。どんな都市伝説だ？」

「えーとねえ、今わかっているのが、文房具を武器にして襲う女の子と電車より速く走る女の子とリアル猫耳の女の子とツインテール女子小学生にセクハラをする男子高校生」

なんなんだそいつらは？

てかさんなやつら本当にいるのかよ。

あれ？てかなんか変な汗が溢れてきたぞ。

おかしいなあ、風邪かな。

「へ、へ、へ、へえ」

「お兄ちゃん何か知らない？」

「し、し、知らねえなあ。僕は全然知らないぞ。知るわけないぞ。うん」

「そっかあ。でもこの中で一番許せないのはセクハラ高校生だよね、お兄ちゃん？」

「そ、そ、そうだなあ。本当最低なやつだよなあ」

月火ちゃんのそのタレ目が何か知ってそうだと本当に怖いよ。

「そこで、私がセクハラ高校生を見つけてちょっとお灸を据えてやるうかと思ってトレーニングしてんだよ」

「お、お、おう、そうか。あ、あんまり無理するなよ」

「おう！てか兄ちゃんなんか顔色悪いぞ」

「い、い、いや大丈夫だよ」

「疲れてるんじゃないの？兄ちゃんもあんまり無理するなよ」

「あ、ああ」

なんとかこの場を抜け出し、自分の部屋に戻った。

「なんだよ都市伝説って！！全部僕の周りにいるやつじゃねえか！

「！」

「良かったのぉ、お前様よ？まだ金髪美少女を連れた男子高校生がミスドに来るとかが無くて」

忍である。

「ああ、それが出たらすぐにあいつらは僕だと答えに辿り着くだろうな」

「お前様も大変じゃな」

忍は笑っている。

うん、こいつ僕のピンチを楽しんでやがる。

「クソっこうなったらあいつらの口を塞ぐしかねえな。忍、血を吸ってくれ」

「何を怖いことを言っておるのじゃお前様！！実の妹君じゃろうが」

「大丈夫だ。火憐ちゃんはタフだし月火ちゃんは不死身だから」

「あの下のしでの鳥の妹のことは良いとして、上の妹の理由がタフってどんな理由じゃ！！」

「なんだよお前だって羽川のこと携帯食料って言ってたじゃねえか」

「あれは若気の至りじゃよ」

「うるせえ！！500歳の老婆の本気だったじゃねえか！！」

「まああの蟹の娘はもう更生したみたいじゃし心配はないじゃろう。猿の娘は速いというだけじゃから逆に凄いと思われるじゃろ。委員長は筆者が猫物語のことがあった体で書くかが問題じゃな」

「久々のメタ発言かよ。ビックリするなあ」

いや、でもそうだな。

うん、たぶん日が進んで猫物語の日にちと同じ日になったら設定を入れてくるだろう。

てかそれだったらもう少して戦場ヶ原はドロるのか。

「それより問題はお前様じゃよ。一番説明されやすいではないか」

「そうだなあ。八九寺に合っても、またやりそうだなあ」

「少しぐらい我慢ができんのか」

「まあ頑張ってみるよ。あとミスドも行かない方が良いな」

「お前様、妹君達に処刑されるのは仕方がないことじゃな」

「お前自分がミスドに行きたいだけに僕の身の安全を捨てたな！？」

「なら僕はどうやってミスドを食べればいいのじゃ！！」

「食わなくても死なねえよ!!」

「それで死んだら責任をとれるんじゃないかな?」

「だいたいそれで死ぬだったらもつと前に死んでるだろ?ミスドができる前に」

「今はミスドが栄養源になっておるのじゃ」

完全に現代っ子じゃねえか。

「もし、お前様がミスドに行かないと言っただけじゃなかったら、僕はあの蝸牛の娘に走っていくお前様の足首を毎回掴むからな」

「よし、ミスドは行かないといけないな」

結局、僕に打開策は神からの許可が降りなかったようだ。

そう思いながら今までと同じ生活をすることを決めた瞬間でもあった。

こよみデイリー 14 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「今日は都市伝説の話題だー!!」

月火「だー!!」

火憐「地球上のオナラを集めて爆発させると南半球がぶっ飛ばらし
いぜ」

月火「なぜ南半球!? 北半球は!？」

火憐「それでは、予告編クイズー!!」

月火「クイズー!!」

火憐「なぜ南半球なのでしょう?」

月火「だからそれを聞いてるんだよー」

火憐&月火「次回、こよみデイリー15」

火憐「どうなったかはあなた次第です」

月火「ようは知らないんだね」

こよみデイリー 15 (前書き)

誰かネタを提供してくれる人はいないですかねえ。

あ、ちなみに後書きを途中からアニメの化物語風にしたのはスルーして下さいwww

では、こよみデイリー15です。どろろ

僕が都市伝説の中心になりつつある今日この頃、どうにかこうにか日々を過ごしていた。

そして、今日は日曜であり、神原の家に掃除をしに行く日である。

そして、なぜか今日はいつもより少し早めに目が覚めた。前にもこんなことあったよな？とドアに目を向けた途端

「兄ちゃん起きろー」

「お兄ちゃん起きなよー」

デジャブか？

「あれ？兄ちゃん今日も早く起きたのかよ」

「ああ、それより右手を上げて持っているゴルフクラブを降ろせ」

「やあ！...」

ドーンという音と共に僕のベッドが揺れる

「何しやがんだ！！」

「え！？だって降るせって言ったじゃん」

「降り下ろせなんて一言も言っただけよ！！お前は僕を殺す気かあ
！！」

もしかして八九寺の件がバレたのか？

「あの世にホールインワン！！！」

「上手くねえよ！！おい、月火ちゃんからも何か言っただけよ
よ」

「私はウォーターハザードになっちゃったかも」

「それは三途の川か！？」

「あ！でも大丈夫！打ち直しは向こう側にちゃんと打つから」

「渡らすんじゃないよ！！！」

朝からなんだよ、コイツらは。

「で、兄ちゃんこんな早く起きてどこか行くのか？」

「ああ、ちよつと早く起きてしまったけど」

「ふーん。まあ私達はセクハラ高校生探しに行くんだけどな」

「お、おう、気を付けてな」

「何だよ気持ち悪いなあ。いつもそんなこと言わないくせに」

「いや、あの、あれだよ、兄貴としての優しさを改めてわからそうかと思つて」

さすがにこれは無理があつたかな。

「そんなことしなくても兄ちゃんは優しいのはわかつてるよ」

バカな妹でよかつたと思つた瞬間であつた。

妹達の口撃もなんとかすり抜け現在神原の家に行くために自転車を走らせていた。

その時、前にはツインテール八九寺が現れた。

僕は自転車を止めて八九寺に駆け寄ろうとした時、八九寺がこちらを向いた。

「これはこれはドアラムさんではないですか」

「八九寺、僕をバツク転を何回も失敗した某野球球団のマスコットキャラクターみたいな名前で呼ぶな。僕は阿良々木だ」

「すみません、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた！」

「わざとじゃない!？」

「ガチすぎた」

「本当に噛んだのかよ!！」

うん。今日も良い一日になりそうだ。

「お久しぶりです阿良々木さん」

「久しぶりって言うても1週間ぶりぐらいじゃないか」

「いやいや阿良々木さんと会えない日が続くと長く感じるものです
「よ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか」

「はい！これで読者からの私への好感度が上がったと思います」

「台無しだよ！！」

「恩人にそんなことを言ってもいいんですか？」

「恩人？」

「はい。最近都市伝説の中心になりつつある阿良々木さんが私に抱きついてくるのを止めてあげたのですよ」

「何！？もう八九寺まで話が届いてるのか！？」

「はい！それはもう、文房具少女の戦場ヶ原さんや猫耳少女の羽川さんまで」

「ふっふっふ、お前は知ってはならないことを知ってしまったな」

「いや、だいぶ前から知ってますし」

「こうなればお前の口を封じるしかないな」

「もう死んでますって」

「まあ冗談はおいといて、別にぼ、ぼ、僕はき、気にしてないしな」

「めっちゃくちゃ気にしてるじゃないですか」

「そりゃそうだろ！！犯人は僕の妹に処刑されるんだぞ！！」

「いいじゃないですか。阿良々木さんは死なないんですし」

「死ななくても痛みは感じるよ!!」

「まあ自動自得ですねっ!!」

「僕の意味は無視に動いていたのか」

それを言うなら自業自得だろ。

「その犯人が兄だと知ったら妹さん達はどう思うか」

「躊躇なく襲ってくるよ」

「お見舞いは行きますから安心して下さい」

「襲われる前提で話を進めるんじゃないやねえ!!」

「それよりどこか行くんですか？」

「ああ、神原の部屋を掃除しにな」

「もうそんな時期ですか。」

「そんな時期ってなんで知ってるんだよ」

「私を誰だと思ってるんですか？」

「さすがは八九寺P」

「私にかかれれば小説の内容を変えることも簡単です。まよいオンリーとか」

「お前しか出てないじゃないか」

「私一人で十分です」

「ただの独り言になるだけじゃねえか」

「独り言というより永遠と私の良いところを話し続けます」

「ん？1話完結の短編小説か？」

「失礼な！100話までします。いざとなったらゲストに戦場ヶ原さんと羽川さんと千石さんと神原さんと忍野さんと忍さんと火憐さんと月火さん呼びます」

「主人公の僕がいなくてどうということだ！？」

「まよいオンリーは私が主人公ですので阿良々木さんがいなくてもなんの問題もありません」

「新手のいじめか！！ある意味公開処刑じゃねえか！！」

「まあ冗談はここまでとして、もっとお話をしたかったんですが阿良々木さんが遅れるといけないので今日はここまでです」

「ああ、またな」

「はい、またお会いしましょう」
八九寺と別れ、神原の家に着いた。

そして現在、神原の部屋の前にいる。

なぜ入らないかと言うと以前、開けた途端神原が裸で立っていたからだ。

八九寺と別れ、神原の家に着いた。
そして現在、神原の部屋の前にいる。

なぜ入らないかと言うと以前、開けた途端神原が裸で立っていたからだ。

僕は深呼吸をして喋りかける

「神原入るぞ」

「ああ」

扉を開けて神原を見ると普通に服を着ていた。

なんだかんだ言ってたけどこう普通に服を着ているのは意外だった。

「どうした？阿良々木先輩。そんな意外なモノを見たような目をして」

「いや、なんでもない」

「あーそうか。脱げばいいんだな。そうか、それは悪かったな」

「僕が悪かった！僕が悪かったから脱がないでくれ」

「どういう光景だよ。」

「女子高生が服を脱ぐのを止める男子高校生って世界中探してもここだけだよ。」

「とりあえずさっさと片付けるぞ」

「そうだな。今日は私も手伝うぞ」

「お、おお。そうか」

「いや、まあ自分の部屋なんだから手伝うのは当たり前なんだが。」

「掃除を全くしない神原と言っても一人ですれば少し早く終わると思っただけだ。」

「がその考えはすぐに崩された。」

「おい神原」

「なんだ？阿良々木先輩」

「なんで来た時より散らかってるんだよ」

いや、まあ自分の部屋なんだから手伝うのは当たり前なんだが。

掃除を全くしない神原と言っても二人ですれば少し早く終わると思
っていた。

がその考えはすぐに崩された。

「おい神原」

「なんだ？阿良々木先輩」

「なんで来た時より散らかってるんだよ」

「阿良々木先輩ちゃんと片付けてくれないか？」

「お前だよ！！今からお前に掃除の仕方を教えてやる」

そうして神原に掃除を教えながら掃除をしたため終わった頃には外
は綺麗な夕焼けが広がっていた。

「もう夕方じゃないか」

「助かったぞ阿良々木先輩。どう礼をしていいかわからない」

「いや、いいよ。僕が好きでやってるんだし」

「そうか脱げばいいのか」

「お前僕を馬鹿にしてるんだな。挑発してんだな!？」

「挑発と言うより誘惑の方が合ってるんじゃないか？」

「うるせえ!!とりあえず脱ぐな!!」

「人間というのはするなと言われたらしたくなるものなのだ!!反
対のことをしたくなるのだ」

「いや確かに悪戯とかはわからないでもないが」

「悪戯とはなんと卑猥な!!」

「そういう意味じゃねえよ!!一般的な意味でだよ!!」

「私の中では一般的だと思うのだが」

「一般的じゃねえよ!!」

「とりあえず、脱ぐなと言われたら脱ぎたくなるのだ」

「わかった、じゃあ脱げ」

「脱いで良いのか!?!じゃあ遠慮なく脱がしてもらおう」
「脱ぐんじゃねえよ!!」

「どっちなんだ阿良々木先輩」

「それは僕のセリフだ！！反対のことをしたくなるんじゃないかねえのか
！！」

「脱げと言われたら誰だって脱ぎたくなるだろう」

「ならねえよ！！結局、どうしたらいいんだよ」

「要は脱ぎたいのだ」

「僕の反論の苦勞を返せ！！」

「そんなことを言われても仕方ないではないか」

「ってそんなことを言いながら堂々と脱いでんじゃねえよ！！わかつた、わかつた。僕が悪かった」

なんだよ。

どのルートを通ってもエンディングは一緒だったのかよ。
なんてクソゲーだよ。

その後なんとか脱がすのを阻止した僕は少し休憩した後帰宅した。

こよみデイリー 15 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「笑っていいもってあるじゃん。あれのテレフォンショッキングで明日無理ですって言った人っているのかな？」

月火「どうかなあ。さすがにいないと思うけど」

火憐「でも過去にゲストが間違い電話でかけた一般人が出たことあるらしいぜ」

月火「観客も視聴者も啞然だね」

火憐「私達も傷物語の作り間違いから偽物語にならないかなあ」

月火「200%ないよ」

火憐「それでは、予告編クイズ！」

月火「クイズ！」

火憐「笑っていいともが5000回記念の時、地球が何周回った時だった時でしょうか？」

月火「小学生しか出さないよ、そんな問題」

火憐&月火「次回、こよみデイリー番外編」

火憐「次回も見てくれるかな？」

月火「いいともー!!」

こよみデイリー 番外編（前書き）

最初に言っておきますが今回は今までで一番クソな内容であり、見なくても本編に全く影響はありませんので、お時間がある方は見てあげてください。

それでは、こよみデイリー 番外編です。
どうぞ。

こよみデイリー 番外編

クロネコ「今回は番外編ということで僕も参加して僕主体でお送りします。そしてゲストはこの方たちです!!!」

八九寺「読者の皆さんコンバトラー!!!皆さんのアイドル八九寺真宵です!!!」

阿良々木「どうも、阿良々木暦です」

クロネコ「では、この3人で（祝）15回記念として番外編をお送りします!!!」

八九寺「それよりクロネコさん。なぜ10回目でもなく20回目でもなく15回目なんですか?」

クロネコ「良い質問ですねえ」

阿良々木「何だよその池上彰さんみたいな喋りは!!!」

クロネコ「いや〜1回言ってみたくて〜」

阿良々木「私情を持ってくるな!!!」

クロネコ「今回ぐらい良いやん!!!話を戻すけど、なぜ15回かと言つと10回の時点で忘れてたからです!!!」

阿良々木「まあそんなところだよなあお前の場合は」

八九寺「あとPVが10,000を超えたのもあるんですね？」

クロネコ「さすが八九寺P!!!」

八九寺「まあ未だにPVとユニークがわかってないかと思いますが」

クロネコ「うん。PV13,500のユニーク1,600って言われてもさっぱりです!!!」

八九寺「やっぱりでしたか」

クロネコ「でも見てくれる人が1人でもいる限り書き続けます!!!」

阿良々木「閲覧者が0人になったらどうするんだよ？」

クロネコ「止めます」

阿良々木「意思弱っ!!!」

クロネコ「だって〜読む人おらんかったら書く気ならんもん〜」

八九寺「いい年した人が駄々をこねないで下さい」

クロネコ「大丈夫!まだ高校生に見られるから!!!」

八九寺「そういうことじゃなくて」

クロネコ「前タバコを買いに行ったら免許証を3度見されました!!!」

阿良々木「え！？お前タバコ吸うの？」

クロネコ「吸わんよ。友達の誕プレに買って行くかと思って生まれて初めて買った」

阿良々木「そういうことか。てかこの回意味あるのか？グダグダ喋ってるだけじゃないか」

クロネコ「あるわ！！僕が関西弁を普通に使える場である！！」

阿良々木「だからお前の私情を僕達の話に入れてくるんじゃないか！！」

クロネコ「だってお前達の話って基本標準語やから癖で日常でも標準語でツツコミを入れてしまう時あるねんもん！！」

阿良々木「知ったこっちゃねえよ！！」

クロネコ「そんな言い方すんねんやったら妹達の処刑を受けるように話を進めていいんやで」

阿良々木「僕が悪かった。許してくれ」

八九寺「なんですかこの情けない二人は。それよりクロネコさんにお聞きしたいことがあるのですが」

クロネコ「何でしょう？」

八九寺「この小説ってオチというか終わりはあるのですか？」

クロネコ「今年の夏も暑いと思わないか？阿良々木君」

八九寺「話を変えました！！あからさまに変えましたねクロネコさん」

クロネコ「この世には聞いても良いこととそうでもないことがあるんですよ八九寺さん」

八九寺「聞いてはいけないことはないんですね」

クロネコ「まあ正直に言いますと終わりは今のところ考えてないんで阿良々木さんにはもつとがんばってもらわないといけません」

阿良々木「例えばどうしたらいいんだよ？」

クロネコ「うーん。大学受験に落ちたり、留年したり」

阿良々木「絶対嫌だよ！！そんなことしたら戦場ヶ原に何を言われるかわかんねえよ」

クロネコ「ケチやなあ。スーパー玉出は1円セールしてんねんぞ」

阿良々木「知らねえよ！！なんだよスーパー玉出って」

クロネコ「何！？スーパー玉出を知らんのか！？お前もう関西から出て行きやがれ！！」

阿良々木「その前に僕は関西に住んでねえよ」

クロネコ「じゃあ、お前のところにあるミストをスーパー玉出に変えてやるうか？」

阿良々木「いや、僕はいんだけど忍に何されるか知らねえぞ」

クロネコ「仕方ない諦めるか」

八九寺「というかグダグダ過ぎませんか？」

クロネコ「うん。僕も薄々は気づいていました」

八九寺「テーマを決めてやった方が絶対良かったじゃないですか」

阿良々木「それは僕も思う」

クロネコ「二人で責めるなよ。だって笑っていいともでもタモさんと千原ジュニアと鶴瓶がテーマ無しで話してるやん」

八九寺「それはプロだからですよ」

クロネコ「いいよ。じゃあ次回はテーマを決めてやりますよ」

八九寺「次回は無いと思いますが」

クロネコ「この番外編がコケすぎて？」

八九寺「その前にこの小説自体が打ち切りになるかもです」

クロネコ「もう少し頑張らせて下さい」

八九寺「ところで阿良々木さん、今日はいつもより静かですけどどうしたんですか？」

阿良々木「だって変にツツコミを入れるとコイツに何されるかわかったこつちゃねえもん」

クロネコ「イエス!!」

八九寺「じゃあ私が良いこと教えてあげましょう。私はクロネコさんよりも立場が上です。なのでクロネコさんが決めたことでも私がおもひ消すことぐらいちよちよいのちよいです」

阿良々木「てことは僕は普通に言い返せるってことか!？」

八九寺「まあ助けませんが」

阿良々木「なんでだよ!!」

八九寺「今までしてきたことをお忘れですか？私のファーストタッチを奪い、それ以降もセクハラを繰り返してきたのに」

阿良々木「あ、あれはスキンシップだよ」

八九寺「あんなスキンシップがあつてたまるものですか!!」

阿良々木「わかった。僕が悪かった。許してくれ」

八九寺「じゃあ、もうしませんか？」

阿良々木「それはむりだ！」

八九寺「なんでそこだけ今までで一番の即答なんですか！？反省の色が見えませんか！！」

阿良々木「僕の反省の色は透明だ」

八九寺「そんな屁理屈な答えはいりません！！」

クロネコ「あ、あの〜僕を忘れて二人で話さないでもらえますか？」

八九寺「あーまだいたんですか？」

クロネコ「作者の扱い酷くないですか？」

八九寺「てか私達の話に勝手に出てこないで下さい。あなたは書いてればいいんです」

クロネコ「僕の頑張りを見てないんですか！？」

八九寺「それよりそろそろ終わりですよ。最後ぐらい作者らしいことをして下さい」

クロネコ「え〜本日の番外編はどうでしたでしょうか？本編以上のグダグダ感が否めませんがたまには良いかなと思っています」

八九寺「いやいつもグダグダやったら意味ないじゃないですか」

クロネコ「そこはスルーして下さい。それでは予告編クイズ！！」

八九寺「それは後書きで火憐さんと月火さんがするのでやらなくて良いです」

クロネコ「うっ…じゃあ、次回、こよm」

阿良々木「ストップ！それもするからやらなくて良い」

クロネコ「じゃあ、何をしたら良いんですか…!!」

八九寺「それでは今回お送りしたのは、皆さんのアイドル八九寺真宵と」

阿良々木「阿良々木暦と」

クロネコ「クロネコがお送りしました。次回の番外編は20回目か30回目か未定です」

八九寺「やっぱりグダグダですね。さすがクロネコクオリティ」

クロネコ「ちなみに次回の番外編のゲストはヴァルハラコンビの神原と戦場ヶ原さんだと思います。それではまた」

こよみデイリー 番外編（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「なあ月火ちゃん、この回って15回記念なのに16回目にしてるよな？」

月火「仕方ないよ作者さんが馬鹿なんだから」

火憐「あと、この回さすがにグダグダ過ぎねえか」

月火「うん。でもたぶん作者さんが一番わかってると思うよ」

火憐「これに私達も出る日が来るのか？」

月火「望みは少ないけど、あるね」

火憐「このグダグダ感に巻き込まれると思うと憂鬱だぜ」

月火「だねー」

火憐「それでは、予告編クイズ」

月火「クイズ」

火憐「七夕の日に皆は何をお願いしたかな？」

月火「ただの質問じゃん！」

火憐&月火「次回、こよみデイリー16」

火憐「番外編には出なくて済みますように」

月火「もう七夕は終わったよ」

こよみデイリー 16 (前書き)

さて大コケしたと思われる番外編から本編に移しまして、番外編の方を見た方は忘れて下さい。

では、こよみデイリー16、行ってみよー。

都市伝説の中心になりつつあると言ったがまだバレていないのか、平凡な日々が過ぎ、終業式の日になった。

終業式が終わり、HRも終わったため皆は帰って行ってるが、僕は教室で羽川と話していた。

「1学期も今日で終わりかあ」

「そうだねえ。この1学期っていろいろあったよね」

「そうだなあ。この1学期で羽川とも話すようになったし」

「戦場ヶ原さんという彼女もできたしね」

「一生分の出来事をこの3ヶ月に全て体験したような気分だよ」

「一生かかっても普通は怪異に遭遇しない人の方が圧倒的に多いけどね。」

「そうだよなあ。地獄のような春休みも含めて」

「でも、後悔はしてないんだよね？」

「するわけないだろ。むしろあの出来事があったからこそ今の僕がいるんだ。むしろ感謝するべきだよ忍に」

ただ僕は忍を許すことはないし、忍は僕を許しはしない。
そんな関係だ。

「そんなこと言っていると忍ちゃんにミスド買わせるよ?」

「忍は今の時間起きてねえよ」

たぶん。

前にも似たような出来事があったような……いや、あれは夢だ。うん、夢に違いない。

忍がこの時間に起きてるはずないもん。
頼むから寝ててくれ忍さん。

「私、今から保科先生に呼ばれてるから今日はここで。じゃあね」

「ああ、勉強の日はまた頼むよ」

「うん」

そして、一人で呆けていると

「あらどうしたの?阿良々木君。そんな間抜け面して」

「間抜けは余計だよ。用事は済んだか?」

「ええ。お陰様で。フラスコ計画は順調よ」

「ここは箱庭学園だったのか？めだかさん!？」

「何を言ってるの？私はひたぎちゃんよ」

おっと、僕としたことがメタツツコミになってしまった。
気を付けなければ。

てか自分でちゃん付けするなよ

「てか用事終わったんなら帰るぞ」

「そうね」

その後、駐輪場に行き、戦場ヶ原を自転車の後ろに乗せ二人乗りの
状態で僕はペダルを漕ぎ始めた。

こんな場面、羽川に見られたら確実に説教されるな。

「ところで阿良々木君、星が綺麗に見える場所見つけてくれた？」

「あ…悪い。まだだ」

「はあ、本当に役に立たないわね。これなら石原良純の天気予報の

方がまだ役に立つわよ」

「僕は言われるのはまだいいよ。今すぐ良純さんに謝罪をしろ!!」

「阿良々木君が失礼極まりないことを言い申し訳ございませんでした。今後私が責任を持って監視し、反省させます」

「なんで僕が言ったことになってるんだよ!!」

「だって阿良々木君が言ったんじゃない」

「言っつてねえよ!!数行上を見てみるよ!!」

「ああ、そのことなら意味ないわよ。投稿した後にコピーして書き替えるから」

「卑劣極まりねえよ!!」

「それより8月12日から14日の間に行くからそれまで頼むわよ」

「ペルセウス流星群か」

「よくわかったわね、馬鹿なのに」

「だから一言余計なんだよ。他に言い方あるだろ」

「うましか」

「その言い方じゃねえよ!!バカを訓読みしただけじゃねえか!!」

「よくできました!。よくできた阿良々木君には花丸をあげましょ

「う」

「お前、僕を舐めてるんだな!？」

「舐めてるんじゃないわよ。馬鹿にしてるのよ」

「一緒だよ!！」

「馬鹿が馬鹿の問題を解いたなう」

「うるせえ!！Twitterに書き込むんじゃないか!！」

「で、どうなの?決めれるの?」

「まあ、7月中には決めておくよ」

「よろしくさん」

そして、話しているうちに戦場ヶ原の家に着いた。

「上がって行ったら?お茶ぐらい出すわよ」

「ありがとう。そうさせてもらひつよ」

「お茶っ葉は150回ぐらい使用したやつだけど」

「もっただのお湯じゃねえか!！」

「違うわよ。お茶風味のお湯よ」

「どっちでもいいよ!!--」

「嘘よ。ちゃんとしたやつ出すわよ」

「ところで阿良々木君、通知表の成績はどうだったの？」

「ああ、1学期の半ばぐらいからは結構頑張ったから上がってたよ」

「あらそう、つまらないわね。私的にはあれだけ教えてもらったのにむしろ下がってオール1だったという展開の方が良かったわ」

「そこまで行ったらもう救いようねえよ!!--素直に留年を覚悟するよ」

「留年したら八つ裂きにするわよ」

「怖いこと言っなや!!--」

「良いじゃない。臨終の際に最後の立ち会いの人が彼女の私なのよ。素晴らしき愛よ」

「歪んだ愛だよ」

「何よ。それとも、最後に会う人が私だったら不満なわけ？」

「そんなことないです!!--」

「それとも私のお父さんの方が良いのかしら？」

「頼むから勘弁してくれ」

「何？そんなに私のお父さんが嫌いなわけ？」

「そうじゃないよ。てかそういう問題でもない」

「じゃあ何よ？」

「なんで僕が死ぬ体で話を進めてるんだよ！！」

「え！？だって八つ裂きになるんだから死ぬに決まってるじゃない」

「なんで僕、留年してるんだよ！！」

「頭が悪いからじゃない？」

「うるせえ！！いや、確かにお前よりは悪いのはわかってるけど」

「ごめんなさい。阿良々木君は頭が悪いんじゃないわ。頭が弱い」

「や」

「より酷くなった！？」

「ところで阿良々木君のアホ毛って生きてるのかしら？」

「いきなりなんだよ」

「ほら、アニメの時クネクネ動いてたじゃない」

「演出だよ。実際に勝手に動いてたら気持ち悪いだろ」

「そうね。だから阿良々木君のこと気持ち悪いと思ってたんだ。納得だわ」

「今サラッと悪口を言ったな？」

「言いがかりはやめて頂戴。私は生まれてこのかた悪口を言ったことなんてないわよ」

「嘘つくんじゃねえよ!!少なくともこの小説だけでも出る度に毎回言ってるよ!!」

「あれは私じゃないわ」

「じゃあ誰だよ!!」

「もう一人の阿良々木君よ」

「自分の過ちを僕に擦り付けるんじゃねえ!!」

「まだもう一人の私とかの方が納得しやすいよ。
まあ、どっちにしろ納得はできないが。」

「それよりアホ毛がある人ってなんでいろいろと不安定なのかしら？」

「何がだよ」

「私の知っている限りでは、そふてにっの明日菜ちゃんは極度の妄想癖だし、Aチャンネルのるんちゃんはド天然だし、そして阿良々木君は頭が弱いし」

「なんで僕だけ悪口なんだよ!!」

「じゃあ他に何があるって言うの?」

「自分で考えろよ!!本人が言えるはずないだろ」

言いたくもないよ。

「そうねえ……ゴミ……クズ……馬鹿……ごめんなさい。悪口しか見つからないわ」

「そんなこと堂々と素直に謝るんじゃないよ!!」

逆に余計傷つくよ。

「じゃあ、馬鹿の中に鹿ってあるからせんと君でいいんじゃない?」

「適当だな!!僕とせんと君の繋がりは一切ねえよ!!」

「そんなこと猫でもわかるわよ」

「お前が言ったんだろぅが!!」

「猫って言うっても羽川さんじゃないわよ」

「わかってるよ!!」

「阪本でもわかるわよ」

「あの赤いスカーフがなかったら逆に僕達は何言ってるかわからないよ」

今度は日常ネタかよ。
わかる人いるのか？

「私は阿良々木君が何言ってるのかちょっとわからないわ」

「何でだよ!!」

「日本語で話して頂戴」

「日本語だよ!! Japaneseだよ!!」

「Japaneseって英語じゃない」

僕は馬鹿だった。

それからしばらく喋った後、帰宅した。

こよみデイリー 16 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「夏だー」

月火「だー」

火憐「夏なんだよな？」

月火「なんだよー」

火憐「てか最近やたら私達の出番多くないか？」

月火「少ないより良いじゃない？」

火憐「そうだな」

月火「だね」

火憐「では、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「阿良々木家の昨日の晩御飯は何だったでしょうか？」

月火「誰もわからないし、誰も興味ないよ」

火憐&月火「次回、こよみデイリー17」

火憐「昨日の晩御飯何だったけ？」

月火「自分がわかってないじゃん」

こよみデイリー 17 (前書き)

ガハラさんとファイヤーシスターズが出るとネタがポンポン出てきます。

面白い面白くないは別にして。

それでは、こよみデイリー17です。

家に着き、一息つくためベッドに寝転んだ。

その時、僕の部屋のドアが勢いよく開いた。

「兄ちゃん、1何個あつたんだよ？てか宿題手伝ってやろうか？なあなあなあ」

あれ？今更だけど妹ってこんなにうるさいのか？

テレビのドラマとかアニメだと兄に対して妹が宿題がわからないから手伝ってっていうのを何回も見たことあるのに……おかしいなあ。

いつのまにこの相場は崩れたんだ？

「勝手に入ってくるなり失礼なこと抜かしやがって。1なんて1つもねえよ！！1どころか2もねえよ！！」

「な、なんだと！？これは不吉なことが起こる前兆なのか！？月火ちゃんに報告しなければ！！月火ちゃん」

と部屋を出て行った。

うるさい妹である。

本当誰に似たんだよ。

そしてすぐに、ちっこい方の妹を連れて戻って来た。
忙しい奴らだ。

「お兄ちゃん1がないどころか2もなかったんだって!？」

「ああ」

「なんでそんなことするのよ!! 私はまだやり残したことがあるの!! まだ死にたくないの!!」

えっ!? なんで僕怒られてるの？

成績が上がって褒められるのはわかるが、怒られるって……。

あーなるほど新しいポケだな、これは。

なんともシユールなポケをかますじゃないか。

「とりあえず、私は街の皆に避難勧告を出してくるから月火ちゃんはネットで避難勧告を促しといて」

「わかったよ、火憐ちゃん」

え? なんかポケ長くない?

そんな続けてたらツッコミが入れられなくなるよ?

部屋から出て行くこととする妹達を

「ちょっと待てコラ!!」

「なんだよ兄ちゃん、今は1分1秒を争うんだよ!!」

「争わねえよ!!僕が成績上がったぐらいで大騒ぎするなや!!何も起こらねえよ!!」

「私的にはノストラダムスの予言の再来と言っても過言じゃないと思っぜ」

「過言だよ!!」

「だいたい、ノストラダムスの予言は外れたじゃねえか。」

「え!?!じゃあ何も起こらねえの?」

「起こるわけねえだろ」

「なーんだ。もう、騒がすなよな兄ちゃん」

「いやお前らが勝手に騒ぎ始めたんだろっが」

「てか、やたらあっさりだな。」

「あれ?月火ちゃんは?」

「ん？あーたぶんネットに配信しに行ったんじゃねえの？」

「行ったんじゃねえの？じゃねえよ！！」

と止めに行こうとした時

「ほら、見てみるよ兄ちゃん。Twitterやってんだけど、月火ちゃんのつぶやき」

「見せてみる。「お兄ちゃんの成績が上がったなう。明日、天変地異が起きるから皆さん逃げて下さい」」

間に合わなかった。

しかも、なぜかやたらとフォローされてるし。

「とりあえず今回はもう手遅れだから見逃してやるけど今後騒ぐんじゃねえぞ」

「じゃあ、兄ちゃんが成績を下げたらいいじゃん」

「なんで僕の成績を犠牲にお前らの騒ぎを防がなきゃなんねえんだよ……」

「だって手遅れじゃん！！」

「まだ間に合うよ……」

「来世は頑張ろうぜ、兄ちゃん！」

「諦めた言い方すんじゃない！」

「諦める勇気も時には必要だぜ」

「黙れ！！とにかく僕は留年はしない」

「留年したら制服を来た私と一緒に登校できるんだぜ」

「いや、お前のところ一貫校だから受験もしなくていいし、学校が違うじゃねえか」

「え？そうなの？てつきり直江津にも通えるのかと思ってた」

「2つ通えるわけないだろ。習い事じゃねえんだから」

「じゃあ、途中まで一緒に行こうぜ」

「最終的にお前のお願いになってるじゃねえか。てか留年した体で話してるんだよ」

「悪い悪い、ついちゃっかり」

「わざとじゃねえか！！」

てかこのやりとりどこかでやったような気がするぞ。
デジャヴか？

最近デジャヴが多いなあ、本当に。

「え？デジャヴとかじゃなくて私は戦場ヶ原さんの返し方を参考に
しただけだ」

「人のモノローグを勝手に読むんじゃねえ！！てかお前は一応まだ
戦場ヶ原のこと知らないだろ」

「私は真面目だからこの小説を読んで復習したのさ」

「しなくていいよ！！！することによって時系列がめちゃくちゃにな
ってしまつよ！！！」

「私は歴史を変えられる女なのさ」

「頼むからそれ以上喋らないでくれ」

これ以上こいつと話しているとこの小説の今後にも影響しそうな
で無理矢理に話を終わらせ部屋から出て行かした。

「お前様よ」

「急になんだ？忍。あ……ミスドなら買わねえぞ」

「わかっておるわい。しかも僕は最近、我慢して我慢して一気に食
べようと考えているしな」

それって次行く時にとんでもない量を買わされるってことじゃん。
その日が怖いよ。

「そうじゃなかったらなんだよ？」

「それは……その……」

「なんだよ、はっきり言えよ」

「じゃあ、言っぞ？」

「ああ」

「最近、儂の出番少くないかの？」

「……………」

「のお？」

「……………知らねえよ！！そんなこと僕に言われてもどっしよ
うもできねえよ」

「だってお前様は番外編まで出ていたんじゃからそれぐらいは言え
るじゃろ？」

「番外編は本編とは無関係なんだから話を出すな」

「なあどっぴにかならんのかの？なあお前様よ、なあなあ」

めんどくさい奴だなあ。

以前の無口な忍はどこに消えたんだよ。

どいつもこいつも出たがるなあ。

千石を見習えよ。

あいつ出てきたの最初の方の1回だけだぞ。

今度、出してやらないとな。

「そつだお前様よ、これからはなるべく夜に出掛けんか？」

「なんでだよ？」

「儂が起きているからじゃ」

「結局お前が出番ほしただけじゃねえか。千石を見てみるよ。あいつなんて出たの1回だけだぜ」

「あの娘は内気じゃから別にいいではないか。儂は社交的なんじゃよ。出たがりなのじゃ。出たがり芸人じゃ」

「芸人はほとんど出たがりだよ」

その内容でアメトークでやっても参加芸人が芸能界にいる芸人ほとんどになって大変なことになるよ。

「ならミスト芸人はどうじゃ？」

「そもそもお前は芸人ではない」

「別にいいではないか。ちなみに作者はガリガリ君芸人じゃぞ」

「聞いてねえよ」

「お前様はロリコン芸人じゃな」

「ただの変態じゃねえか！！だいたいロリコンではない」

「それでロリコンではないと言っくんじゃったらこの世からロリコンはいなくなるぞ」

僕がロリコンと思われているなんてこれは困ったものだ。

「それより今夏アニメのうさぎドロップに金髪少女が出ているのじやがあれは僕のライバルか何か？」

「いきなり何を言い出すんだよ。全くライバルじゃねえよ。てか分野が違うじゃねえか。お前は金髪幼女枠だよ」

「見た目一緒ぐらいの歳だったのか！？何故じゃ！？」

「僕の判断だ」

「やっぱりか」

「ところでお前様よ」

「なんだよ？」

「学園都市に行きたい」

「は？」

「だから僕は学園都市に行つて能力をつけたいのじゃ」

「身につけなくても僕の血を飲めば十分強いじゃねえか」

「僕は超電磁砲を身につけて街中でぶつ放したいのじゃ」

「とんでもないことを言うんじゃないよ！！」

「そうすれば僕の出番も増えるじゃろ？」

「お前の出番と引き替えに街中の人がいなくなるよ」

「それは、ミスドも無くなるのか？」

「ああ、綺麗に無くなるよ」

「じゃあ、諦める」

単純な考えだなあ。

お前本気でミスドのCM狙ってるだろ。

「じゃあ今から日常物語から傷物語に変えんか？」

「変えねえよ！！てか既存の作品だし、本物の作家が書いてるよ！」

「！」

「でも2012年の映画公開まで待てんぞ」

「今年だとハヤテのごとくとかけいおんとか強敵ばかりだぞ」

「うむ。2012年で正解じゃな」

こうして忙しなかった1日を無事終えることができた。

こよみデイリー 17 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「いきなりだけど夏と言えば!？」

月火「海!！」

火憐「そうだよなあ、海だよなあ。なんで海で食べる焼きそばってあんなに美味しいのかな？」

月火「祭の屋台で食べる焼きそばも美味しいよね？」

火憐「あと焼きそばを食べたい時とカップ焼きそばを食べたい時って別だよな？」

月火「そうだねえ。焼きそばに近いけど勝ってもいないし、負けてもないよね」

火憐「それでは、予告編クイズ!！」

月火「クイズ!！」

火憐「この現象をカップ焼きそば現象と名付けたぜ」

月火「クイズでもないし何か聞いたけとあるよ」

火憐&月火「次回、こよみデイリー18」

火憐「これはみなみけから引用したぜ！！中の人繋がりで」

月火「だと思ったよ」

こよみデイリー 18 (前書き)

小、中、高生の方は夏休みに入ったんですかね？

翌朝、毎度お馴染みのように妹達に叩き起こされる僕がいた。

「兄ちゃん、朝だぞー!!」

「お兄ちゃん、朝だよー!!」

「起きろー!!」

「起きなよー!!」

「起きねえと兄ちゃんの部屋で工口本探しするぞ」

「お前は男子中学生か!!」

まあ探しても見つからねえよ。

なんせお前達の部屋に隠してるんだからな。

「兄ちゃんのことだから私達の部屋に隠してたりしてな」

「さすがにそれはないよ火憐ちゃん」

「そ、そ、そっだよ。ぼ、僕がそんなとこに隠すはずないじゃないか」

「冗談だよ月火ちゃん。本当に私達の部屋に隠してたら私達は兄ちゃんに姉妹かめはめ波を食らわすぜ」

「それを言うなら兄弟かめはめ波だろうが」

「私達は姉妹なんだから姉妹かめはめ波でいいじゃん」

てか悟飯と悟天の技をパクるなよ。

てかなんで劇場版で使った技を持ってきたんだよ。

「私はさすがにそこまでの大技を出すのはお兄ちゃんに悪いよ。だから、火憐ちゃんはかめはめ波で、私はジャン拳でチヨキだけを出すよ」

「目潰しって月火ちゃんが何気に一番酷いよ!!」

というか、なんでドラゴンボールの話になってんだよ。

てか、もうこれは絶対バレないようにしないと駄目だな。見つかったら僕は殺されるぞ。

今度こいつらが出て行っている間に場所を変えるか。

朝食を摂った僕は羽川と勉強のため図書館に向かった。

羽川は僕の家でも良いと言ったが、僕の家に来ると妹達に邪魔されかねないので図書館にしてもらった。

図書館の前に着くとすでに羽川が待っていた。

「やつほー阿良々木君」

「悪いな待たせて」

「私も今来たところだから」

「そうか」

中に入ると人は全くいなかった。

まあこれから増えるだろう。

と思いながら一番奥の席に座り勉強を始めた。

2時間程勉強をしたところで休憩に入った。

「そついや羽川って世界一周をするって言ってたけど言葉とか話せるのか？」

「英語とかならなんとなるかもしれないけどフランス語とかドイツ語は挨拶程度かな。あとは笑顔とジェスチャーだよ」

「Das ist zu teuerは覚えておけよ」

「高すぎます?」

「お前は何でも知ってるな」

「なんでもはs……って言わないよ」

「クソっもう少しだったのに」

「とういかなんでそんな言葉知ってるのよ？」

「2、3年程前にドイツ語に興味を持って調べてたらこの読み方のダス・イスト・ツー・トイヤーをバズ・ライトイヤーみたいで覚えてしまったんだよ」

「知ってるのはその言葉だけ？」

「ああ」

「もしかして、知ってるからそれを言っただけ？」

「その通りだ羽川。本当なんでもs」

「言わないって言ってるでしょ。他に知らないの？」

「少しくらい言ってくれよ羽川。」

作者が知ってるドイツ語を言わされた僕の身にもなっしてくれ。てか知ってた理由は作者の実話だよ。

「無限の彼方へ、さあ行くぞ！」

「知らないからってバズ・ライトイヤーの決め台詞を言わなくていい

いから」

「帰って来たらどうすんだよ？」

「うーん。まだ決めてないけど世界中を見て私がどんな風を感じるかによってこれからが変わると思う」

「なるほどなあ。考えることが違うぜ羽川は」

「阿良々木君はどうするのよ？」

「何が？」

「何がじゃなくて大学行ってからよ。戦場ヶ原さんと一緒の大学に行くんでしょ？」

「ああ。ただ僕の場合は大学に入れるかが問題なんだよ」

「大丈夫だよ。ずっと勉強してるんだから。……留年しなきゃね」

「羽川さん!？」

「冗談だよ」

「冗談でも羽川に言われると不安になってくるよ」

「それより将来はどうするの？両親と同じ警察？」

「なんで僕の両親が警察って知ってるんだよ!!お前が知るのとは2学期になってからのはずだぞ!？」

「猫物語（白）のことだからあと少しだし良いかなと思って」

「良くないよ！！それに猫物語（白）を話すと偽物語の方が先だからすでに戦場ヶ原がツンデレからツンドロになってるよ！！」

「まあ猫物語（白）って私が一人称なんだし別に良いんじゃない？」

「そういう問題じゃねえよ！！今日はどうしたんだよ羽川」

「たまには良いじゃない私もキャラが崩れたって。つばさキャットの最終回のDVDの副音声だって最後はキャラ崩壊してたし」

「いや、まあそうだけど」

「それにこれ二次創作だし」

「その言葉だけは羽川から聞きたくなかったよ。ちょっと今から家に帰ってDメールを送ってくる」

「過去改変をしようとしないの」

「お前もラボメンなら分かってくれ」

「いや、ラボメンじゃないし」

「こうなればバイト戦士にも手伝ってもらっしかないな」

「西尾維新さんの物語シリーズとこの小説を合わせてもバイトして

る人は一人もいないから。だいたい、その話に関係あるの中の人的に千石ちゃんだけだからね。」

羽川とは珍しい会話をしながらも、その後は真面目に勉強に取り組み、夕方には図書館を出た。

「あー岡りん。とうっとうるー」

「千石、もう完全にアウトだよ」

「だって撫子ラボメンの一人だし」

「ラボメンは椎名まゆりだ。確かにお前の中の人まゆしいの声を担当しているがここでは関係ないぞ」

「ごめんなさい。久々に登場だったから自分が誰なのか忘れてたよ」

「テンション上がるんじゃないか!?そこは覚えておこっぜ!?!」

「テンションが上がって自分が誰かわからなくなったよ」

「もつめちゃくちゃだよ」

「そつだ、曆お兄ちゃんどこか行ってたの?」

「ああ、羽川と勉強しに図書館にな」

「そつなんだ曆お兄ちゃんは偉いね」

「一応受験生だしな」

「千石は何してたんだよ？」

「撫子は今から図書館に行くの」

「入れ違いだな。夏休みの宿題でもするのか？」

「ううん。夏休みの宿題を残り1日で終わらす方法が書いてある本があるか探しに行くの」

「あるわけないだろ！！てか最終日までしない気満々じゃねえか」

「うん！！やる気満々だよ」

「しない方向にやる気を出すなよ。そのやる気を宿題に行かせよ」

「こんな時にドラえもんが居てくれたらアンキパンを出してもらおうの」

「アンキパンを食べても暗記するだけで宿題は終わらないよ！！」

「こ、暦お兄ちゃんは欲しい時に欲しいツツコミを入れてくれるね。さすがだよ」

千石はお腹を抱え、笑うのを耐えながら僕を褒めた。

「僕も時間があつたら勉強教えてやるから少しは自分で頑張ろっぜ」

「本当に！？」

「ああ」

「じゃあ、撫子頑張る！とりあえず自由研究は終わらせるね」

「自由研究は何にするんだ？」

「1つの畳に目はいくつあるか」

「自由過ぎるだろ！！」

「じゃあ他のやつ考えておくよ」

てか畳の目を数えるってだいぶハードだぞ。

それから千石とは別れ、帰宅した。

帰宅後、部屋に入るやいなや忍が出てきた。

「お前様、最近携帯のニュースは見たかの？」

「まあ携帯のニュースぐらいは見てるよ」

「じゃあ、知っておるな」

「何をだよ？」

「ミスドで8月10日から10月にかけて日本各地の銘菓や名物の特徴を人気商品で表現したミスド味めぐりじゃよ！！」

「知らねえよ!!」

「なんじゃと!?!今年の10大ニュースに入るぞ?」

「どんだけだよ!?!」

「ちなみに今回登場したのは、大阪のたこ焼きをイメージしたボン・デ・たこ焼き風と京都の八つ橋をイメージしたボン・デ・ニッキあずきと沖繩のなんじゃったつけ?丸い揚げたやつなんじゃが……アレキサンダーじゃったかの?」

「サーターアングギーだろうが!!」

「そうじゃ、そうじゃ。そのベイクドファッション紅いもじゃ」

「それで何が言いたいんだよ?」

「わかっておるくせに」

「分かってるけど分かりたくないんだよ!!」

「むう…仕方ない。お前様の悪行を妹君達に教えるしかないのか」

「忍、8月10日はミスドに行くぞ」

「うむ。よくわかっておるの」

金髪幼女に脅しをかけられた男子高校生がそこにはいた。

「それよりお前様よ」

「今度はなんだよ」

「僕のキャストは結局誰になるんかの？」

「そんなこと僕が知るか!!」

「いやー、決めてもらわんと僕も中の人ネタができないんじゃないよ」

「結局出番目当てかよ」

「この際百物語の引き継ぎで平野綾ということでもいいかの？」

「勝手に決めんじゃねえ!!平野さんの都合も考えろ」

「僕の都合も考えてほしいものじゃ」

「まあツツコミを入れたものの正直この小説のみならいいんじゃないかねの?」

「二次創作じゃしな!!」

「それは言わなくていい」

「じゃあ決まりじゃな。あともう一つ」

「なんだよ?」

「傷物語の主題歌は誰が歌うんじゃない?」

「それも知らねえよ」

「僕の中の最有力候補がsuperceiなんじゃが最近ボーカ
ルを募集しおつたからnagaiさんがどうなるかがわからないのじ
ゃ」

「それは発表があるまで待て」

「あー！！しまった。僕したことがとんでもない失敗をしもつたた
わ！！」

「なんだよ急に」

「ボーカル募集に僕も応募すれば僕が歌えたんじゃないのか？」

「それは受かったら話だろ」

「悔やまれるのお」

「その前に誰も見た目金髪幼女は取らねえよ」

「大丈夫じゃ。中は20代の声優でありCDも出しておる平野綾じ
ゃからのお」

「それならsuperceiに応募しなくても平野さん単体でい
けるじゃねえか」

「うむ。それもそうじゃな」

「だいたい、可能性なら僕にもあるぞ」

「お前様には無い!!」

「即否定!? てかなんでだよ?」

「友達が少ない変態ロリコン野郎だからじゃ」

「全然理由になってないよ!!」

「お前様は10月からのWORKING...!!で頑張っただけじゃ良いのじゃ」

「もつぐちゃぐちゃ過ぎてわからないよ」

結局、忍との会話で決まったことは8月10日にミスドに行かされるということだけであった。

まあそうだろう。

その後、夜になって僕は勉強をしてからベッドに横になった。

さて、明日は戦場ヶ原の日か。

こよみデイリー 18 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ガッツ石松とバツクしますって似てねえ？」

月火「似てるー」

火憐「オレンジとオレン家って似てねえ？」

月火「似てる！」

火憐「三倉茉奈と三倉佳奈って似てねえ？」

月火「似てる！！」

火憐「では、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「私達って似てねえ？」

月火「似てるー！！」

火憐&月火「次回、こよみデイリー19」

火憐「さすがに今回はふざけ過ぎだな」

月火「うん。手抜き度MAXだね」

じよみデイリー 19 (前書き)

今回はひたぎ×じよみのみとなっております。

少し長いですがお付き合い下さい。

今日は、戦場ヶ原に勉強を教えてもらう日のため、僕は戦場ヶ原の家にいるのである。

「もう終わりね」

「え？何？僕を見捨てないでくれよ。戦場ヶ原」

「え？ああ、夏休みの宿題が終わりってことよ」

「早！！」

「どこかの阿良々木君とは違うのよ」

「がつつり名前を出しちゃってるよ」

「あら、ごめんなさい。私、素直な人間だからつい」

「ああ特に悪い方面で素直過ぎるな」

「私がいつ悪いことしたって言うの？」

「逆に良いことをいつしたんだよ？」

「失礼ね。さすがの良い子の私でも怒るわよ。仏の顔も三度までって言うでしょ？」

「お前にいつ仏の顔があったんだよ？」

「全米が驚愕！あのひたぎクラブの続編、ひたぎブツダがついに公開」

「勝手に劇場化すんじゃないねえ！！」

「おまけで短編映画、傷物語も上映決定！」

「あるとしたら逆だよ！！なんで本命がおまけなんだよ！！こんなことしてみる、全国の傷物語を楽しみにしている物語シリーズファンに攻撃されるぞ」

「なら私は口撃をして攻撃をするまでよ」

「怖いこと言うな！！…ってホツチキスを仕舞え」

「え？さすがに3次元の人に攻撃はできないから、このホツチキスを阿良々木君にしようと思ってるのだけれどダメなのかしら？」

「良いわけないだろ！！」

「仕方ないわね。話は戻るけど仏の顔も三度までより閻魔の顔は何度でもね」

「怖いよ！！僕、永遠に罰を受けるの？」

「罰バツと言つより罰バチね」

「なんで僕がバチを受けなきゃならねえんだよ」

「小学生にセクハラをしたり妹達のファーストキスを奪ったり」

「な、な、な、なんだ」

「冗談よ。阿良々木君がそんなことするわけないものね？」

微笑みながらこちらを見ながら言った。

こいつ本当に知らないよな？

「もし本当にやっていたなら」

その時、戦場ヶ原の携帯が鳴った。

ちなみに、曲は斎藤千和さんが歌う化物語のOPである。

「出なくていいのか？」

「ええメールの着信音だから。それよりこのstaple stable
bleって歌本当に良いわよね。歌ってる人はとても上手いし完璧
じゃない」

「せっかく口に出さずにしてたのに自分から言うなやー!!」

「この歌でもしかしてゴールドディスク大賞取った？」

「取る以前にCD化してねえよ」

「なんですって!?!君の知らない物語はCD化して大ヒットしたの
に私のstaple stableはCD化になってないですって

!？」

「OPは全部なつてないよ」

「今すぐSony Music Recordsさんに行くわよ、阿良々木君」

「行かねえよ!!まあ行つたところで何もできないと思うけど。てか他の人はどうすんだよ」

「そのことに関しては問題ないわよ。私の中の人はとても優秀だから神原の声だつて、羽川さんの声だつて、八九寺Pの声だつて、千石ちゃんの声だつてできるわ」

「いや、そこは本人達がいいよ」

「私だと不満があるの？」

「いや、その…あれだよ…戦場ヶ原も他の人にされたら疑問に思うだろ？」

「当たり前よ。そんなことされたら阿良々木君を八つ裂きにするわよ」

「なんで僕が被害を受けてるんだよ!!」

「阿良々木君だからよ」

「理由になつちやいねえよ!!」

「そう？これ以上ないくらい完璧な理由だと思っただけねど」

「これ以上ないくらい適当な理由だよ」

「阿良々木君の人生と一緒にピッタリじゃない」

「僕は適当に人生を過ごしてないよ」

「あら？阿良々木君の人生が適当ではないんだったらこの世からいい加減って意味の方の適当って言葉を無くさなきゃいけないわね」

「そこまで!？」

「当たり前じゃない。ゴミのような阿良々木君だけのためにあるような言葉だもの」

「またゴミって言ったなお前は!？」

「ほら、天空の城のラピユタであつたじゃない。ムスカが阿良々木がゴミのようだって台詞が」

「人がゴミのようだよ!!なんでムスカがピンポイントで僕を見ているんだよ!!」

「ごめんなさい」

「あ、いや…いいよ」

「じゃなくてゴミに謝つたのよ。阿良々木君みたいなのと同じ扱い

をってしまったから」

「お前と次会う時は法廷だな!!!」

「私に裁判で勝てるだけでも」

「証拠は山程あるよ!!!」

「私は戦場ヶ原ひたぎよ」

「何自分が判決を下すみたいない方してるんだよ!!!」

「裁判員制度で選ばれる市民を私の権力で、神原、羽川さん、八九寺ちゃん、忍ちゃん、火憐ちゃん、月火ちゃんを選ぶようにするから大丈夫よ」

「お前にそんな権力はない!!!てか千石は入ってないんだな」

「当たり前じゃない。あの子は貴方の味方よ?今は」

「今はってどういうことだよ」

「さあそれは圀物語を読んでからのお楽しみね」

「ここでメタネタを入れてくるか」

「1つ疑問に思うのだけれど」

「なんだよ?」

「この物語って私と阿良々木君の絡みがやたら多くない?」

「あーそのことだけとお前と僕のコンビだとネタが他の人よりも浮かぶらしいぜ」

「あーそう。でも私は嫌じゃないけど。むしろ好きよ、阿良々木君をいじめる機会が増えて」

「主人公なのに僕の存在って…」

とりあえず、作者には言いたいことが山程あるから後書きで覚えてるよ。

「そつだ戦場ヶ原」

「どうしたの?」

「前言ってたキャンプ場の件だけど」

「ああ、見つかったの?」

「近くが良いのか?」

「日本ならどこでも良いわよ」

「鹿児島なんだけど」

「……………」

「戦場ヶ原?」

「……………」

「戦場ヶ原さん？」

「……………」

「戦場ヶ原様？」

「ああ、ごめんなさい。寝てたわ」

「なんで寝るんだよ。人が話してるのに！！怒ったんじゃないかと思っただよ」

「鹿児島ね。わかった、いいでしょう」

「そんな簡単に答えていいのか？」

「私が頼んだんだから阿良々木君が言ったことに私は従っただけよ
男よりも男らしい彼女である。」

「目指すは女の娘よ」

「ただの女子じゃねえか。てか勝手にモノログを読むな」

「何よ、主人公Aのくせに」

「主人公なのにクラスメイトAと同じ扱い！？てかAって何人かい
るのかよ」

「私は彼女Aだけだ」

「彼女が何人もいる主人公って印象悪すぎだろ!!」

「心配しなくても傷物語でのパンチラネタを4ページも喋ってたのと友達を作ると人間強度が下がると言ってた時点で阿良々木君の印象はどん底よ」

「あれは言わないでくれ。若気の至りだ」

「若ハゲの至り?」

「ハゲてねえよ!!」

「阿良々木君って将来ハゲるとしたらアホ毛以外のところね」

「逆に嫌だよ!!」

「見た目は完全におやじっちなね」

「例えがなんでたまごっちなんだよ」

「久々に思い出したのよ。てか最近、阿良々木君のツッコミレベルが下がってると思うのだけど?」

「知らねえよ」

「生徒会役員共の津田君のツッコミを見て勉強しなさい」

「彼にはツツコミを入れ続ける気持ちがあると思うよ」

「この際、生徒会役員共のメンバーを全員呼びましようか」

「それだけは本当に勘弁して下さい」

「冗談よ。私にそんな権限はないわよ」

あの人達を呼ばれたらそれこそめっちゃくちゃになってしまう。

「だよな」

「私が生徒会役員共みたいな人になることはできるけど」

「是非とも遠慮願いたい」

「そんなに拒むことないじゃない。阿良々木君自体下ネタみたいなものなんだし」

「お前と出会って今までで一番理解出来ないよそれ!!」

「やっぱり頭が悪いのね」

「お前の口が悪いんだよ!!」

「AKBの板野友美さんみたいにアヒル口をすれば許してもらえるかしら?」

「その口じゃねえよ!!言葉の方だよ」

「これは仕方ないじゃない。方言みたいなものよ」

「どこの地域にそんな暴言を使うところがあるんだよ!!」

「日本」

「黙れ!!」

馬鹿にしすぎだろ。

なんだよ日本って。

そんな答え最近の小学生でも言わないよ。

その時、戦場ヶ原の威力抜群の右フックを食らった。

「痛えー!!何しやがるんだ」

「え!?!だって殴れって言っただじゃない」

「黙れって言っただよ!!」

「ごめんなさい。阿良々木君の頭が悪いのが移ったみたいで私の耳が悪くなったわ。本当にごめんなさい」

「移らねえよ!!!だいたい謝りながら悪口を言っつてどんだけ器用なんだよ!!!」

「そんな褒めなくても」

「褒めてねえよ!!!怒ってるんだよ!!!」

「阿良々木君ダンスできるの?」

「踊ってねえよ！！お前わざと間違ってるだろ」

「ええ、わざとよ」

「堂々とストレートに言いやがった」

「素直な子だからね」

「結局そこに戻るんだな」

その後、勉強に戻った僕達であったが

「あら、もうこんな時間」

時計を見ると針は午後6時を指していた。

「集中すると時間経つの早いな」

「夕飯食べて行く？」

「え？作ってくれるの？」

「ええ、仕方がないから手料理を食べさせてあげるわよ」

「それは素直に嬉しいな」

「ここからは日常物語ではなくて食物語・ひたぎシェフ・よ」

「勝手に物語を変えるな！！料理マンガならぬ料理小説になっちゃ

「よ」

「美味しんぼや味一もんめやクッキングパパをも抜く大作になるわ
「よ」

「ならねえよ。この小説の作者にそんな能力はない」

「なら出さすまでよ」

そう言いながら包丁を取り出した。

「ちよつと待て、危ないよ。てか僕達と作者は住んでる次元が違う
「よ」

「なら阿良々木君が代理で受ければいいじゃない」

「なんで僕なんだよ!!! って包丁を持ちながら近づいてくるな!!!」

「だって阿良々木君は主人公Aじゃない」

「だから、Bは誰だよ!!!」

「佐藤B作よ」

「何一つ上手くねえよ!!! とりあえず佐藤B作さんに謝れ」

「阿良々木君が失礼な発言をしまい申し訳ありませんでした。
これからは私が教育者として更生させていただきます」

「だからなんで僕なんだよ!!! てかこのくだり2回目だよ」

「あら、覚えてたの？鳥頭じゃなかったのね」

「もう僕が悪かったから許してくれ」

「最初からそう言えばいいのよ。あと料理なのだけれど塩と砂糖を間違っちゃったってベタな展開を望むのならしてあげるけど」

「そんなこと言われてやってくれと言うやつがいたら僕が説教してやる」

「そ、なら無しでいいのね」

その後はちゃんとした戦場ヶ原の手料理を食べて帰宅した。

味の方は普通に美味しかった。

うん、本当にこれは「冗談抜きで」。

こよみデイリー 19 (後書き)

クロネコ「クロネコだぜ!!!」

阿良々木「阿良々木だよ。って紹介の仕方め妹達と一緒に!？」

クロネコ「だって一応、次回予告だし」

阿良々木「理由になっちゃいないよ」

クロネコ「で、なんなんすか?こんなところに呼び出しておいて」

阿良々木「お前な、もう少しガハラさんをテレさせるよ。あれじゃツンデレじゃなくてツンツンじゃないか」

クロネコ「だって僕には何の影響も無いですし」

阿良々木「僕にはあるんだよ!!!」

クロネコ「んじゃ、番外編で言っして下さいよ」

阿良々木「またあのグダグダするの!？」

クロネコ「いや次は別の企画で」

阿良々木「どんな駄作になるやら」

クロネコ「それでは、予告編クイズ!!!」

阿良々木「くいず」

クロネコ「いつ戦場ヶ原さんはデレるのでしょうか？」

阿良々木「お前次第だよ」

クロネコ&阿良々木「次回、こよみデイリー20」

クロネコ「番外編は化物語×生徒会役員共の予定ですよ」

阿良々木「その回は絶対に出たくない」

こよみデイリー 20 (前書き)

ああ〜日本のどこかに〜私を待ってるヒキガエル〜

では、こよみデイリー20です。

帰宅した僕は休憩しようとベッドに寝転がった。

なんだか今日は勉強以外で疲れたなあ。

勉強以外と言うのは戦場ヶ原との掛け合い以外ないけど。

しばらく休憩し、お風呂に入ろうとした時、携帯が鳴った。

ん？神原？珍しいなあこんな時間に。

「神原、どうしたんだ？こんな時間に」

「その声と卑猥な言葉は阿良々木先輩だな」

「お前がかけたのに分かっていなかったのかよ。てか僕の言葉のどこに卑猥な単語があったんだよ！！」

「こんな時間と言うのはほとんどの人は夜中と思うだろう。夜中と言うのはエロいことが増えるだろう。ほら卑猥ではないか」

「もうお前の頭が心配だよ。で、なんだよ？用件は」

「ああ、そのことだ。変態なんだ！！」

「それは知ってるよ」

「間違った。あまりに変態なものだから大変と間違ってしまった。

これで2回目だな。私は意外と天然キャラなのか？」

「切るぞ？」

「あー悪かった。ちゃんと話すから！ー実はな」

「ああ」

「ガリガリ君で当たりが出たのだ！ー」

切れば良かったとこの時、後悔をした。

「……………」

「阿良々木先輩？」

「……………」

「何か言ってくれらぎ子ちゃん」

「それは言うなあ！ー」

「なんで無視をするんだ」

「もしかしてお前の用件ってそれか？」

「ああ！ーあまりにも嬉しくてな！ーこれは交換してもう1本貰うべきか記念に置いとくべきか阿良々木先輩の意見を聞こうと思っていたんだ」

「知らねえよ！！好きにすりゃいいだろ！！」

「わかった！！では脱いでから交換しに行けばいいんだな？」

「どこにその選択肢があつたんだよ！！だいたい繋がりが全くねえよ」

「完全にあるではないか。ガリガリ君はダウンタウンの浜ちゃんに若干似てる。浜ちゃんと言えば芸人。芸人と言えば最近の若手芸人若手芸人と言えば脱ぎたがる。脱ぎたがると言えば神原駿河ではないか」

「無理矢理過ぎるよ！！数学で言うとき式は適当で間違っているのに答えだけ合ってるやつだよ！！」

「私の前では方程式や当たり前は無力化されるのさ。燃えている家を普通は水で消すところを、私の場合は、ガソリンで消すのだ」

「大爆発で大惨事だよ！！」

近辺の家はぶっ飛ぶぞ。

「ではさつまいもを投げるとするか」

「美味しい焼き芋の出来上がりだな」

「芋と言えば阿良々木先輩、花物語なんだが」

「芋はどこに行った！？」

「芋も花も一緒ではないか」

「一緒じゃないよ!!」

どこをどうしたら一緒になるんだよ。

「まあ、花物語に限らず、囃物語と傾物語の3つって化物語シリーズの私と千石ちゃんと八九寺ちゃんの各話を完結するための話なのか？」

「千石は最終巻になるみたいだけど考え方によっちゃそう思えないこともないな」

「だから3つともに化の字が入っているのか？」

「たまたまじゃねえの？羽川の猫物語は化って入ってないし、これから出る鬼物語と恋物語も入ってないし」

「結論から言うと私は脱げry」

「じゃあ、またな」

これ以上話していると本当にダメになってしまいそうだったので無理矢理切った。

その直後、神原からメールが来た。

「一方的に切ってしまう新しいプレイだな。うん。悪くないぞ。むしろゾクゾクする」

こいつを言ばすだけだったか。
今度は違う方法を考えとかないとな。

その時、部屋に火憐ちゃんが入って来た。

「兄ちゃん、電話誰だったんだ？」

「人の話を聞くな」

「悪い悪い。で、誰？彼女さん？」

「違うよ。神原だよ……っってお前知らないな」

「何！？神原さん！？」

え？何？めちゃくちや食いついてきたんですけど。

「なんで兄ちゃんなんか神原さんと知り合いなんだよ！！」

「別に良いだろうが」

「兄ちゃん！！」

「なんだよ？」

「一生のお願い！！神原さんに会わして」

「駄目だ」

「何でだよ？」

だってこいつらを会わしたら神原の理性が持つかわかんねえもん。

「駄目なものは駄目だ」

「頼むよー。偽物語の話なのに先にしちゃってるんだぞ」

「そんなの知らねえよー!!」

「本当は月火ちゃんの服を借りてスカートで兄ちゃんに抱きつくはずだったんだけど先にしてしまったからジャージになってしまったけど」

「どつちでも良いよ」

「わかった!!私の処女やるから」

「いらねえよ!!てか何言ってるんだよこいつは!!」

「じゃあ、偽物語のアニメ化を延期でいい」

「延期も何も予定すら立ってねえよ」

「でも去年の短冊に私達書いたぜ。偽物語アニメ化って」

「書いて思い通りなら今年は大変なことになるよ!!シャフトの皆さん過労死だよ」

「じゃあ、短冊意味ないじゃん」

「ああいつのは書いてそれに向けて頑張るもんなんだよ」

「えー。あ、それより兄ちゃん、セクハラ男子高校生なんだけどもう少してわかりそうなんだぜ」

「Really?」

「なんで英語なんだよ？まあ、本当だよ」

「おい、でつかいの」

「なんだよ？」

「今度、神原を紹介してやるからその捜査は打ち切りにしろ」

「え！？マジで！？神原さんに会わしてくれんの！？」

「ああ、もちろんだ。だからその捜査は打ち切り」

「わかった！！捜査は今をもって打ち切りにする！！迷宮入り決定だ」

「んじゃ、神原に空いてる日を聞いとくからまた教えるよ」

「頼んだぜ兄ちゃん！！」

「ああ」

「さすが兄ちゃんだぜ！！本当頼りになるよ。私の処女いるか？」

「いらねえよ!!とりあえず、部屋から出ていけ」

「イエッサー!!」

とりあえず、これで僕の命は助かった。

妹達を神原に会わすのは気が引けるけど今回はかりは仕方がない。

そして、戦場ヶ原と鹿児島へ旅行に行く前日、戦場ヶ原に呼び出された僕は戦場ヶ原の家に行った。

「さて、阿良々木君」

「なんだよ?」

「なんでいるの?」

「お前が呼び出したんだろ!!」

「私、召還技とか使えないわよ」

「その呼び出すじゃねえよ!!電話で呼び出しただろうが」

「知ってるわよ。阿良々木君みたいに馬鹿じゃないんだから」

「うるせえ!!僕に馬鹿馬鹿言うけどこれでも小学校の頃はお利口さんって言われてたんだぜ」

「ロリコンさん?」

「お利口さんだよ!!誰がロリコンさんだよ」

「阿良々木君、今高校三年生だからロリコンの高校三年生で略してロリ高三ね」

「上手いこと言ってるじゃねえよ!」

「アダ名は任せなさい。なんて言っただって私は直江津の有吉弘行よ」

「じゃあ、羽川はなんだよ」

「猫耳委員長」

「う……思ったよりも良い。じゃあ、神原は?」

「露出狂」

「そのまんまじゃねえか」

「なら自分はどうなんだよ。自分にアダ名をつけるなんてとてもじゃないけどできないけどな」

「ひたぎ様よ」

「躊躇せずに言いやがった!しかも、様って」

「当たり前じゃない。神は私の下僕よ」

「失礼なことを言うんじゃないよ!罰が当たるぞ。てか、この中じゃ僕の酷さが際立ってるよ」

「ああ、頭の悪さが際立ってるわね」

「アダ名の話だよ!!」

「明日の話なのだけれど」

「無理矢理話を変えるな!!」

「阿良々木君と無駄話してる時間は私にはないの。この後、私はこの畳の目を数えないといけないのよ」

「めっちゃめっちゃ時間あるじゃねえか!!」

「冗談よ?」

「何故疑問系!?!」

「人生には正解の答えはないのよ。それと一緒によ」

「これに関しては正解の答えが出せるよ」

「じゃあ、正解は本気ね」

「そこは冗談にしとけよ!! まあ、いいや。それより明日の事なら別に電話で良いじゃないか」

「阿良々木君に飽いたかったのよ」

「僕に飽きたのか!?!」

「ごめんなさい。漢字が間違ってたわ」器用な間違いをするなあ。僕は初めてだよ。喋って漢字を間違えるやつなんて。

てか、間違ったかすら普通わからねえよ。

「会いたかったのよ」

「僕の考えが間違っていた。許してくれ」

その後、明日の時間やその他のことを話して帰宅した。

こよみデイリー 20 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「前は乗っ取られて私達の出番がなかったな」

月火「そうだったねえ。しかも、下手だし」

火憐「もうやらない方がマシだったよな？」

月火「本気でやらない方がマシだったよ」

火憐「後で兄ちゃんには説教をしないとイケないな」

月火「うん。とことん反省をしてもらおう」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「次回はどうすんの？今回で20回目だから例のやつなの？」

月火「まあ、一応あれでいいんじゃない？」

火憐&月火「次回、こよみデイリー番外編2」

火憐「やらない方が良いと思うけどな」

月火「もしかしたら、変更で本編をするかもね」

こよみデイリー 番外編2 (前書き)

日にちがだいぶ空きましたね。

さあ、黒歴史の開幕です？

こよみデイリー 番外編2

戦場ヶ原「今回、こよみデイリー番外編2を担当するのは、神は私の弟子。戦場ヶ原ひたぎと」

神原「特技は、ファイヤーボール。神原駿河だ」

戦場ヶ原「今回は、あなたと二人での進行なのね」

神原「ああ。ヴァルハラコンビ復活だな」

戦場ヶ原「そうね」

神原「ところで戦場ヶ原先輩、生徒会役員共のメンバーを出す案はどうなったのだ？」

戦場ヶ原「ああ、その事ね。実は、アドバイスをもらったり、考えた結果見送ることになったみたいよ」

神原「そうだったのか」

戦場ヶ原「ええ。だから、今回は今までのこよみデイリーを振り返って適当に話しをするみたい」

神原「化物語のDVD or Blu-rayの副音声みたいなやつだな」

戦場ヶ原「簡単に言うとそういうことね」

神原「それと、戦場ヶ原先輩、阿良々木先輩は何故出ないのだ？」

戦場ヶ原「阿良々木君は絶対に嫌だと拒否したみたいよ」

神原「確かに以前から出たくなかったと言っていたな」

戦場ヶ原「さ、前置きをこれぐらいで本題に入りましょう」

神原「そうだな」

戦場ヶ原「さて、今回はめっちゃくちゃにならないようにテーマを決めましょう」

神原「なんだか今日は戦場ヶ原先輩が頼もしいな」

戦場ヶ原「当たり前じゃない。私はいつでも頼もしいのよ」

神原「いつもはめっちゃくちゃなこと言ってるのに」

戦場ヶ原「で、テーマはどうする？」

神原「うーん。今、作者の世界では夏だし海とか夏をテーマにしたやつでいいのではないか？ちょうどこちらも海とかの話も出てるし」

戦場ヶ原「そうね。そうしましょ」

神原「夏と言えばやはり脱ぎたくなるな！..」

戦場ヶ原「神原、いきなり脱線してるわよ」

神原「脱線ってなんだかエロいな」

戦場ヶ原「どこにエロ要素が入ってるのよ」

神原「だって、脱線の脱って脱ぐって漢字ではないか」

戦場ヶ原「神原」

神原「線を脱ぐとはエロいではないか。線ということとは似ているものは紐だな。うむ。戦場ヶ原先輩、私は今からヒモパンを買ってくる」

戦場ヶ原「神原」

神原「上下セットになってるやつとかあるのかな」

戦場ヶ原「か・ん・ば・る・お・こ・る・わ・よ」

神原「す、す、すまなかった」

戦場ヶ原「で、海なんだけど私と阿良々木君が海に行った時、貴方は何をしていたの？」

神原「私はもちろん1日中BL本を読んでいた」

戦場ヶ原「貴方らしいって言っちゃ貴方らしいわね」

神原「戦場ヶ原先輩は海で何をしたのだ？」

戦場ヶ原「永遠に遠泳よ」

神原「恋人同士のやることじゃないだろ」

戦場ヶ原「冗談よ。さすがにそんなことしてもつまらないもの」

神原「まあ、恋人同士で行ってすることじゃないしな」

戦場ヶ原「だって阿良々木君って泳げるから溺れたりしないから遠泳なんかしても意味がないじゃない」

神原「二人は付き合っているというより吐き合っている気がするのだが」

戦場ヶ原「失礼ね。二人で暴言を吐いていないわよ。阿良々木君に言わすわけじゃないじゃない。私が一方的に言ってるのよ」

神原「相変わらずの関係だな」

戦場ヶ原「それから、前から思っていたのだけれど海で食べる焼きそばはなんであんなに美味しいのかしら」

神原「以前、ファイヤーシスターズも後書きで言っていたな。私もそれは思う。焼きそばに限らず全てが美味しく感じる」

戦場ヶ原「私はこれを海の家焼きそば現象と名付けたわ」

神原「完全に桜庭コハルさんのみなみけに出てきたカップ焼きそば現象のパクリだな」

戦場ヶ原「これはパクリではないわ。オマージュよ」

神原「逃げ道を作ったな。ところで戦場ヶ原先輩、作中に出てきた都市伝説なんだが、私だけ微妙ではないか？」

戦場ヶ原「確かに電車より早く走る少女って微妙よね。なんかリアルというか」

神原「そうなんだ、戦場ヶ原先輩。私に関してはただのスポーツ少女ってどちらかと言うと普通の扱いになっているのだ」

戦場ヶ原「これを聞いた限りでは、ずば抜けてスポーツが出来るスポーツ少女って感じね」

神原「ああ。だから露出癖があり、どこでも全裸になる少女の方がまだ良かった」

戦場ヶ原「いや、貴方は「脱げばいいのだな」って言いながら結局脱いでないじゃない。だから普通の扱いになるのよ」

神原「それは阿良々木先輩が脱がしてくれないのだ！！」

戦場ヶ原「その言い方だと、阿良々木君の手で神原の服を脱がせてあげないみたいない方になるから辞めて頂戴」

神原「では、今後は強制的に脱ぐとしよう」

戦場ヶ原「神原、脱ぐのは勝手だけど下手したら条例違反だと言われて某知事にこの作品を消されるわよ」

神原「それは困る。私の露出する場面が無くなってしまっ」

戦場ヶ原「あくまでも脱ぐのは辞めないのね」

神原「ところで、戦場ヶ原先輩。夏と言えば海もあるのだが他に何かあるか？」

戦場ヶ原「そうね、私は花火も良いと思うわよ」

神原「うむ。花火も夏の定番だな」

戦場ヶ原「線香花火なんかとても良いじゃない」

神原「ああ。確かに線香花火って良いな」

戦場ヶ原「でも、線香花火って儂いわよね」

神原「そうだな。だが、そこも良い」

戦場ヶ原「まるで阿良々木君みたい」

神原「本人がいなくても言うんだな。いや、わかっていたけど」

戦場ヶ原「それより神原、そろそろ今回は終わりみたいよ」

神原「何か早くないか？」

戦場ヶ原「作者がこれ以上はネタが思いつかないみたい」

神原「なんか本当駄目だな」

戦場ヶ原「ええ、クズね。阿良々木君と同類よ」

神原「私はそこまで言っていないが。そして、阿良々木先輩も何故か被害を受けてる」

戦場ヶ原「まあ、最後までいちゃんとして終わらしましょう」

神原「ああ、そうだな」

戦場ヶ原「じゃあ、一言ずつ言って終わらしましょう。では神原から」

神原「何かあったらエロいな。神原駿河と」

戦場ヶ原「何かあったら八つ裂きよ。戦場ヶ原ひたぎがお送りしました」

こよみデイリー 番外編2（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「懲りもせず2回目をやってしまったな」

月火「馬鹿だねえ」

火憐「前よりかは少しはマシだったと思うけど」

月火「これで前より酷かったら本当に打ち切りだよ」

火憐「まあ良くはなかったけど」

月火「そうだね」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「パンはパンでも食べられないパンは？」

月火「予告じゃなくて、ただのなぞなぞだね」

火憐&月火「次回、こよみデイリー21」

火憐「答えは腐ったパンだぜ」

月火「リアルな方!？」

じよみデイリー 21 (前書き)

さて今回はどこまで話が進むのでしょうか、

当日、僕は少し早めに駅に着いていた。

ここは田舎町ではあるが市街地へ仕事に行く人と駅で何人もすれ違っている。

すると戦場ヶ原がやって来た。

「何で私より早く来てるのよ」

「朝一で会って一言目がそれかよ!!遅れて怒られるならまだしも、早く来て怒られるって前代未聞だよ!!」

「もしかして、早く来て私に罪悪感を感じさせようとしたの?陰険ね阿良々木君」

「そんなことするか!!」

「朝からうるさいわね。鶏と一緒にね」

「鶏と一緒にするなや!!」

「鶏…鳥…鳥頭…すぐ忘れる…馬鹿…ああ仕方がないのよね」

「そんな哀れな目で見んな!!」

「人偏に哀って書いてなんて読むんだったかしら」

たぶん、僕おれだな。

このままここにいるのもあれなんで、ホームに移動した。

「阿良々木君って怪我しても治るのよね？」

「ああ、大抵のことは」

「じゃあ、電車が来たら飛び込んでも治るの？」

「バラバラになるよ！！ただの人身事故だよ！！」

「一回やってr y」

「やんねえよ！！」

確実に死ぬわ！！

でも、忍に血を飲んでもらったらどうなるんだろ。

たぶん、跳ねられる前に電車を止められるな。

「もし、やって生きてたら、良かったわねって言ってあげるわ。死んでしまったらそれが阿良々木君の寿命ってことよ。どう？」

「どうじゃねえよ！！ハイリスクノーリターンじゃねえか！！」

「大丈夫よ。お葬式は出てあげるから」

「そついでにういってんじゃねえよ」

「そう。じゃあ、次の急行が来た時にやりましょう」

「僕の話聞いてましたか？ひたぎさん？」

「ええ、聞いてたわよ。そのまま、逆の耳から出て行ったけど」

「聞いてないじゃねえか！！」

「昔流行ったじゃない。右から左へ受け流す歌」

「ずいぶん懐かしいな」

「最後は自分が時代に受け流されたみたいだけど」

「思ってるほどそんなに上手くないよ」

その後、無事に電車に乗ることが出来た。

この無事と言うのは例の実験をせずにということである。

「それよりそろそろ私が偽物語でデレる時期ね」

「話の展開が目まぐるしいな。まあ確かにそんな時期だな」

てか最近、何の抵抗も無くメタ話に入っていつてる自分が情けない。

「じゃあ、今から阿良々木君の頭を殴って拉致して良いかしら？」

「良くねえよ！！なんだよ、その新手の拉致の仕方は」

「もしくは、鹿児島で殴打して拉致りしましょうか？」

「いろいろと話が進まなくなるよ」

「大丈夫よ。私一人でキャンプを楽しむから」

「一人でキャンプって強い心臓の持ち主だな!!」

いや、前からわかってたけど。

「だいたい、僕はどうすんだよ」

「山に棄てて帰るわ」

「やめろ!!」

「ごめんなさい。阿良々木君はゴミだから棄てるじゃなくて捨てる
だったわ」

「いつになったら僕はまともな人間扱いになるんだ」

「え!? 阿良々木君ってまだ人間扱いされることに希望を持っていたの？」

「純粹に驚かれた!？」

「ここで戦場ヶ原ひたぎの化物語クイズ」

「なんだよ、いきなり」

「ゴミはゴミでも人間の形をしたゴミってだーれだ」

「完全に僕じゃないか!?!」

「あら、自覚してるのね」

「自覚させられたんだよ」

「そんな阿良々木君にツンデレサービス」

「前にもあつたなこんなの」

「阿良々木君って本当ゴミね。でもゴミはゴミでも捨てられない大切なゴミなんだからね」

「今回は酷い!!結局、終始言ってたのは僕がゴミってことだけじゃねえか!?!」

「ゴミ以上ゴミ未満」

「ゴミじゃねえか!?!」

「疲れたから寝てもいいかしら?」

「お前が言い出したんだろ!?!」

「もっとクールにツツゴミが出来ないのかしら?」

「まさかのツツゴミに対してのダメ出し!?!?」

「生徒会役員共の津田君を見習いなさい。あの神ッッロミを」

「どんだけ津田君を推すんだよ」

「そろそろSYD48が出てくるわね」

「なんだよSYD48って。AKB48の姉妹ユニットかなんかか？」

「S（生徒会）Y（役員）D（共）よ」

「あのマンガに48人も出たの見たことないぞ」

「大丈夫よ。適当に水増しするから。最悪、私達が入ればいいでしょ、直江津メンバーが」

「それでも足りないよ」

「じゃあ、足りなかつたら足りなかつたで別にいいじゃない。そんなの適当で」

「今すぐ、SYD関係者と秋元さんに謝れ！！」

「E s t u t m i r l e i d .」

「日本語で謝れ！！誰がドイツ語がわかるんだよ」

「よくわかつたわね。阿良々木君のくせに」

「くせにつてなんだよ」

「何で知ってるの？」

「まあちよつとな」

「ああ、あれね。アスカに会いに行きたくて必死に勉強したのね。でも、それは叶わないことよ。アスカは実在しないのだから。この現実を言うことで阿良々木君を傷つけてるのはわかっている。わかっているけど阿良々木君に気づいてほしかったから」

「ちよつと待て！！なんで僕がアスカに会いたくて勉強した体で勝手に話を進めてるんだよ」

「え！？違うの！？」

「本日2回目の純粋な驚き！？」

「でも、阿良々木君ってパソコンに向かってギャルゲーしながら一人で「設定の勝利ですな。うえっへっへっへ」って言ってry」

「ねえよ！！お前のせいで僕のキャラがどの方向に進んでるかわからなくなってるよ！！」

「隠さなくていいのよ。私はどんな阿良々木君でも受け止めるから」

「隠すも何も事実無根だよ」

「徹底して否定するわね」

「徹底して攻めるんだな」

「それより、阿良々木君」

「なんだよ？」

「前回の番外編2の時に私は阿良々木君が泳げる発言したけど、化物語アニメコンプリートガイドで書いてある、なでこプールを読み返したのだけれど、阿良々木君泳げないみたいじゃない」

「ああ、吸血鬼の後遺症でな」

「これじゃあ、私が嘘つきみたいになるじゃない」

「いや、まあ作者が忘れてたんだからお前は関係ないよ」

「それでもよ。それでも私が言ったのに違いはないから」

「から？」

「言ったのに違いはないから、今すぐ泳げるようにしてもらえないえ、泳げるにしないさ」

「無茶を言うな！..！」

「そうすれば私が嘘をついたというこの既成事実を隠蔽することができるわ」

「公の場で何堂々と隠蔽宣言してるんだよ！..！」

「しらばっくれるよりマシよ」

「いや、まあそうだけど」

「今起きてるこの現状を解決するには阿良々木君が泳げるようになるのが一番なのよ」

「でも、さすがにそれはキツイぞ」

「わかったわ。なら、これからは泳ぐ時は体の周りに空きペットボトルを巻き付けて泳ぎなさい」

「いろいろ言ってきたけど結局、なんの解決にもなっていないような気がするが」

「これで良いのよ別に。ややこしくすることで読者は読む気を無くして、ああ結局泳げるんだとなるのよ」

「誤魔化してるだけじゃねえか」

「まあ結論から言つと、言ってしまったことは仕方がないから後はノリでどうにかするのよ」

「じゃあ、このやりとりは一体なんだっただ」

「文字稼ぎよ」

「ただの時間の無駄使いだよ！！読者に謝れ！！」

「ハイハイ、サーセン、サーセン」

「謝る気ゼロだな」

そうこうしてる内に東京駅に着き、ここからは新幹線に乗った。

贅沢だなんて？

まあ、貯めていたお年玉とかあったし、基本僕はあまりお金使わないから余っているんだよ。

使っちゃって言うてもエロ本………おっとこれ以上は言えないな。

それより最近って便利なんだな。

いつの間にか東京から鹿児島まで新幹線が通ってるんだもん。まあ、新大阪で乗り換えはあるけど。

こよみデイリー 21 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「私達も鹿児島に行きたかったなあ」

月火「行きたかったねえ。でも、今回は仕方がないよ」

火憐「兄ちゃんの鞆の中に入ったら行けたんじゃないか？」

月火「私は、そんなエスパー伊東みたいなことしてまで行きたくないよ」

火憐「私は兄ちゃんの為ならなんだって出来るぜ」

月火「素晴らしき兄妹愛だね」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「今回のクイズはお休み!!」

月火「休み!？」

火憐&月火「次回、こよみデイリー22」

火憐「作者がクイズのネタが本当に浮かばなかったんだって」

月火「まあ、今回だけは許してあげよう」

こよみデイリー 22 (前書き)

いろいろ忙しくて遅くなりましたm(´`´)m

また、今回はグダグダになったんですが今回は見逃してやって下さ
い(^o^)

目的地、1991年から4年連続で日本一星空が綺麗な場所にもなった輝北うわば公園についた。

周りには、キャンプに来たであろう家族や友達グループがいた。

「恥ずかしいわ」

「何が？」

「いや、ほら周りは家族や友達グループじゃない」

「ああ、確かに恋人同士っていうのは少ないけど別に気にすることないだろ？お前にしては珍しいな」

「あの子あんな生きたアホ毛を生やしてる男を連れて来てるって思われないからしら」

「思われねえよ！！だいたい動くのはアニメだけだよ！！何回言ったらわかるんだよ」

「何回言われてもわかりたくないわよ」

「ならこのくだりは一生終わらねえよ！！」

「ところで阿呆良木君」

「僕がアホだと皆に勘違いされるだろ。一応言っておく、僕の名前

「は阿良々木だ」

「失礼、噛んだわ」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない!？」

「狩り出した」

「何を!？」

「阿良々木君を。通称、阿良々木狩りね」

「そんな通称聞いたことねえよ!!」

「ちなみにネットで、アホ毛、馬鹿、狩りと調べると阿良々木狩りが出てくるわよ」

「適当なこと抜かすんじゃないよ!!」

「もう一つ、阿良々木狩りとは全国の直江津高校3年の阿良々木暦が狩られることよ。不意にやられるために犯人はわからないみたい by Wikipedia」

「Wikipediaにそんな情報はないし、完全に僕しか被害者いないじゃないか!!それに犯人はいるとしたら戦場ヶ原、お前だよ!」

「え！？何でわかったの！？」

「素でびっくりするなや」

「もしかして、阿良々木君って名探偵なの？」

「小学生でもわかるよ！！」

「名探偵こよみ……ダッサ」

「自分で言うておいてダサいはないだろ」

「見た目はアホ毛、頭脳は空っぽ」

「それ何の生き物だよ！！」

「阿良々木君に決まってるじゃない」

「僕の本体がアホ毛だと！？」

「違うの！？」

「違うよ！！」

「この毛の部分が阿良々木君でそこから下が「え！？何この物体」
ってやつじゃないの？」

「そうだったら僕の評価がわからなくなってきたよ」

「そんなに知りたいなら死んでみたらわかるわよ」

「なんで死ななきゃならねえんだよ!!!」

「ほら、蓋棺事定つて言うじゃない。生前の評価は当てにならない。一生が終わり棺にふたをして初めてその人の真の値打ちが決まるのよ」

「へえ。初めて聞いたな」

「だって馬鹿なもの」

「さらっと悪口を言いやがった」

「どうする？知りたければ私が手伝つてあげるわよ。まあ、そうしたところで阿良々木君が知れるわけでもないし私も知ろうとしないけど」

「それが本当の無駄死にだな」

「評価なんて気にしなくていいのよ。私は阿良々木君が必要だから側にいるの」

「戦場ヶ原」

「アホ毛が阿良々木君だろうと阿良々木君がアホだろうとどっちでもいいのよ」

「おい、悪口入ってるぞ」

「ごめんなさい。ついいつもの癖で言ってしまったわ」

「もう一回言ってくれないか？」

「恥ずかしいけど仕方ないわ。アホ毛が阿良々木君だろうと阿良々木君がアホだろうとどっちでもいいのよ」

「それだよ！！その最後の部分が今までの言葉を帳消しにしてるんだよ！！」

「アホよりバカの方が良かったからしら」

「そついうこと言ってるじゃねえよ！！」

「そつよね。アホをバカにしたらバカ毛になるから変になるものね」

「アホ毛でもバカ毛でもどっちでもいいよ！！」

「何をそんなに怒ってるのよ」

「……もう、いいです」

「そ、なら良いわ」

結局、今日も言い負かされた僕がそこにいた。

「そついやなんとなく思ったのだけれど私達の話って阿良々木君と忍野さん以外女の子しか出ないのだけれど、私達の高校の男女比率ってどうなのかしら？」

「知らねえよ。それこそ本家である化物語を書いている西尾先生に聞けよ」

「なら、この話だけでも決めておきましょう」

「まあ、いいけどこの日常物語に関係あるのか？」

「全く関係ないわ」

「ならなんで決めるんだよ」

「だって他の人にもし聞かれたら答えられないじゃない」

「聞くやついねえよ。まあ、その辺はお前が決めてくれ」

「そ、じゃあ…私達のクラスは男子18人、女子17人」

「おお、意外とまともだな」

「阿良々木1人」

「なんで僕だけ別枠！？これはイジメだろ！！」

「え…だって…阿良々木君だもの」

「理由になっちゃいねえよ」

「仕方ないことよ。これは直江津高校の校則なのだから」

「そんな校則ねえよ！！学校ぐるみでイジメに参加してんじゃないか！！」

「阿良々木君がこの学校に受かったのは、この校則を作るためよ」

「どこまで僕をイジメたいんだ！？」

「実は学校が決めたんじゃないやなくて国が決めたことよ」

「僕が何をしたって言うんだ！！海外へ逃げなきゃならないのかよ」

「ちなみにその他各国へは報告済みだから逃げてても意味ないわよ」

「遠回しに地球外退去通告！？この国のトップは何してくれてんだよ」

「あと、この国や他の各国を動かしてるのは私よ」

「やっぱお前か！！てかどんだけ権力あるんだよ」

「まあ冗談はおいといて、さっさとテントを張るわよ」

結局、言いたいだけ言った戦場ヶ原はせっせとテントを張り出した。

こいつはまだデレないのか？

むしろ日に日にツンの部分が侵食していつてないか？

テントを張った後、近くを散策しに行き、帰って来た頃には夕方になっただけだ。

夕食なのだが、キャンプ場と言えばやはりカレーが定番である。

「キャンプ場と言えばやっぱりカレーよね」

「え!？」

「私としたことが間違ったわ。カレーよね」

「器用な間違いをするんだな。それよりお前カレー作れたのか？」

「当たり前よ。私にとってこれぐらい日常異端児よ」

「ああ、お前は迷うことなき、これ以上ない異端児だよ」

それを言うなら日常茶飯事だろ。

「失礼。噛んだわ」

「違う。わざとだ」

「噛みまみ……それより二人だからカレーの量は少なめで良いわよね」

「途中で飽きるなや!！」

「私のネタなんだからどうしようとして勝手にでしょ」

「違う。それは八九寺のネタだ」

「八九寺? 誰よそれ」

「いや、お前知ってるだろ？あいつの母親の家と一緒に探しただろ
うが」

「5年3組の八九寺真宵ちゃんなんて一切知らないわよ」

「めっちゃめっちゃ知ってるじゃないか」

「正直、私は日々ビクビクしながら生きているのよ」

「なんでだよ」

「噛みネタを最近多用しているから、いつ八九寺Pの圧力がかかって私が降板させられるか心配なのよ」

「いやその心配はないだろ」

「ほら、八九寺ちゃんが使ったのもう定番だから噛みネタと言うより神ネタなのよね」

「そんなに!?!」

「ええ。あと生活には関係ないけど阿良々木君が降板しないかわく
ワクしているのよ」

「ワクワクするな!! だいたい主人公が降板する小説がどこにある
んだよ」

「1111よ」

「断言しやがった!!」

「大丈夫。阿良々木君の代わりに私が最後までやってあげるから。だからもう、ゆっくり休んで頂戴」

「え！？死ぬの！？僕死ぬの！？」

「タッチであつたじゃない。カッチャンが交通事故で亡くなってタツちゃんが霊安室で「綺麗な顔してるだろ？死んでるんだぜ、それ。大した怪我もないのに、ちょっと打ちどころが悪かっただけで、もう……動かないんだぜ」と言う名ゼリフが」

「だからって関係ないだろ。どこに繋がりがあつた！？」

「私は直江津の浅倉南よ」

「誰でもわかるような嘘をつくんじゃない！！」

「とりあえず言つづぐらい良いじゃない」

「まあ、言つづぐらい好きにしろよ」

「だからその為にゆっくり休んで頂戴と言っているのよ」

「なんでお前の言いたい言葉を言う為だけに死ななきゃならねえんだよ」

「雰囲気でないじゃない」

「雰囲気出すためだけに人を死なすんじゃない！！」

「仕方ないわね。じゃあ、そのままが良いわよ」

「当たり前だよ」

「じゃあ、言っわよ」

「お好きにどうぞ」

「綺麗な顔してるだろ？アホ毛なんだぜ、それ。大した学力も無いくせに、ちよつと下に訳のわからない物体が付いてるだけで……動くんだぜ」

「てめえここまでの僕と読者の時間を返しやがれ！！」

「何を怒ってるのか私にはさっぱりだわ。ただ私は阿良々木君を馬鹿にしただけなのに」

「それだよ！！それが大きな原因でハチャメチャになってんだよ！
！もう収集つかねえよ」

「そんなもの私がどうにかしてあげるわよ」

「やってみるよ」

「阿良々木君、カレーが出来たわよ。ご飯にしましょう」

「……………ああ、そうだな」

無理矢理話を落としやがった。

そんなこんなで僕達は夕飯食べながら、星が見えるまで待つのであった。

こよみデイリー 22 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「なあ、月火ちゃん。なんか話が進むペース遅くないか？」

月火「そうだねえ。いつになったら1日が終わるんだよってなるよね？」

火憐「他のメンバーの登場時間が大幅に減っているから一回デモを行うといけないハメになるぜ」

月火「特に八九寺ちゃんは最近めつきり減ったもんね」

火憐「そろそろ八九寺Pの圧力がかかるな」

月火「そうだね」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「夏の大三角形の反対は？」

月火「冬の大三角形!!」

火憐&月火「次回、こよみデイリー23」

火憐「正解は形角三大の夏でした！！」

月火「インチキクイズだ！！」

こよみデイリー 23 (前書き)

勝手に改ページされたりして直そうと思いましたが何回やっても駄目だったので諦めました。

「あれがデネブ。アルタイル。ベガ。有名な、夏の大三角ね。……
…って以前も言ったから言わなくても良かったのよね」

「いや、それでも話してくれて良い」

「ああ、鳥頭の阿良々木君だから忘れてしまったのね。可哀想に」

「雰囲気ぶち壊しだよ!!」

なんだよ、せつかくこの小説にしては珍しく良い感じの話の雰囲気
になりかけたのに。

「冗談よ。それより小学生の時、流れ星が流れてる間に願い事を3
回唱えると叶うって言われてたわよね」

「ああ、そういやそんなこと言われてたな」

「流れ星って宇宙に漂ってる塵とかの宇宙ゴミなんですよ」

「まあ、宇宙ゴミって言われると小石とかもあるから少し違つかも
しれないが、まあ当てはまらなくもないかな」

「その光ってるゴミにお願いをしたのよ。今思えば滑稽よね」

「いや、まあ夢があって良いじゃないか」

「地上で言うと、全力で走ってる阿良々木君にお願いをしてる様な

ものよ」

「最終的にやっぱり矛先は僕に向くんだな」

てか、遠回しにゴミって言ってやがる。

「よくわかったわね。自分が言われてるなんて」

「名前を言われてるこの状況で自分が言われてないと思ってる奴は話を聞いていないやつだけだよ!!」

「阿良々木君の分際でよくそこまで頭が回ったわね。ロリコンさんね」

「ロリコンじゃねえ!!」

「ごめんなさい。間違ったわ、お利口さんね」

「どっちにする僕のこと馬鹿にしすぎだろ」

「そうね。言っただけのこと、それでもないことがあるものね」

「言っただけのことはないのか!？」

「でもね、阿良々木君」

「あん?」

「私は阿良々木君とこの流れ星を、この空を見れたことを本当に良かったと思っているの」

「ああ、僕もだよ」

「だから、この場所を選んでくれてありがとう」

「こちらこそありがとう」

「夏の大三角形を見たのなら冬の大三角形も見たいわね」

「また探しておくよ」

「ええ、お願いするわ」

それからしばらく星空を眺めた僕達は眠りについた。

旅行から帰って来た僕は翌日、羽川との勉強のため図書館へ向かっていた。

途中、ツインテールの小学生が目の前に現れた。

八九寺である。

なんだか久々だな。

仕方ない、忙しいけど僕は優しいお兄さんとして有名だからここはちょっと相手をしてやるか。

そう思ったと同時にボルトもビックリの速度で駆け出した。

「はーーーーっいーーーーくーーーーずいーーーー」

「ぎゃあああああ！ー！ー！」

「会いたかったぞ八九寺ー！ー！久々だな！ー！もっと触らせる。もっ

と揉ませる。」

「きゃー！！きゃー！！！」

八九寺は叫んだ直後、

「ガリッ」

「痛えー！！何しやがるこいつは！！！」

痛いのも何しやがるのも僕だった。

「落ち着け、落ち着くんだ八九寺」

「ああこれはこれはタピオカさん」

「戻るの早！！てか、僕を熱帯地方のキャッサバの根茎から製造した澱粉みたいな名前で呼ぶな。もう一度言うが、僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない！？」

「去りました」

「出番が無かったからか！？戻ってこい！！」

久々に本家のネタを聞いて和んだ僕がいた。

「お久しぶりです。阿良々木さん」

「本当、久々だな」

「ええ、最近は阿良々木さん×戦場ヶ原さんのコンビしか出ていませんでしたしね」

「戦場ヶ原が不安がってたぞ。八九寺Pの圧力で消されるって」

「戦場ヶ原さんを消す前にこの作者を表社会から葬ります」

「この小説がそこで最終回を迎えちゃうよ」

「私が後を継ぎますから大丈夫です」

「お前が書いたら絶対、違う話にするだろ」

「よく分かっているではありませんか、阿良々木さんの分際で」

「誰だつて分かるよ！！」

「まあ、まずこよみデイリーからまよいオンリーにしますね」

「一人称が女子小学生の話かよ。ただの作文みたいになるじゃねえか」

「大丈夫です。私は阿良々木さんより語彙が多いので」

「小学生のお前に負けるはずないだろ」

「前にも言いましたが私は生きていれば阿良々木さんより年上なんですよ。ちなみに徳川家康は私のパシリです」

「分かりきった嘘をつくんじゃないやねえ！！てかお前何歳なんだよ！！それなら完全に忍と同じ様な年じゃねえか」

「嘘ではありません冗談です」

「冗談って言葉は便利だな」

「阿良々木さん並に便利です」

「どついうことだ？」

「頭が悪いなと言われたら頭悪いんじゃない阿良々木なんだと言えば良いからです」

「あ？………ああ、なるほど、お前は僕を馬鹿にしてるんだな？」

「馬鹿になんかしていませんよ。馬鹿なんです」

「お前は戦場ヶ原か！！」

「阿良々木さんはT w i t t e rやブログで見つかりそうですね」

「それも意味わかんねえよ」

「Twitterやブログでは個人情報漏らしたり、悪さをしたのを武勇伝みたいに書き込んだりしているの知っていますか？」

「ああ、最近多いな」

「そのことからバカ発見器と言われてるんですよ。わかりましたか？」

「ああ、分かったよ。お前が何を言いたいのか分かったよ。僕が馬鹿だと言いたいんだな」

「賢いですね」

「うるせえ！！これは出るところ出るといけねえみたいだな！！」

「出るところ出るですって！！いやらしいです！！」

「そういう意味じゃねえ！！法廷だよ！！」

「良いですが、今まで阿良々木さんがしてきた悪事をこちらの弁護士が見逃すと思いですか？」

「八九寺、アイス買ってやるうか？」

「この人最低です！！アイス一つで自分の悪事を揉み消そうとします！！」

「ハーゲンダッツでもいいぞ。なんならハーゲンダッツのバリュエパック買ってやるうか？」

「高級アイスを出しても悪事は消えませんが」

「こうなったら泣き寝入りするしかないな」

「本来ならその言葉は私が言うはずの言葉です。戦場ヶ原さんに半殺しにされても仕方ありませんよ」

「大丈夫だ。僕はゴキブリ並の生命力があるからな」

「ああ、新聞紙で叩かれると死ぬんですね」

まさかの一本取られた状態になってしまった。

「それより、今日も勉強ですか？」

「ああ、昨日まで旅行だったし切り替えて勉強しないといけないからな」

「そういや、鹿児島へ行ってたんでしたね」

「あれ？お前には会えなかったから言っただけだった気がしたけど」

「こよみデイリーを毎回読んでますから」

「偉いな」

「八九寺Pとしての仕事です。それよりどうでしたか？」

「ああ、良かったぞ」

「そうですか。面白くないですね」

「いや、普通に旅行行っただけだから変な期待されても」

「流星が1つ2つ阿良々木さんに衝突してれば面白くなってたのに」

「事件だよ!! ニュースで放送されるわ」

「良いじゃないですか有名になって」

「有名になる前に大惨事になるよ!!」 「私から話題を振つといてあれなんです、長い間話していますが時間は大丈夫なんですか？」

「ああ、…じゃあ、そろそろ行くわ」

「わかりました。それでは、また」

「ああ、またな」

八九寺と別れた僕は図書館へ向かった。

こよみデイリー 23 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「そろそろ夏も終わりだな」

月火「そうだねえ。早かったよ」

火憐「皆は宿題終わったかな？」

月火「終わったかな？」

火憐「ちなみに私は終わったぜ」

月火「私も!!」

火憐「小学校の時の日記って大変だったよな？」

月火「そうだね。最後の日までやらずに置いてたら天気かわからず困ってしまうよね」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「私は今までの天気データを元にその日の天気がわかる!!」

月火「何その特技!？」

火憐&月火「次回、こよみデイリー24」

火憐「いや、まあ嘘だけど」

月火「だろうね」

こよみデイリー 24 (前書き)

間隔がどんどん空くようになってきましたな。

まあ、ぼちぼちやります。

「やっほー、阿良々木君」

「久しぶりだな」

「そうだね。こここのところ勉強も休みがちだったからね」

「今日からまたよろしくお願いします」

「うん。よろしくー」

しかし、これだけ勉強から離れてると本気で不安になってくるな。

「それより阿良々木君、宿題は終わった？」

「あー、少しだけなら」

「宿題は早く済ました方が後から楽だよ」

「それは分かっているんだけどさあ、なんか宿題ってなると勉強をする気が減るんだよなあ」

「まあ、わからなくもないけどね」

「妹の方が先に終わっちゃったから、早くやれ早くやれってあいつらづるさくて」

「阿良々木君も大変だね」

少し雑談をした後、勉強を始めた。
そして、気付くと数時間が経過していた。

「そつだ、阿良々木君。勉強するのも良いけど、自分の力を試すのに模擬試験を受けたらどう?」

「模擬試験なあ。そつだな、受けてみようかな」

「うん。そつした方が良いよ」

「それより羽川、話は変わるけどお前はもちろん宿題終わってるよな?」

「うん。終業式から帰った後に終わらせたよ」

「え!?!一日で!?!」

「うん」

「お前な、先生の立場も考えてみる。夏休みに遊んでばかりいると駄目だから宿題を出して勉強をさせるのを目的としているのに、それを夏休みどころか夏休みの前日に終わらせてしまうなんて先生は涙目だぞ」

「なんで宿題を終わらせた人間が宿題を終わらせてない人間に怒られるのよ」

「まあ、何が言いたいかと言うと 宿題を見せてくれ」

「自分でやりなさい」

その後、羽川から説教をされた僕は家路についた。
あれだぞ？羽川に起こられたくて、あえて宿題を見せてくれと言っ
たわけではないからな。

そうだ。僕は出来ない子だから駄目発言をしたわけで うん。羽川
に叱られたくて言った。

「お前様よ」

「なんだよ忍。珍しく夕方になんか出て来やがって」

「今日は3時のおやつがまだなんじゃが」

「いつもないだろ。いつできたんだよ、その習慣は」

「今じゃ」

「勝手に作るんじゃないか」

「まあまあお前様よ。ここは一旦、話し合つたためにもミスドへ行こ
うではないか」

「僕に何のメリットがあるんだよ！！」

食う気満々じゃねえか。

なんだかんだ言っても忍に甘い僕はミスドへ向かった。

「お前様よ、そろそろこの店ごと買ってくれんかの？」

「いきなり何をほざきやがるこの吸血鬼は」

「ケチな主様じゃ。ミスドの1軒や2軒ぐらいいいではないか」

「ミスドはミスドでも単位が違うよ!!ミスドを軒で買っちゃつなんていねえよ」

「うむう。そこまで言うなら仕方ない。ドーナツを20個で許してやるっ」

「5個な」

「10個」

「え!?!いらなの?」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。5個でもいいですよいや5個がいいです」

その後、ミスドを買って家に帰り、現在自分の部屋で宿題をしているところである。

「ほふぁへはふぁほ」

「ドーナツを食べてから話せ。何を言っているか全くわからない」

「お前様よ。ミスドを買ってくれたお礼に宿題を手伝ってやるっか?」

「え!?!マジで!?!てかお前出来るの?」

「歴史なら大丈夫じゃよ」

「そついや500年も生きてるもんな」

「うむ。歴史だけで良ければ手伝ってやる」

「お願いします」

「ちなみに豊臣秀吉は儂のパシリじゃよ」

「分かりきった嘘をつくんじゃねえ」

「しかも、あやつは大根を空中で切りたくて、自分の刀で斬れなかつたから刀狩りを始めて全部試していたのじゃよ」

「兵農分離政策じゃなかったの!?なんて自分勝手な理由でアホみたいな理由なんだ!!」

「秀吉は厨二病じゃからな」

「いやだー、もう言うな。有名な戦国武将が厨二病だなんて聞きたくない」

「まあ、全部嘘じゃがな」

「分かってたよ」

その後は、ちゃんと手伝ってくれた忍であった。その後、忍と喋っている時であった。

「兄ちゃん……」

でっかい方の妹が扉開けて入った瞬間、こちらを見てすぐに出た。

「ヤバい、早く中に入れ忍」

「もう遅いと思うがなあ」

忍が影に入った直後、でっかい方の妹がまた入ってきた。

「兄ちゃん！！今、超絶美人の女の子が居なかったか！？」

「い、い、いるわけないだろ」

「私見たって」

「あー…あの、あれだ！！幽霊じゃねえのか？」

これは分かりやすい嘘だったか。

さすがに気付くだろうなあ。

「あー幽霊か！！なら私だけ見えても納得だな」

馬鹿な妹で良かった。

「兄ちゃんの部屋に幽霊が出るとはお祓いがあるんじゃないかねえか？と
りあえず、月火ちゃん呼んでくる」

「ちょ、ちょっと待て」

「なんだよ」

「大丈夫だ。被害は無いし見えていないから何の問題もない」

「じゃなくて、見た時のその女の子に危険が及ぶじゃん」

「どついう意味だ!!」

「どついう意味って兄ちゃんがその女の子を襲つじゃん」

「襲わねえよ!!」

「絶対嘘だ!!だって兄ちゃんロリコンだもん」

「ロリコンじゃねえよ!!」

「じゃあ、今回は見逃してやるよ」

話のわかるやつだな。

ここまで素直だと逆に心配になってくるな。

「ところで何か用があったんじゃないのか？」

「ああ、そのことだ。神原さんにいつ会わせてくれるんだ？」

.....完全に忘れてた。

「え、あ、その」

「まさか忘れてたわけじゃないだろうな」

「そ、そんなわけないだろ」

「だよな！これ忘れてたら明日の朝、起こすのにダンベル使っ
てやるよだったよ」

「ハ、ハハハ」

あれ？何かわからないが体から変な汗が出てきたぞ。

ああ、あれだ。

夏だから暑いから仕方ないな。

そうだな、僕が妹が怖くて冷や汗をかかなくはないじゃないか。

「で、いつなんだ？」

「え？」

「え？じゃない。連絡してるんだろ？」

「え？あ、ああ、ああ！つ、次の日曜に会わせてやる！！」

「本当か！？」

「ああ」

ヤバイ。

神原に連絡もしていないのに勝手に決めてしまった。

「いやーやつぱ兄ちゃんは最高だな。愛してるぜ兄ちゃん！！なん

ならキスしてやるのか？」

「いらねえよ！！とりあえず、さっさと出ていきやがれ」

妹が出て言った直後、僕は神原に電話をした。

「神原駿河、特技は掃除だ」

「嘘つけ！！どちらかと言ったら散らかすのが特技じゃねえか！！」

「その声とツッコミはらぎ子ちゃんだな」

「そのあだ名は一生封印しといてくれ」

「どうしたんだ一体？」

「ああ、今週の日曜って空いてるか？」

「空いてるも何も私は阿良々木先輩が呼ぶのであればいつでも時間を作ると言ってるではないか」

「ああ、助かるよ。実は、妹達と会ってくれないか？」

「む？重婚は法律で認められていないぞ？ましてや妹さん達となんて」

「お前は僕の一体なんなんだよ！！」

戦場ヶ原みたいなことを言うな。

どんだけヴァルハラコンビはそっくりなんだよ。

「それよりいきなりどうしたんだ？妹さん達と会ってくれなんて」

「いや、妹達がお前に会いたがってうるさいから」

「まあ、私は構わないが」

「そうか、助かるよ」

「で、どこまで良いんだ？」

「何が？」

「何がって、妹さん達に手を出して良いかどうか」

「良いわけねえだろ！！」

「そんなあ。私に拷問を受けるとでも言うのか」

「どんだけだよ」

「大丈夫だ。口説くぐらいだから」

「やっぱりお前に妹達を会わせるのは考え直す必要があるみたいだな」

「すまない！！私が悪かったから、許してくれ！！」

「じゃあ、手を出さないと約束するな？」

「ああ、約束する！！手は出さずに口と足だけにするから」

「悪い、妹達には都合がつかなくなったと言っとくよ」

「わああ、手も足も口も出さないからあ」

「絶対だからな」

「はい」

「なんだよその返事は。まあいいや、そういつごとだから頼むよ」
「うむ。了解した」

「こうしてなんとか明日の朝の身の危険は回避できた。

日曜……………不安しかねえ。

こよみデイリー 24 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「久々の出番だったぜ」

月火「私は出番なかったけどね」

火憐「まあまあ、次回は出ると思うし」

月火「そうだね。それになんと云ったって神原さんに会えるんだからね!!」

火憐「うんうん!! テンション上がってきたー!!」

月火「上がってきたー!!」

火憐「ようし!! 予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「神原さんに会いたいかーっ!!」

月火「会いたい!!」

火憐&月火「次回、こよみデイリー25」

火憐「ニューヨークへ行きたいかーっ!!」

月火「なぜ、ウルトラクイズ!？」

こよみデイリー 25 (前書き)

ふとお気に入り件数を見ると40件を越えていました。

この小説なんかをお気に入りに入れていただき、また読んでいただき本当にありがとうございますm () m

待ちに待ったの日曜日。

いや、待ちに待った気持ちは妹達であって、決して僕の気持ちではない。

どちらかと言うと、来ないで欲しかった日曜日である。

僕は、不安でいつもより早く目が覚めた。

それはそうだ。

僕の妹達の身がどうなるか心配になるのも無理はない。なんて言ったらって相手がああ神原駿河である。

「何、シリアス展開に持っていてなんだよ、兄ちゃん」

「おい、でつかいの。ノックもせず勝手に部屋に入ってきたうえに、僕の心の中を勝手に読むな！！」

しかもなんだ、その右手に持ってるパンパンに張った水風船は。

「ノックしたのに反応無かったから寝てると思って起こしに来てやつたんだよ」

「起こしに来るのに何で水風船がいるんだよ！！」

「ちつつち。兄ちゃんも甘いな。これはただの水風船じゃないぜ」

「じゃあ、なんだよ」

「中身は水ではなくセメダインだ！！これを鼻と口に落ちるようにしようとしたのさ」

「僕を殺す気か！！寝てるやつにいきなりそんなことをしてみろ。頭が回らないから窒息死するぞ」

「いや、人間は頭回らないし、回るとしたらマジシャンぐらいだよ」

「あー、ああ、僕の言い方が悪かった。思考回路の方だよ」

「そう言ってくれないとわかんないよ」

普通の人にはわかるんだよ、これで。

「とりあえず、起きたんだからもういいだろ？出て行けよ」

「えー別にいいじゃん。もっと私に絡もうぜ」

「お前に絡んでる暇があれば僕は今から勉強する」

「いいじゃん、いいじゃん。せつかく可愛い妹が絡もうって言うてんだからよー。もっとイチャつこうぜ」

「僕は妹とイチャつくようなシスコンじゃない！！」

「私がブラコンなんだからいいんだよー」

そう言いながら後ろから絡んできた。

いや、この場合は絡み付いてきたの方が正しいかもしれない。

普通ならば、妹が後ろから兄に抱きついてるような微笑ましい見えるかもしれない。

しかし、体勢はチョークスリーパーみたいな感じである。

「どういう理屈だ！とりあえず、離れる！！」

「妹がこんなに抱きついてあげてんだからもつと喜べよー」

「だから僕にそんな趣味はない！！」

そして、身長も僕より大きいかつ力も上の妹の腕が僕の首を徐々に絞めていたのもまた事実である。

「おい、でつかいの離せ！！死ぬ！！死ぬ！！」

「嬉しすぎて悶え死ぬって！？そんなに誉めなくてもいいんだぜ」

「違う！！入ってるんだよ！！本気…で…ヤ…バ……イ」

ああ、僕死ぬんだ。

妹がイチャついてきた時のチョークスリーパーで死ぬんだ。
主人公なのに酷い扱いだったなあ。

情けなさすぎるよ。

その時、急に体が楽になった。

ああ、死んだのか。

せめて死ぬまでに羽川の眼球を舐めたかったなあ。

「……ちや…ん」

ん？なんだ？誰だよ。
せっかく思い出に浸ってたのに。

「兄…ちゃん」

あ？段々はつきり聞こえるようになってきたぞ。

「兄ちゃん！！目を覚ませー！！」

その瞬間ほど、吸血鬼の後遺症があつて良かったと思つ時が無かつた。

このおかげで避けることができたのだ。

何故かと言つと、目を開けた瞬間、ダンベルが上から落ちてきた。
いや、降り下ろされたの方が正しい。

「お前は僕を殺す気かあ！！何てもん降り下ろしてんだ！！てか前にも同じこと言つたはずだぞ」

「兄ちゃんが急にぐったりして動かなくなったから衝撃を与えようかなと思つて」

「衝撃がデカ過ぎるわ！！せっかく帰つてきたのにそのままあの世に送還されそうだったよ！！」

「てか兄ちゃん動かなくなつたけど誰にやられたんだ！？」

「てめえだよ、馬鹿妹！！」

「何で私なのさ？」

逆に、この部屋に僕とお前しかいない時点で他に誰がいるんだよ。

「自分のしたことを覚えてねえのか!？」

「えーと、兄ちゃんに絡んでチヨークスリーパーをかけた」

「わざとだったのか!？僕が何をしたって言うんだ」

「でも兄ちゃん嬉しそうだったじゃん」

「どこに死ぬって本気で言いながら喜ぶやつがいるんだよ!！」

「私なら兄ちゃんに同じことされたら嬉しいな」

「そこまでいくと変態と言うより、逆にカッコイイよ」

その後、火憐ちゃんと月火ちゃんを連れて神原の家に行ったのだがそれまでが苦痛であった。

そりゃそうだろ。

八九寺を見かけたにも関わらず戯れることが出来ないんだぞ。

これ以上の苦痛があつてたまるものか。

しかも、八九寺のやつは僕に気づいて周りをチヨロチヨロしやがるんだよ。

ここで相手をすると妹達にセクハラ高校生が僕だとバレてしまうので必死に耐えたが。

いや、セクハラ高校生に関しては潔白だ。
あれは誰に何と言われようとスキンシップだ。

そして、そうこうしているうちに神原の家に着いたのだが、ここからが第2関門といったところである。

「やあ、阿良々木先輩」

「おう」

「そちらが妹さん達か」

「ああ。こっちのでっかいのが火憐で、ちっこいのが月火だ」

「阿良々木火憐です！！よろしくお願ひします！！」

「阿良々木月火です。よろしくお願ひします」

「神原駿河だ。呼び方は好きな様によんでくれ」

「駿河さんって呼んでもいいですか!？」

「ああ、構わない」

「「やったー!!」」

「さて、立ち話もなんだから私の部屋に行って良いことをしようではなry」

僕は躊躇せず神原にラリアットを喰らわした。

「何をするんだ阿良々木先輩」

「何をするんだじゃねえよ！！お前完全に妹r y」

その瞬間、僕より身長の高い女の子から跳び膝蹴りを喰らった。犯人はでっかい方の妹である。

「駿河さんになんてことするんだ！！」

「そつだよ！！お兄ちゃんごときが何駿河さんにしてんのさ」

え！？何！？

僕何か悪いことしましたっけ？

むしろ妹達を守るうしたんですけど。

「さ、駿河さん。こんな馬鹿兄ちゃんほつといて遊ぼうよ」

「ああそつだな。では阿良々木先輩、妹さん達は預かった」

そう言いながら、家の中へと消えて行った。

僕は仕方なしに来た道をトボトボと帰っていた。

「あ！暦お兄ちゃん」

「ん？おお、久しぶりだな千石」

「本当久しぶりだね」

「宿題は終わったか？」

「うん、まだ。少しはやったんだけどね」

「そうか。あと少ししか夏休みはないけど頑張れよ」

「うん。そうだ、暦お兄ちゃんは何処か行ってたの？」

「ああ、神原の家に妹達を連れて行ってた」

「ららちゃん達を？」

「そう。あいつら神原に会わせろってうるさくてさ」

「神原さん人気者だね」

「女子中学生の間ではかなり人気らしいな」

「それに比べて撫子なんて」

「おい、いきなりどうした千石!？」

「撫子なんて囿物語で本当のラスボスになってしまったから撫子を好きな人なんて絶対いないよ」

「それ以上話を進めるな!!大丈夫だ!!お前を好きなやつなんて山ほどいるから」

「もし囿物語がアニメ化とかしたらどうしよう。余計に評価下がって最低のパラメータが振り切れちゃうよ」

「それアニメ化してほしいように聞こえるぞ。心配するな、七夕の短冊に囿物語アニメ化禁止って書いておいたから」

「まあ、撫子のことを暦お兄ちゃんが好きでいてくれたらそれでいいや」

「ん？何か言ったか？」

「ううん、何でもないよ」

「そうか。それじゃあ、宿題頑張れよ」

「うん」

千石と別れた後、本日2回目の八九寺を見ることになる。
てか、今日はやけに人に会うなあ。

「はーちーくry」

「あーらーらーぎーすわーん」

「グハッ」

八九寺は僕を見るなり魚雷のごとくみぞおちをめがけて飛んできた。

「イッテー。人間魚雷みたい……というより完全に人間魚雷だよ！」

「すみません。滑りました」

「違う。わざとだ」

「滑りまみた!!」

「わざとじゃない!?!」

「スベりました。阿良々木さんが」

「僕がいつスベったんだよ!!」

「今日はいつもと違うパターンでやってみました」

「急に違うのきたからビックリしたよ」

「毎回同じような展開だと飽きられるので」

「考えてるんだな。さすが八九寺P」

「まあ、結局のところ阿良々木さんのオチ次第なんですが」

「そんなこと言われると次からプレッシャーがかかるじゃないか」

「心配しなくても大丈夫です。阿良々木さんはいつも失敗してますから」

「辛口!!」

「それよりアバラ木さん」

「僕を骨の名前みたいな言い方をするな。僕の名前は阿良々木だ」

「妹さん達と何処へ行ってたんですか？」

「スルー!？」

「ほら、さっき言ったじゃないですか。いつもと違うパターンもいるって」

「だからってスルーはねえだろ。泣くぞ?本気で泣くぞ?」

「やめてください。こちらが恥ずかしいです。というか引きます」

「ちなみに、八九寺や忍に冷たくあしらわれても嬉しく感じるだけだ」

「ロリカツコイイ!!」

「さっきの話だけど、妹達を神原の家に送っていたんだよ。あいつに会わせろってうるさいから」

「あの方に年頃の女の子を預けて大丈夫なんですか？」

「大丈夫なわけねえだろ!!」

「今頃、妹さん達は神原さんの餌食ですね」

「帰って来て変態の世界に引き込まれてたら僕はあいつらの兄を辞める」

「いや、そこは受け入れてあげて下さいよ」

「やだよ!!あいつが言う一言目には「脱げばいいんだな」だぞ!」

「あ…ああ…御愁傷様です」

「見捨てるな!!」

「まあ、大丈夫ですよ。なんだかんだ言ってあの方は」

「そつだと良いんだが」

「それより、阿良々木さん」

「私はハーゲンダッツが食べたくなくなりました」

「だからなんだよ」

「買って下さい!!」

「知るか!!」

「たまにはいいじゃないですか!!」

「何でお前に買わなきゃならねえんだよ」

「忍さんにはミストをかうのに私には無しですか」

「忍とお前は別だよ」

「こうなればロリカツコイイの称号は外してこれからはロリ気持ち
悪いにしますから」

「ただの変態じゃねえか!!」

「いや称号を変えなくても現在進行形で変態ですからね」

「僕がいつ変態みたいなことをしたって言うんだ!!」

「逆にいつしなかったんですか!!」

「だからあれはスキンシップだよ」

「あれがスキンシップと認められるなら世の中から痴漢という犯罪が無くなります」

「良かったじゃないか無くなって。痴漢はダメだからな」

「どの口が言うんですか!! だいたい無くなるの意味が違います」

「わかった、わかった。これからは僕は紳士になる」

「紳士と言うより瀕死になってほしいです」

結局、その後僕は八九寺にハーゲンダッツを買って家に帰った。

てか幽霊ってアイス食うのか？

こよみデイリー 25 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「やっと神原さんに会えたな!!」

月火「うん!! 本当楽しかったね」

火憐「そうだな!! あんなことやこんなことまで」

暦「お前達何をされたんだ!？」

火憐&月火「(お) 兄ちゃんは出てくるな!!」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「神原さんと私達は何をしたでしょうか？」

月火「何をしたんだらうねえ」

火憐&月火「次回、こよみデイリー26」

火憐「ナニをしたんだらうな」

月火「その言い方はアウト!!」

こよみデイリー 26 (前書き)

ガハラさんをいつ、どうやってデレさせるかを一番悩んでいます。

家に帰って勉強でもしようかとした時、忍が飛び出してきた。

「ついにじゃ」

「何がだよ」

「ついに儂が話す姿を世の中の忍野忍ファンにお届けすることができてるのぉー!!」

「何の話だよ」

「何って偽物語アニメ化の件じゃが」

「ああ、偽物語アニメ化の件な……………えー！？[冗談だよな？な？エイプリルフールまでにはまだ半年以上あるぞ」

「何を言っておる。事実が決まってるではないか」

「ちよ…え…あれを映像化する気なのか」

「うむ。儂の可愛い姿を視聴者にお届けじゃ。サービスショットのお風呂の場面もあるしな」

「アウトだ!!アウト!!」

「お前様よ。儂のがアウトならばお前様と妹御との歯ブラシプレイなんぞもってアウトじゃぞ」

「何！？あれがアウトだと！？あれは国技だろ！？」

「そんなわけあるか！！」

「嘘だ！！だって僕はオリンピックの種目で見たぞ」

「古代オリンピックですらそんな競技はないわい！！」

「嘘だ！！何かの間違いだ！！」

「まあ、何はともあれ儂もようやく話せるようになるんじゃないかな。ミストも食べ放題じゃし」

「なんで食べ放題になるんだよ」

「え！？だって原作でお前様がミスト食べ放題って」

「言ってるええよ！！」

「なら書き換えて再出版じゃ」

「無茶を言うな！！」

「2012年のヒロインじゃって言うのに扱いが酷くないかの？」

「お前はどこまで大物なんだよ」

いや、まあ怪異の中では大物だけどさ。

「当たり前じゃろ。偽物語でテレビにも出るし傷物語で映画にも出

るし、今年ブレイクした武井咲ちゃんをも超える勢いの女優なんじやぞ」

「その前にお前は女優じゃない。それにそれなら主人公の僕の方が出る場面多いじゃないか」

「お前様の中の神谷浩史さんは需要はあるが、お前様自身には全く需要がないわい。物語シリーズがお前様で成り立っているとっておるのか!？」

「残念過ぎる主人公だな!!!いや、まあ僕で成り立ってるとは思ったことないけど」

「同じ男でもあの小僧は需要はありそうじゃがな」

「ああ、忍野か。そういやこの話で忍野って出てきてないよな?」

「うむ。実は筆者が出すタイミングを逃して出せずに結局夏休みもあと少して終わろうとしてるんじゃないよ」

「原作ならその時期ぐらいに偽物語に入るからこの街から出て行ってるからもう出るタイミングないじゃないか」

「そうなんじゃよ。まあ、筆者は無理矢理出すと思うがな」

「てか、フラグを立てるな」

「まあ、僕はどっちでも良いわい。とりあえず、僕は今からモンハンをやるから邪魔をするではないぞ」

「しねえよ。てかモンハンって…完全に現代っ子じゃねえか」

忍が影に戻り、一人になった僕は勉強をするため机に向かった。勉強を始めて数時間後、妹達が帰ってきた。

階段を走って上がって来る音を聞いてすぐに僕の部屋の扉が勢いよく開かれた。

「ただいまんぼるー!!」

「テンション高っ!!」

「そりゃそうだろ兄ちゃん!!神原さんと夢のような時間を過ごせたんだから」

「そうだよお兄ちゃん!!まあ、友達のいないお兄ちゃんにはわからないだろうけど」

「その神原は誰に紹介されたと思ってやがる」

「えーと羽川さん?」

「違う」

「撫子ちゃん?」

「違う」

「戦場ヶ原さん?」

「違う!!だいたいお前達にはまだ紹介していない」

「じゃあ、八九寺ちゃん？」

「それもお前達はまだ知らないはずだ!!」

「じゃあ、忍野さんだ!!」

「それこそ一番違うよ!!原作でもお前達は見たことないからな。なんで知ってるんだよ」

「あれ？何でだろ？てか、知ってる中で神原さんと関係がある人はもういないぜ？」

「僕だよ!!」

「またまた冗談を。それが本当だったら口でスパゲッティを食ってやるよ」

「ただの食事だよ!!」

「冗談だよ。兄ちゃんには感謝してるぜ。なあ、月火ちゃん」

「うん!!生まれて初めて私達の役に立ったよ!!」

「笑顔で酷いことを言わないでくれ」

「それより本当楽しかったなあ。あんなことやこんなこととして」

「あんなことやこんなことって何だ!?まさか神原のやつお前達に手を出したのか!？」

「そんなわけないじゃん。兄ちゃんじゃあるまいし」

「そうだよ。手を出すのはお兄ちゃんぐらいだよ」

僕は兄としての立場がなんでこんなにもないんだ。

僕ほど好青年はいないぞ。

「そうだ。これからは私達を敬った方がいいぜ、兄ちゃん」

「何が嬉しくてお前達を敬わなければならぬんだよ」

「ふっふっふ。聞いて驚くな兄ちゃん！！なんと私達姉妹の話である偽物語がアニメ化が決定したのだ！！」

「あ…ああ」

「反応薄！！もっと驚きとかツッコミとかしろよ！！」

「仕方がないよ火憐ちゃん。お兄ちゃんの頭じゃ思考回路が追いつかないんだよ」

「ああ、なるほどな。悪かったよ兄ちゃん」

「おい、お前ら。どれだけ実の兄を馬鹿にするんだ」

てか、忍に1回聞かされてるから驚けねえんだよ。

「馬鹿なのは事実じゃん」

「馬鹿じゃねえよ！！少なくともお前よりはマシだよ、この鳥頭」

「そんなこと言ってもいいのかな？偽物語の主人公は私達なんだし、兄ちゃんが出なくても問題はないんだぜ？」

「いや、主人公は僕だから」

「そんなわけないじゃん！！そりゃ化物語は兄ちゃんが主人公だったけどさあ、偽物語は、サブタイトルがかれんビーとつきひフェニックスだぜ？完全に私達じゃん」

「じゃあ化物語の各話のサブタイトルを言ってみる」

「えーと…ひたぎクラブ、まよいマイマイ、するがモンキー、なでこスネイク、つばさキャットじゃん」

「お前達と一緒に全員名前が入ってるだろ」

「なんと！…！」

「じゃあ、結局はまたお兄ちゃんが主人公ってことなの？」

「ああ、そうだ」

「いや、兄ちゃんが居なくても話が進むはずだ！！」

「進まねえよ！！」

誰が怪異を対処するんだよ。

「ちえつ。なんだよ兄ちゃんばっかり」

「いや、そんなこと言われても」

閑話休題

「それより神原の家で何してたんだよ？神原の家ってゲームとかも無いし」

「ひーみーつ。あれだよ、女同士の秘密ってやつだ」

「まあ、神原に何もされてないんなら別に良いけど」

「しかも、また遊ぶ約束をしちゃったんだよ」

「でもさあ、その時に何故か駿河さんに次に会う時にはスクール水着を持って来てほしいって言われたんだけど何でだろうな」

「うーん。あれじゃない？駿河さんの中学とは違ってたから気になっただけじゃない？」

「あーなるほどな。さすが月火ちゃん」

「おい、我が妹達よ」

「何だよその喋り方は」

「今言ってたことは本当なのか？」

「うん。帰り際に言われたけど」

「よく教えてくれた。僕は今から用事があるから部屋から出て行ってくれるか？」

「何だよ急に。せっかく話をしてやってたのにさ」

「話ならまた後で聞くからとりあえず、今は撤退してくれ」

「仕方ないなあ。行こう月火ちゃん」

「そうだね」

そう言っただけで妹達が部屋から出て行ったのを確認してから僕は携帯を手にし、アドレス帳から神原の電話番号を押し電話をかけた。

「神原駿河、阿良々木先輩の工口奴隷だ」

「誤解されるから頼むからやめてくれ」

「その声と性癖は阿良々木先輩だな」

「お前は声で性癖がわかるのか!？」

「工口の貴公子をなめてもらっては困るぞ」

「お前は女だから貴公子って時点で間違ってるよ」

「うむう。なら工口の貴公子は阿良々木先輩に譲ろう」

「いらねえよ!！」

「遠慮はいらぬぞ。私は阿良々木先輩なら喜んで譲ろう」

「だからいらねえよ!!」

「なら私が女である以上エロの貴公子の称号はつけられないのだからどうしたらいいのだ!？」

「知るか!!」

「じゃあ、永久欠番ならぬ永久欠名だな」

「もう勝手にしてくれ」

「それより話があるのではなかったのか？」

「ああ、思わず切りそうになったよ。お前、妹達の帰り際に言ったことわかるな？」

「ああ。次に会う時にスクール水着を持って来てほしいと頼んだ!」

「包み隠さずストレートに言うところがカッコイイ!!」

「楽しみにしてるぞ」

「おお。楽しみにしておいてくれ……………じゃねえよ!!お前はなんで妹達にそんなこと言ってんだよ!!」

「なんでって下心丸出しだからに決まってるではないか。ダメなのか?」

「ダメに決まっているだろうが!!」

「しかし、阿良々木先輩は妹達に手を出すなどは言ったが衣類を借りるなどは言っただけではなかったか」

「普通に考えればわかるから言わなかったんだよ」

「でも、手を出してはいけないし衣類も借りてはいけないし酷だぞ」

「当たり前なことだ!!」

「とりあえず、今回は持って来てもらうことで良いんだな」

「会いたくないんだな?」「すまない、私が悪かった。お詫びとして裸で体に阿良々木先輩と書いて街中を走ろう」

「僕の評価が瞬殺だよ!!なんでそんなことをするんだよ」

「私がしたいからだ」

「お前の私欲のために阿良々木家はこの街から出て行かなきゃならねえよ!!」

「それは困るな。阿良々木先輩が居なくなるとは私が困る」

「神原…」

「私の部屋は誰が片付けるんだ」

「お前がやれよ」

「それより話を戻そうではないか。何の話をしてたのだったっけ…
…ああ、そうだ私が今裸かどうかの話だったな」

「違うよ！！お前が妹達に言った内容についてだよ！！」

「残念ながら私は服を着ている」

「何が残念だよ！！別に残念だとは思ってないよ」

「そうか、なら私は脱げば良いんだな？」

「頼むから投げたボールを投げ返してくれ。まあ、いいよ。それより次会うときはスクール水着は禁止だわかったな？」

「なら聞くが阿良々木先輩は火憐ちゃんや月火ちゃんの水着を見て何も思わないのか！？」

「思うわけねえだろ！！どんなシスコン野郎だよ！！」

「何！？阿良々木先輩ともあるう人が妹の水着を見ても何も思わないだと！？私なんか今この話をしているだけで興奮してきたぞ。とりあえず、服を脱がs」

「とりあえず、わかったな！？持って行かさねえからな」

そう僕は言い放つと電話を強制的に切った。

これ以上話していると僕まで変態と思われてしまうからな。

こうして不安な日曜を終え、その後は平穏な日々を過ごし、夏休み最後の日を迎えるのであった。

宿題を残して。

暦「暦です」

忍野メメ「メメです」

暦「なんでお前がここにいるんだよ!!」

メメ「そんな必死になってどうしたんだい。何か良いことでもあったのかい？」

暦「だから何でお前がここにいるんだよ」

メメ「いやー僕が一番ビククリしてるよ。なんて言っただって本編未登場なのに初登場が後書きなんだからねえ」

暦「断れよ!!」

メメ「ここで断ったら次がいつになるかわからないだろ？」

暦「まあそうだけども」

メメ「僕だってそりゃ少しは出たいものさ」

暦「忍野からその言葉を聞きたくなかったよ」

メメ「そうかい？」

暦「そうだ。予告編クイズは無しで良いよな？」

メメ「ああ、僕はそんなキャラじゃないからねえ」

暦「えーじゃあ、次回、こよみデイリー27」

メメ「次回は忍ちゃんが活躍かい？」

こよみデイリー 27 (前書き)

鬼物語、読破しました。

ネタバレになるのであんまり言わないですが感動しました。

鬼物語のやりとりもネタバレにならない程度に若干使わせていただきました。

夏休み最後の日、僕は絶望を感じていた。

前話を読んでもらえてたら予想はつくとは思いますが僕が何故絶望を感じているのかを一応言っておこう。

「宿題が終わってねえー!!」

「いきなり大声を出すでない。せっかくクレヨンしんちゃんを見ておるのに」

忍は今、僕の携帯でテレビを見ている状態であった。

「僕が絶望を味わっている時にお前は夏休み恒例のアニメ大会見やがって」

「お前様が悪いんじゃない。僕には関係ない」

「助けてよーのぶえもん」

「ドラえもんみたいな言い方をするでない!!」

「別にいいだろ。そろそろ傾物語の時期だし」

「そんなメタな理由で呼ばれるとは思わなかったわい」

「それより何か道具を出してよー」

「そんなものあるか!!ドラえもんは未来から来たロボットじゃが

「僕は過去からいる怪異じゃぞ」

「僕の忍が怪異なわけがない!!」

「某アニメの名前みたいに言うてない」

「過去に戻れたりとか出来ないのか？」

「できるぞ」

「だよなあ。さすがに過去に戻れたりできるよなあ………え!?!?今なんて!?!」

「だからできるぞ」

「マジで!?!」

「うむ。ただし、それは原作の傾物語で書いておるからやらないほうが良いな」

「確かにそれもそうだな。じゃあ、どうすんだよー」

「僕に馬鹿な相談する暇があれば宿題をすればよいじゃろつが」

「お前はミスドの恩を仇で返すのか!?!」

「それとこれとは別じゃ」

「しかし、これは本当にピンチだな」

「そんなに残っておるのか？」

「3分の1ぐらい」

「なら本気を出せば終わる範囲じゃろ」

「僕の辞書に本気という文字はない！！」

「ものすごいカッコ悪！！ナポレオンの価値が下がるわい」

「僕の辞書に不可能はある！！」

「一般人じゃな。そんなアホなこと言ってる暇があればさっさと宿題をせんか」

「やれやれと言われたらやりたく無くなるんだよ」

「お前様は子供か！！」

「少年の心を忘れていないのさ」

「救いようのない男じゃな」

「なあ、忍一手伝ってくれよ」

「知らん。俺には関係のないことじゃ」

「手伝ってくれたらキスしたり全身揉んでやるから」

「お前様しか得していないじゃろ、それ」

「何故バレた!？」

「じゃあ、もし僕の宿題が終わったら忍、八九寺、余接ちゃんを一つの部屋に集めたポーナスステージを用意してくれ!！」

「ネタバレとは最低じゃの」

「大丈夫だ。それほど本題には影響はないから」

「まあ、これから読む人の影響に出ないんじゃないじゃったら構わんが」

「ただ、僕が興奮していただけだ」

「気持ち悪!！」

「金髪幼女に気持ち悪いと言われた!？」

しかし…なんだろう。

このゾクゾクする気持ちは。

忍に冷たい目で見られるとなんだか興奮する。

「だんだんと猿の娘みたいになつてきておるぞ」

「僕は神原みたいに変態ではない!！」

「十分変態ではないか。それが変態でないならこの世に変態は存在せんわ」

「僕のどこが変態なんだ。僕は金髪幼女に冷たい目で見下されたり、

裸足キックを喰うのが好きなのだ」

「儂が間違っておった。お前様は変態ではない」

「わかったなら良いけど」

「変態ロリコン野郎じゃ」

「何か増えた!!」

「人間に対して儂は別に思うことはないんじやが、最近は何故か委員長や蟹の娘の娘のことが可哀想になつてきたわい……はあ」

「ため息をつくな。ため息をつくと幸せが逃げていくらしいぜ」

「まあ、お前様の場合幸せより周りから人が逃げて行くと思うがな」

「うるせえ!!」

「お前様の相手をしてたら腹が減ったわい。ミスドに行くぞ」

「ちよっと待て」

「何じゃ？早く行かんと閉まってしまうぞ？」

「閉まらねえよ!!今何時だと思ってるんだよ!!まだ朝の10時だぞ。それより今まで黙ってたんだが……なんでお前は吸血鬼なのに朝起きてんだよ!!」

「何を言っておる。早寝早起きをしなければ体調を崩すぞ」

「吸血鬼の口から一番その言葉を聞きたくなかったよ!!」

「生活リズムも崩れてしまっしな」

「吸血鬼は夜起きて朝寝るのが基本だから、逆にお前のはリズム狂ってるんだよ」

「仕方ないじゃろ。早く起きんかったらしんちゃんもプリキュアも見れんからな」

「別に見なくて良いだろ」

「僕の楽しみなのじゃ」

「じゃあ、夏休みが終わったらどうすんだよ？それも8月いっぱいかやっても9月の最初の方までだぞ」

「じゃったら、スッキリ!!を見てから少し休憩してからひるおび!を見る」

「主婦か!!」

「主婦って、別にお前様と結婚なんてしておらんぞ。いや…その…なに…お前様がしてくれと言っんじやったら…してやらんでもないが」

「言っかあ!!」

なに、頬を赤くしてモジモジしてるんだよ。
可愛い過ぎるじゃねえか。

「さて、それじゃあ落ち着いたところでミスドでも行くかの」

「行かねえよ!」

「ミスドを買ってもらつお礼に宿題を手伝つてやるつかと思つたのじゃが」

「忍、何してるんだ?早くミスド行くぞ」

「単純な奴じゃな」

そうして僕はミスドへ行き帰つて来た頃には平日ならひるおびが始まるつとする時間になっていた。

「さて、忍。宿題するぞ。歴史は前に忍が教えてくれて終わってるから、後は国語と英語だ」

「言つておくが僕は歴史以外わからんぞ」

「は?」

「当たり前じゃろ。僕は人間ではない。怪異じゃぞ?しかも僕は日本語を主として生きておらんかつたし。ちゅーかほとんど使つておらんかつたし」

「じゃあ、英語なら」

「英語もようわからん」

「お前、さては確信犯だな!」

「なんのことじゃ?」

「出来ないのわかって僕にミスドを買わしたろ?」

「ミスド?何のことじゃ?」

「その目の前にあるミスドのこと……って無い!?いつ食ったんだよ!」

「僕には何のことかさっぱりじゃ」

「じいじ…」

「さあ、僕には難しい過ぎて手伝えんからお前様ががんばってください」

「わかったよ。わからないものを手伝えって言うても無理だしな。ミスドのお礼はキスで許してやる」

「結局そこかい!」

「ほら早く僕の口に」

「吸血鬼ばんち」

金髪少女のアップパーを喰らった僕は意識を失いベッドの上に倒れこんだ。

そして、目を覚ました僕は外を見た。

「あー気を失ってたのか。まだ明るいつてことはそんなに時間は立ってないのか。さて、諦めて宿題をするか」

と、時計に目をやる。

7時10分。

あれ？時計壊れてるのか？

それとも、空がぶっ壊れてるのか？

「兄ちゃん起きろー」

「お兄ちゃん起きなよー」

「え？」

そう。

壊れていたのは、時計でもなく空でもなく僕の頭であった。

「なあ、今日って何日だ？」

「8月29日だけど」

「始業式の日がある？」

「うん。まだ、寝ぼけてるのかよ」

僕が意識を無くしてた時間は数時間ではなく、丸一日であった。そして、

宿題終わってねえー！！！！

「あー体がダルいなあ。風邪かなあ。今日は学校休まなくっちゃ」

「何言ってるんだよ兄ちゃん。馬鹿が風邪ひくはずないだろ」

「それは間違ってるよ火憐ちゃん」

おっ、まさかの月火がフォローしてくれるとは。

「馬鹿だから体調管理が出来なくて風邪をひくんだよ」

するわけねえよな。

うん。わかってたよ。

わかってたけどもしかしたらって希望を持っていたのに。

「ああ、なるほど！！さすが月火ちゃん！！」

「ああ、なるほどじゃねえよ！！」

「元氣じゃねえか兄ちゃん」

しまった。ついツッコミを入れてしまった。

「今治ったんだよ」

「そっか。ならよかった」

こいつらにはもう少し人を疑うことを教えた方がいいのか？

結局、学校を休めなかった僕は宿題を終わらせていないまま登校することになった。

学校に登校したら羽川と戦場ヶ原に2回ずつ殺されることになるんだらうなあ。

登校して羽川と戦場ヶ原に投降か。

と馬鹿なことを考えていると目の前に徐々に姿を見る女子小学生がいた。

まあ、八九寺だけど。

悪いが八九寺、僕は宿題が終わってないせいで憂鬱なんだ。構ってる暇なんて無いんだよ。

そう思いながら走り出した。

いつも通り八九寺に向かって。

「はーっういーくうーずいー」

「ぎゃああああー!!」

「もっと触らせる!もっと揉ませろ!もっと舐めさせる!!」

「きゃー!!きゃー!!」

「コラ、暴れるな。キスが出来ねえだろ」

「ガブツ!!」

「痛えー!!何すんだこいつは!!」

やっぱり、痛いのも何すんだこいつも僕であった。

「ああ、阿良ロリさんでしたか」

「僕をロリコンみたいに言うな。僕の名前は阿良々木だ」

「違います!!阿良ロリです!!」

「本人が言っているのに否定された!!」

「阿良々木さんはもう阿良ロリとして市役所に名前を変更してもらいましたから」

「他人が言つて変更出来るの!?!しかもやむを得ない理由もないのに!?!」

「阿良々木さんが小学生以下の女の子にセクハラばかりしていませんと言つたらなんか受理されました」

「市役所の人達仕事をしろ!!つか、逆にそれだけでよく済んだな。警察とか動きそうな理由じゃねえか」

「そこは私の権力です」

「八九寺Pの力は市役所までも動かせるのか!?!」

「当たり前です。それより遅れましたが阿良々木さんお久しぶりで
す」

「ああ、久しぶりだな。もう会えないかと思つたぜ」

「心配しなくてもこの話では私はずっといますから。この話にルールはありませんから」

「ん？何を言ってるかよくわからないんだけど」

「わからなかったわからない方がいいんです。現実世界の方では感動の話になりましたからね」

「まあ、良いけど。それよりずっといるのは当たり前だろ。お前がいなくなったら誰が僕の嫁になるんだよ」

「なんで勝手に私と結婚することになってるんですか！！」

「約束したろう。昔、八九寺が大きくなったら暦お兄ちゃんと結婚するって言ってたじゃないか」

「言ってもないし、私と阿良々木さんが出会ったのは3ヶ月前です！！」

「じゃあ、前世で約束したんだな」

「前世がミジンコの阿良々木さんになんで私が結婚の約束をするんですか。だいたい私は暦お兄ちゃんだなんて死んでも呼びません。まあ、もう死んでいますが」

「そんな自虐ネタいらねえよ。…てか僕の前世ミジンコ！？」

「知らなかったんですか？ちなみにミジンコの前は単1電池ですよ」

「日常生活で必要性があまりない！！」

「今の阿良々木さんにピッタリです」

「僕はこの話には必要性がある!!」

「それより、阿良々木さん」

「あん？」

「学校に行かなくていいんですか？」

時計を見ると8時10分わ回っていた。

「やつべー。もうこんな時間かよ」

「まあ、宿題が終わっていない阿良々木さんが行っても意味ないでしょうけど」

「なんで終わってないことをお前が知っているんだよ」

「そんなこと100人中101人が夏休みが始まる前からわかってたことです」

「超えた1人はどっから湧いて出てきた……てか、どんだけ僕はダメな奴だと思われてるんだよ」

「実際その思ってた通りになりましたけどね」

「だからこれ以上反論が出来ない」

「それではこれ以上話していると阿良々木さんが遅刻してしまいますので私はこれで失礼しますね」

「ああ、じゃあまたな」

「またお会いしましょう」

そう言って別れた後、僕は学校に向けて再出発した。

こよみデイリー 27 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ついに偽物語アニメ化決定!!! イエーイ!!!」

月火「イエーイ!!!」

火憐「ついに私達が主役の話だな!!!」

月火「そうだね。今まではお兄ちゃんを起こすところしか場面がなかったからね」

火憐「暴れまくっやるぜ!!!」

月火「やるぜ!!!」

火憐「それでは、予告編クイズ!!!」

月火「クイズ!!!」

火憐「最近たまに兄ちゃんに後書きを乗っ取られてねえ?」

月火「確かにそれはそうだ!!!」

火憐&月火「次回、こよみデイリー28」

火憐「逆に本編を私達が乗っ取ってやるうか？」

月火「賛成ー！！」

じよみデイリー 28 (前書き)

今回は若干長めです。

長めと言ってもグダグダですが。

学校へ着いた僕は自分の教室へと向かった。
教室に入ると羽川と目があった。

「おはよう阿良々木君」

「おはよう」

「どうしたの？元気が無いみたいだけど」

うっ…いきなり気付いたか。

「い、いや…別に何も無いよ」

「もしかして宿題やってないとか？」

「え？」

「冗談だよ、冗談。いくら阿良々木君でもさすがにちゃんとしてきてるよね」

「あ…あの…」

「もしかしてやってきてないの？」

「すみませんでした!!」

その瞬間、直江津高校のとある教室には直江津史上一番綺麗である

う土下座姿の僕がいた。

「いや、私に謝られても」

「羽川にあれだけ早くやれと言われてたのにやらなかったんだから羽川にも謝るのが筋だ。怒られる覚悟はできている。むしろ怒ってくれ、説教をしてくれ、罵ってくれ!!」

「ごめん。阿良々木君のキャラが改めて掴めない。いや、だいたいはわかってるんだけど」

その後すぐに、羽川は始業式後に配る資料を取りに職員室へ向かって行った。

「あー早く今日が過ぎてくれねえかなあ」

そう机の上で頂垂れていると

「ああああ、大きいゴキブリの死骸かと思ったら阿良々木君じゃない」

「新学期早々ゴキブリの死骸発言かよ!! 相変わらずの毒舌だな」

「この話ではそう簡単にはデレないわよ」

「何の話だ?」

「偽物語では夏休みにデレたけれど、あれは若気の至りよ」

「いや、偽物語でもこの物語でも年齢は一緒だから」

「阿良々木君のくせに反論をする気？」

「事実を言ったただけだろ」

「それより阿良々木君。項垂れていたけれどどうしたの？」

「え？あ…いや…なんでもない」

「なによ、すつきりしない言い方ね。はっきり言いなさいよ、はっきり。あ、でも存在がはっきりしてないから無理なのよね。」
「めんなさい」

「謝るな！！それにはつきりしてるよ！！確実にここに生きてる証を示してるよ！！」

「生きてる証？まずは その幻想をぶち壊す」

「お前はどこその幻想殺しだよ！！だいたい幻想じゃねえよ！！現実だよ！！」

「え？阿良々木君って現実に生きてるの？」

「当たり前だ！！なんなら戸籍謄本持って来てやろうか！？」

「そんな必死にならなくても」

「お前が疑うだからだろうが！！何呆れた顔してるんだよ！！」

「本気で疑う気あるわけじゃないじゃない。嫌がらせで言っていたのよ」

「それを最近ではいじめと言つのですよ戦場ヶ原さん」

「いじめじゃないわ。いじりよ」

「こんな嫌がらせのいじりがあつてたまるか!」

「で、本当の理由はなんなの? 頂垂れてた理由は」

「申し訳ございませんが宿題が終わっていません」

「今日、学校が終わつたら私の家に集合」

「はい」

こうして僕は戦場ヶ原から召集命令が下された。

宿題を忘れたといつても僕の評価は無いに等しいと言つてもいいぐらいたつたため、先生からはあまり言われることは無かった。どちらかというで見放されてるというか、これ以上言つと情けなくなるので辞めておこう。

学校が終わつた後、僕は戦場ヶ原の家へ向かった。

「あら、思ったより早かつたわね」

「駄目だつたか?」

「阿良々木君のことだから先生に怒られ……ああ、見放されてい
るから怒られないんだつたのよね」

事実のため言い返す言葉が見つからない。

「それより早く入って頂戴。阿良々木君なんかを家に入れてるのを周りに見られたら恥ずかしいじゃない」

「どついう意味だ!?!」

「そついう意味よ」

「さて、優しいひたぎ様が今から阿良々木君の宿題を手伝ってあげます」

「マジで!?!ありがとうございます!?!そして、すいませんでした」

「生きてて?」

「そつちに対して謝ってないよ!?!」

「そつよね。阿良々木君は存在がはっきりしていないのだったわね」

「その設定まだ生きてたの!?!」

「ええ。阿良々木君は生きてないけど設定は生きているわよ……なんちゃって」

「僕は確実に生きてるよ!?!」

「だいたい最後のなんちゃってって何だよ。無表情で言う言葉じゃねえだろ。」

「で、何が終わっていないのかしら？」

「国語と英語です」

「まあ、終わらなかったのは学校のせいでもあるわね」

「何でだよ」

「考えたらわかることじゃない。偏差値0の子に勉強しろって言う方が間違っているのよ」

「だから10の位を四捨五入するんじゃないよ！！だいたい今は50以上あるよ」

「何ですって！？阿良々木君の偏差値が50を超えたの！？」

「素でビツクリするなや！！てか、お前や羽川に勉強を教えてもらってるんだからそりゃ上がるだろ」

「私は最初から上がるなんて思っていなかったわよ。阿良々木君だし」

「酷い現実だ！！」

「酷いのは頭の方でしょ？」

「お前の性格よりかはマシだよ」

「あらあらそんなこと言っちゃって良いのかしら？阿・良・々・木・

君。そうね、ちょっとした実験をしましょ？」

「実験？」

「ええ。このシャープペンシルを阿良々木君の目の3センチ前から芯を出して言って何回目で阿良々木君の眼球に届いて刺さるかの実験よ」

「失明するわ！！」

「失言するからよ」

「お前から先に言ってきたんだろっが」

「カチ…カチ…カチカチカチカチカチカチ」

「ぎゃー！！ごめん！！ごめん！！ごめん！！僕が悪かった！！」

「最初からそう素直に謝ればよかったのよ」

その後、戦場ヶ原に手伝わってもらいながら何とか宿題を終わらせることができた。

「阿良々木君、ご飯食べていく？」

「良いのか？」

「ええ。もちろん」

「じゃあ、いただくよ」

「キャットフードとドッグフードとどっちが良いかしら?」「」
「ト扱いかよ!?!」

「冗談よ」

その後はもちろんちゃんとしたご飯を食べることができた。

「ねえ、ゴミ…ゴミ良木君」

「訂正できてないぞ」

「あらあら、私としたことがNGを出してしまったわ。仕方がないからがんばった大賞にでも回して頂戴」

「僕達はテレビドラマを撮ってるんじゃないよ」

「何よ。自分は来年は映画にも出て1月から連続アニメにも出るからって天狗になってるわけ?」

「意味がわかんねえよ!?!てか、連続アニメを連続ドラマみたいな言い方をするな」

「天狗みたいに鼻を伸ばしているといつか折るわよ。首を」

「怖いわ!?!鼻は!?!鼻じゃねえの!?!」

「鼻鼻うるさいわね。そんなに折ってほしいなら折ってあげるわよ。今すぐに」

「単なる傷害事件だよ」

「生涯事件？それは大袈裟よ、阿良々木君」

「ああ、お前と会ったことでこれからの生涯は事件ばかり起こりそうだよ」

「あらあら、厄介事に首を突っ込んでるのは阿良々木君でしょ？蟹、蝸牛、猿、蛇、猫、不死鳥、蜂一体何体の怪異と遭遇してきたのよ。逆に関心するわ」

「一つ言っておくがこの話では不死鳥と蜂はお前は知らない設定だ」

「私を誰だと思っているの？」

「まさかお前までPが付くのか！？戦場ヶ原P」

「いいえ。戦場ヶ原ADよ」

「まさかのアシスタントディレクター！？」

「違うわよ。A（阿良々木）ディレクターDよ」

「確かに僕を指導してるけど」

「ちなみに羽川さんは羽川Pよ」

「Pは八九寺じゃないの？」

「八九寺ちゃんはPプロデューサーだけれども、羽川さんはPパーフェクトの方だから」

「羽川にはぴつたりだな」

「アフターストーリーでつばさパーフェクトが発表されてもおかしくないわね」

「凄い作品になりそうだな」

「ちなみに私はひたぎピークよ」

「何だよそれ」

「文字通り私の出番が今までで一番ピークになる作品よ。簡単に言うなら語り部も私で阿良々木君なんて脇役よ」

「酷い作品になりそうだな。特に僕に対して」

「ちなみに阿良々木君はこよみデッドよ」

「主人公なのに僕死ぬの!？」

「ああ、安心して。命を落とす方の死ぬじゃなくて社会的に死ぬ方だから」

「僕は何の犯罪を起こした!？」

「小学生にセクハラをして」

「リアルだー!!!」

「リアル？貴方まさか本当にしてるんじゃないでしょうね？」

「や、やだなあ。するわけないだろ」

「そうよね。まあ、そんなにロリが良いなら私が小さくなってあげるわよ」

「できるわけねえだろ」

「できるわよ。チユウさんに薬を買えば」

「ここでSKET DANCEネタを挟んでくるなよ。だいたい僕達の世界にその薬なんかねえよ」

「ボツスンやヒメコちゃんは小さくなったのにセコいじゃない」

「まあ、世界が違うからな。てか、なんで僕がロリコンっていう設定で話が進んでるんだよ」

「え？自分で言っただけじゃなかった？」

「言っただけだよ！！」

「僕は阿良々木暦。好きなタイプは小学生です」って言ってたじゃない」

「頼むから。頼むからそれ以上暴走しないでくれ。この作品が消されてしまう」

「そうならばひたぎピークが連載開始よ」

「これはお前が仕組んだ罠だったのか!？」

言っておくが僕は決してロリコンではない。

八九寺の件があるからそりや誤解はされても文句は言えないが、あれはれっきとしたスキンシップだ。

ほら、ライオンだってじゃれる時は噛みついたりするだろ？

あれと一緒にんだよ。

まあ、いつも噛まれているのは僕なんだけど。

最近の世の中は嫌になったもんだよ。

小学生と話していたらロリコン呼ばわりだもんな。

「そう言えば阿良々木君って怪異に取り憑かれてるんじゃない？」

「いや、まあ吸血鬼はお前も知ってるだろ？どうしたんだよ急に」

「いえ、吸血鬼の方じゃなくて」

「それ以外は僕は無いぞ」

「おかしいわね。馬と鹿に憑かれてると思ったのだけれど」

「馬と鹿なんて見に覚えが……ってお前さては馬鹿って言いたいんだな!？」

「もしかて生まれ持った馬鹿なの!？」

「まあ馬鹿と天才は紙一重って言うから僕も天才になるかもよ」

「っていうことは自分が馬鹿って認めていることになるのよ」

自分でフォローをしようとしたが失敗してしまった。

「話は変わるのだけれどジャコビニ流星群って知ってる？」

「ああ、それは旧名で今はりゅう座流星群って言うんだっけ？」

「あら、知っていたの？」

「まあ一応」

「何故か分からないけど腹が立つたから殴って良いかしら？」

「良くないよ！！めちゃくちゃだ！！僕の人権はどこに行った！？」

「はあ？知ってる？阿良々木君。人権と言うのは社会的に人間と認められる存在が生まれながら持っていると言張される社会的権利のことよ」

「僕は人間と認められていないのか！？」

「認められているとでも思ってたわけ？」

「当たり前だ！！」

「でも心配しないで良いわよ。阿良々木君が例え野良犬だろうと野良猫だろうと私は愛し続けるから。だから安心して保健所に行くわよ」

「処分する気満々じゃねえか！！」

「実際に直接処分するのは私じゃなくて保健所の人よ」

「そんな屁理屈はいらない!!」

閑話休題

「で、ジャコビニ流星群がどうしたんだよ」

「ああ、なんだったかしら。ただ、今何故か気持ちがスツキリしたから別にいいわ。忘れて頂戴」

ああ、どっちにしる悪口に繋がってたのか。
聞かなきゃ良かった。

「お前が何を言おうとしてたかだいたい予想がつくよ」

「阿良々木君ごときに読まれるなんて私も落ちたものね。もう殺すしかないわね」

「物騒なことを言うな!! てかなんで僕が殺されなきゃならないんだよ!!」

「だって私が死ぬのは嫌なもの」

「ストレートでわかりやすい答えをありがとう」

「ところで阿良々木君はなんで私にタメ口なのかしら?」

「は?いきなりなんだよ」

「ここでひたぎちゃんの質問タイム。私18歳、あなたは？」

「……17歳です」

「そうよね？歳下の人が歳上の人に敬語を使うのが普通なのだけ
ど」

「学年は一緒だろうか!!」

「学年以外はどうかしら？歳、身長、成績、持ってる文房具の
量」

「最後のは完全にお前有利じゃないか」

「お前？歳上の人をお前呼ばわりとはいただけないわね」

「貴方が有利じゃないですか!!」

「確かに文房具店を作るだけの量は持ってるわね」

「この狭い部屋のどこに隠し持ってるんだ!？」

「収納上手なのよ」

「いや、収納上手ってレベルじゃないと思うけど」

「さて、阿良々木君をイジメるのはここまでとして、私は今からお
風呂に入るけれど阿良々木君も入って行く?」

「一緒に!？」

「一緒に入りたいの？」

「あ…いや…その…えっと……」

「冗談よ。入るなら先に入って来ていいわよ」

「いや、今日は帰ることにするよ。時間も時間だし」

「あら、そう。それじゃあ、気を付けて帰って頂戴」

「ああ」

アパートの下まで見送りに来た戦場ヶ原と別れ、帰宅した。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「今年も残すところあと2ヶ月半!!」

月火「1年って早いよね」

火憐「今年やり残したことは今のうちにやっておこう!!」

月火「まだ間に合うもんね」

火憐「ここで予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「私が今年やり残したことはなんでしょうか」

月火「なんだろう？」

火憐&月火「次回、こよみデイリー29」

火憐「正解は今のところ無いでした」

月火「クイズとして不安定だよ」

こよみデイリー 29 (前書き)

更新遅くなってすみませんでしたm(____)m

まあ、誰も待っていないだろうけどね!!!

2学期が始まり、時間とは早いもので平凡な日々を過ごしているうちに2学期の終業式も間近になっていた。

1年でも早く感じるのだから3ヶ月はもっと早く感じるに決まっているよな。

ちなみについ先ほど書いた「平凡な日々」とは怪異関係の出来事じゃなかっただけであって、戦場ヶ原からの毒舌を受けたり、神原の脱衣を止めたり、羽川からのご褒美の説教を受けたりはしていた。

始業式直後とは違い、現在は冬であるため生徒はもちろん冬服である。

どれだけ僕はこの季節を待っていたか。

何故かと言うと、わかる人は言わなくてもわかると思うが、僕は忍に血を飲ませているので首には傷があるため夏場にそれを隠すのは結構考えなくちゃならないから大変なんだよ。

僕達の学校の男子の冬服は学ランだから首を隠せるから楽なんだけど夏はさすがに学ランを着ていると浮くし、変な目で見られてしまう。

冬は楽で良いよ本当に。

「阿良々木君、私の左手が寒いと言っているわよ」

「は？」

「だから、私の左手が寒いと言っているのよ。どうにかしなさい。」

それとも阿良々木君には日本語が通じないのかしら」

僕がこの状況に至るまでの過程を話そう。

僕はかくかくしかじかあり、現在は自転車が無いため徒歩で通学している。

そして、戦場ヶ原も徒歩なので一緒に帰っているのである。

「いや、どうにかって……僕の手袋を貸そうか？」

「阿良々木君って本当鈍感よね。ちゃんと神経があるのかしらそのアホ毛は」

「アホ毛は関係ねえよ!!」

「それより、手袋じゃなくてまだあるでしょ」

まあ、こいつが言いたいことはわかってるけど、このまま従つのも面白くないからもう少し反応を見るか。

「カイロは持っていないし……」

「本当に阿良々木君って馬鹿ね。馬鹿野郎日本代表で背番号10を付けるぐらいよ」

「馬鹿のエース!？」

「そんなことより阿良々木君」

「あん？」

「その…手を握ります。違つわね。こつじゃないわ…手を…手を…握ったら…どうな…です…手を握りなさい」

結局そこに落ち着くんだな。

ちなみに言うのを忘れていたが、最近今年一番の出来事があった。

戦場ヶ原が若干だがデレてきた。

「何よ。嫌なの？」

「嫌じゃないけど」

「嫌じゃないけど何？それとも阿良々木君は、お前みたいな美少女は鉄の酸化反応を利用した携帯して身体を暖めることのできる発熱体でも持ってるって言いたいわけ？」

「素直にカイロって言えよ、ややこしい。てか、なにどさくさ紛れに自分で美少女って言ってるんだよ」

「ややこしいのは阿良々木君の頭よ。結局そのアホ毛はただの髪の毛なの？それとも阿良々木君の本体なの？」

「見りゃわかるだろ！！ただの髪の毛だよ！！」

「ただの髪の毛なの！？それは驚きだわ。まあ、これで私は思い残すことなく次の年を迎えることができるわ」

「僕のアホ毛が今年の思い残すことだったとは悲しい現実だ」

「それより、話を戻すけど嫌じゃないけど何？」

「いやーほら、学校の近くで手を繋いで歩くのが恥ずかしくて」

「恥ずかしいですって？心配しなくても大丈夫よ。阿良々木君なんかと歩いている私の方が恥ずかしいから」

「じゃあ、尚更手を繋ぐなよ」

「じゃあ、彼氏の手を繋いじゃいけないわけ？」

「言ってることがめちゃくちゃだぞ」

「とにかく私はこよみんと手を繋ぎたいだけなの。わかる？」

戦場ヶ原は最近、二人きりだとたまに僕のことをこよみんと言っ。なんだよこの変わり様は。

「ちなみにこよみんの歌もあるわよ」

「歌？どんなんだよ」

「愛のうたよ」

「はぁん。じゃあ、聴かせてくれよ」

「仕方がないわね。特別よ……引っこ抜かれて、あなただけについて行く。今日も運ぶ、戦う、増える、そして食べられる」

「ピクミンじゃねえか！！全く僕関係ないじゃないか」

「え？ピクミンの正体って阿良々木君じゃなかったの？」

「違うよ！！大いに違うよ！！どこをどう見たら僕と間違えるんだよ！！！」

「てか誰かピクミンネタわかる人いるのか？」

「だって頭にアホ毛があるじゃない」

「あれはアホ毛じゃなくて、葉っぱや蕾や花だよ！！」

「ごめんなさい。ずっと阿良々木君だと思っていたわ」

「てか、ピクミンが出た頃はお前は僕のこと知らないじゃないか」

「だから入学式の際にビックリしたのよ。直江津高校にピクミンがいるって。でも黒ピクミンなんて見たことなかったから疑問に思っていたのよ」

「人間だという選択肢はなかったのかよ」

「あの頃の私はすでに体重を無くしてスーパー私からウルトラ私になっただけから人かと思っていなかったから」

「ああ、ツンドラになった時期ぐらいだったか」

「でも羽川様…羽川さんは別よ。羽川さんはもう女神ね女神。羽川さんと比べたら私なんてゴミよゴミ」

「本当にお前と羽川との間には何も無いのか!？」

「でも、私がゴミだと阿良々木君の立場が無くなるのよね。どうしようかしら」

「そんなことを本気で悩むな!!」

「でも、あの頃は阿良々木君のことゴミだなんて思っていなかったから別に大丈夫よね」

「最初は評価良かったんだな」

「ちなみに最初は阿良々木君のことダイオキシンだと思っていたのよ」

「簡単に言うと僕を有害で不必要だと言いたいんだな」

「それに比べたら今はゴミよ。肥料にだってなるのよ。ちゃんと必要性があるわ。だからゴミと呼ばれることに誇りを持ちなさい」

「普通に考えたら悪口なのになんで誇りを持たなきゃなんねえんだよ!!そんな理由を言われても納得はしないよ」

「じゃあ、埃を持ちなさい」

「汚いよ!!!」

「ゴミが埃を持つって滑稽ね」

「黙れ!!」

「今では旧ゴミが新ゴミを愛しているのよ。これは運命よね。赤い糸で結ばれてたのかしら」

「赤と言うより黒だよ!!」

どの状況で言いやがるんだこいつは。悪口の間挟んでくるなんて。

「何？私と赤い糸で結ばれることに不満でもあるわけ？」

「な、ないです!! 戦場ヶ原と赤い糸で結ばれてるのが嬉しいです!!」

「こんな道端でそんな恥ずかしいことを叫ばないでくれるかしら？こちが恥ずかしいわ」

あれだけ手を繋ぐのが恥ずかしいと言っていた僕が結局自分で恥ずかしいことを言ってしまった。

「それよりもすぐクリスマスよね」

「ああ、そうだな」

「この時期になるとケンタッキーのCMで竹内まりやのすてきなホリデイを聴くともうこんな季節なのかと毎年思っるのは私だけかしら？」

「確かに冬になると毎年聴くからそれは僕も思うよ」

「あら、阿良々木君も同じこと思っていたの？それは残念だわ。死ぬしかないわね」

「同意を求めてきたくせに嫌がるなや！！」

「まあ、去年までの阿良々木君だったらクリスマスがクルシミマスだったのが今年は私がいるからちゃんとしたクリスマスになるわね」

「クルシミマスってギャグも定番中の定番だよな」

「そうね。まあ、リア充の私達には関係のないことだけれど」

「自分でリア充とか言っつなよ。」

「だから、クリスマスは予定空けておきなさいよ」

「はいはい」

「はいは1兆8596億4570万9610回よ」

「言えるか！！」

そうこうしているうちに戦場ヶ原の家に着き、そこで戦場ヶ原とは別れた。

今年ももう少しで終わりなのか。

今年はいろいろあったなあ。

一生分の出来事が今年に集まった気分だな。

いや、一生かかっても怪異なんかと関わらない人の方が圧倒的に多いだろうな。

戦場ヶ原じゃないけど僕も今年やり残したことがないか考えるか。

そんなことを思いながら歩いていると見覚えのある胡散臭い中年の男が歩いてきた。

「お、忍野!」

「そんな大きな声を出してどうしたんだい？阿良々木君。何か良いことでもあったのかい？」

「お前なんでここにいるんだよ」

「ちょっとね。それとも僕がいちゃいけない理由でもあるの？」

「そういうわけじゃないけど、ただ急だったからビックリしたんだよ」

「そついや、あの照れ屋ちゃんとはどうなったんだい？大変だっただろう？」

「千石か？千石がどうしたんだよ」

「あ、いや、この話ではなかったことにするんだったのか……今の話は忘れてくれて良いよ。たぶん、今後も関係のない話だから」

「まあ、関係がないんだつたら深くは聞かないけど……それよりさすがに冬は厚着をするんだな」

「当たり前だよ阿良々木君。僕はこれでも良い歳したオッサンだから」

らねえ。自分の体調は自分で管理できるよ。てか、真冬にアロハシヤツ1枚で過ごしている奴がいるなら逆に知りたいよ」

「沖縄の人ですら着ないんだから当たり前か。それより、いつまでこの街にいるんだよ」

「しばらくはいるつもりだよ」

「もしかして、また怪異絡みなのか？」

「いや、今回は怪異は関係ないよ」

「じゃあ、どうしたんだよ」

「どうもしてないよ」

「お前が来るってことは何かあるんだろ？」

「いや、今回は本当に何も無いよ。それとも何かい？僕は何かなければ来ちゃいけないのかい？」

「そういうわけじゃないけど」

「まあ、強いて言うならこの街のことを思い出して急に来たくなくなっただけさ」

「お前でもそういうことあるんだな」

「これでも人間だからね。それより忍ちゃんは元気かい？」

「ああ、まあな」

「そうか。ならよかったよ。忍ちゃんに何か変化はあったかい？」
変化あり過ぎて何をどう言っていていいかわかんねえよ。

「まあ、相変わらずミスド好きは変わらねえよ。おかげで財布が寒くなる時があるよ」

「阿良々木君も大変だねえ」

「それより、この街にはいつまでいるんだよ」

「特に考えてはないけど、もう少しはいるつもりだよ」

「そうか。やっぱりいつもの場所か？」

「ああ。他に場所もないしね」

「わかった」

「さて、僕はそろそろ行くとするよ」

そう言いながら、忍野は僕の前から去って行った。

こよみデイリー 29 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ここにきて新キャラ登場かよ!!」

月火「まあ、原作を見ている人からしたら別に新キャラじゃないんだけどね」

火憐「しかも、兄ちゃんは年上に向かってタメ口かよ!!」

月火「お兄ちゃんが敬語っていうのもなんだか違和感があるけど」

火憐「それでは予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「もう、これはこの小説のこれからについて月火ちゃんとは今晚飲み語り明かさないといけないな」

火憐&月火「次回、こよみデイリー30」

火憐「まあ、私達は未成年だから飲むのはウーロン茶だけど」

月火「健康的だね」

じよみデイリー 30 (前書き)

も……もうー!!

ネタが……ない。

まあ、いつも通り面白くないですが……!!

クリスマス・イヴ当日、神原や羽川を誘ってクリスマスパーティーでもしようかと戦場ヶ原と考えていたのだが、神原は新作のBL本を読むので忙しく、羽川は予定があるとかで結局戦場ヶ原と二人になっってしまった。

そんな僕はというと、戦場ヶ原の家に向かっている最中である。今年、ホワイトクリスマスになった。

雪自体は僕達の地域では珍しいはないのだがクリスマスに雪が降るとなんだかいつもよりもテンションが上がってしまう。

ただ、雪道は滑ら…コケな…気を付けなければならぬため歩くスピードが遅く、いつもより時間がかかるから嫌になる。

これだけ寒ければ外に出る人がいるわけもなく…と思っていると目の前に赤いちっこい物体が動いている。

僕は間近に近付くことでようやくその物体がわかった。八九寺である。

「何してるんだよ八九寺」

「これはこれは腹巻きさん」

「僕をお腹に巻く布みたいな名前前で呼ぶな。何度も言っているが僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた!!」

「わざとじゃない!？」

「蟹食べた」

「えらく豪勢な食事だったんだな」

「どうしたんですか？今日は」

「何がだよ」

「いつもならを強制わいせつをしてくるじゃないですか」

「その言い方は辞めろ!!僕が捕まるだろ!!」

「捕まるようなことをしているのは誰ですか」

「はて？なんのことだろう」

「最低です!!この男、とぼけやがりました!!」

「それより、八九寺何だよその格好は」

「ああ。どうですか？クリスマス仕様でサンタコスプレをしてみました」

「誰得なんだよ」

「何を言ってるんですか！！今頃、八九寺ファンは私のサンタコス
を想像してハアハアしているところですよ」

「ちなみにその表現はアウトな」

「阿良々木さんこそ何をしているんですか？」

「ああ、戦場ヶ原の家に行く途中なんだよ。ただ雪だから歩くのが
な…」

「ああ、雪だから滑らないように気をつけなければなりませんね」

「う…そ、そうなんだよ」

滑るとい言葉に敏感になりすぎてすごく反応してしまう。

「コケると危ないですから滑るのには気をつけて下さいね！！滑る
のには」

今、僕は確実にはつきりとわかったことがある。

こいつ、わざと言ってやがる。

「お前、わざと滑るとか言ってるだろ」

「何を言っているんですか！！私は阿良々木さんが大学に落ちない
ように気をつけて下さいなんて一言も言っていないですよ」

「それだよ…！」

「すみません、噛みました」

「違う、わざとだ」

「はい！！わざとです」

「そこは嘘でも否定してくれ！！」

「それより、私のサンタコースは貴重ですよ。この際、QUOカードやポスターを作りましょう。そうすれば私は印税生活を送ることができます」

「何、勝手に話を進めてるんだよ」

「特別に今ならタダで写真を撮らせてあげますよ」

「僕はロリコンではないからそんな趣味はない」

「本当にいいんですか？真宵サンタを撮るチャンスは二度とないですよ。真宵サンタ……阿良々木さん！！偽物語の次にまよいサンタをアニメ化しましょう！！」

「するわけねえだろ。原作すらないのに」

「なら、本家の西尾先生に次の恋物語と同時進行で書いてもらいましょっ」

「西尾先生を殺す気か！！」

「なら、この日常物語の小説の作者に書いてもらいます」

「まともな話にならないぞ」

「う……確かにその可能性は大ですね」

「だいたいどんな内容になるんだよ」

「私のクリスマスの日の行動を分刻みで書いていきます」

「誰も興味ないし、細かすぎだよ!!」

「だって、1日の出来事だとすぐ終わるじゃないですか」

「なら、短編小説でいいだろ」

「それは駄目です!!」

「なんでだよ」

「阿良々木さんはこよみデイリーで連載しているのに私のまよいサ
ンタが短編小説だなんて負けた気分になるからです」

「知ったこつちやねえよ!!」

「仕方がないですね。今年のサンタさんへの願い事はこよみデイリ
ー打ち切り、まよサンタ連載開始にしましょう」

「その願い事はたぶん叶わねえよ」

「願い事は叶えてもらうんじゃないですよ。自分の手で叶えるん

です」

「綺麗に終わらそうとしたのはわかるが、意味がよくわからないから結局決まっていけないぞ」

「それは阿良々木さんが馬鹿だからです」

「人のせいにするな」

「それでは阿良々木さん。ここでずっと話しているとさすがに寒いし遅れると戦場ヶ原さんに悪いので私はここで失礼しますね」

「ああ、じゃあまたな」

その後、僕は無事戦場ヶ原の家に着した。

「この天気の中よく来たわね阿良々木君。滑ってコケて落ちてない？」
「？」

「お前もか!!」

「何がよ。私はただ大学に滑ってコケて落ちてない?と聞いただけなのよ。別に雪で滑ってコケて落ちてない?とは言っていないわよ」

「それが一番駄目なんだよ!!」

「冗談よ冗談」

「で、なんだよその格好は」

「ひたぎサントよ。良かったわね阿良々木君。美少女が阿良々木君

のためにサンタのコスプレをしてくれているよ。感謝しなさい」

「だから自分で美少女って言うなよ」

「じゃあ、阿良々木君は私のことを美少女だとは思ったことはないのね。彼氏にそんなことを思われているだなんて悲しいわ」

「思ってます!!世界で一番の美少女です!!」

「あら、ありがとう」

言わされた感が否めないが、まあ良しとするか。

「そう言えば、子供の頃ってクリスマスによく赤鼻のトナカイを歌っていたわよね」

「ああ、僕も歌っていた記憶がある」

「どんなのだったかしら……真っ赤なお鼻の阿良々木君は、いつもみんなの笑いもの」

「やめるー!!てか、トナカイはどこに行ったんだよ!!」

「あら、間違っていたかしら?」

「逆に間違っていないかと思っているのかよ」

「どこが間違っていたのかしら?……ああ、あそこね。わかったわ。真っ赤なお鼻の阿良々木君は、やっぱりみんなの笑いもの」

「だからトナカイ関係ないじゃねえか！！結局僕のことかよ！！てか、やっぱりって前から笑われてたの！？」

「笑われていないとでも思っていたの？友達を作ると人間強度が下がるっていう迷言を言ってた人は誰かしら？」

「あれは僕の黒歴史だから言わないでくれ」

「それより、私のサンタコスやQUOカードやポスターにしようと思っっているのだけれどどうかしら？」

「知らねえよ」

どいつもこいつも何で商売にしようとしてやがるんだ。

「それを売ることです印税が入ってくるから生活が少し楽になるわよ。そして、将来は働き口が見つからないニートの阿良々木君は私のヒモになるのよ」

「勝手に僕をニートにするな！！」

「黙りなさい。このヒモ男」

「まだヒモじゃねえよ！！」

「まだってことは今後なるのね」

「なるわけねえだろ」

「ところでヒモ良木君」

「ヒモって言うな!!」

「阿良々木君。今日の夕食の材料を買いに行くから付いてきなさい」

「はい」

僕は、雪が降りしきる中戦場ヶ原と共に買い出しに行った。

スーパーでいろいろと材料を買った後、定番中の定番のケンタッキ―を買って戦場ヶ原の家に帰った。

「荷物を持ってくれてありがとう阿良々木君」

「いや、これぐらいなんともないよ」

「じゃあ、ここからは私の出番ね。夕食を作るから阿良々木君は適当に会社をリストラになって、昼間に暇そうにしているサラリーマンのごとくくつろいでて」

「言い方が酷い!!くつろぐ気無くすわ!!」

そう言ったものの、僕が台所に行くと思えば逆に邪魔になるので戦場ヶ原の言葉に従い、くつろぐ僕であった。

そうこうしているうちにテーブルの上が料理の皿で埋まっていった。

「これで全部ね」

「めっちゃ皿そう!?!」

「さて、阿良々木君」

「はい」

「先にご飯にする？お風呂にする？それとも…」

え？なにこの展開。

テレビとかである、それとも私の展開じゃねえか！！
ヤバイヤバイめっちゃ緊張してきた。

「それともタ・ワ・シ？」

「タワシって何だよ！！」

「え？阿良々木君、タワシ知らないの？タワシっていうのは洗い物をする時に使う繊維を固めた道具よ」

「知ってるよ！！タワシぐらい僕だって知ってるよ！！」

「だって阿良々木君が「タワシって何だよ！！」って言ったんじゃない」

「そういう意味の何だよじゃないよ！！てか似てないモノマネをするな！！」

「じゃあ、どついう意味かしら？」

「普通あの場面だと…その…あれだよ…その…それとも私ってとこじゃないのか？」

「はあ？何言ってるの阿良々木君。私がそんなことを阿良々木君に
ときに言つとでも？」

「ごときつて一応彼氏なんですが？」

「私は、ご飯にする？お風呂にする？それとも、阿良々木君の顔を
思いっきりタワシで擦って洗ってあげようましようか？って意味で
言ったのよ」

「そんなことされたら顔が傷だらけになるわ！！」

「心配しなくてもいいわよ。剣心みたいに左頬にカツコいい傷にし
てあげるから」

「何の心配だよ！！完全に傷を付ける気満々じゃねえか！！」

「あの傷を付けるとカツコイイ阿良々木君がさらにカツコよくなる
わ」

「タワシであんな傷がつくか！！」

「言われてみればそうよね」

「先に気づけよ」

「じゃあ、包丁でましようか？」

「怖い怖い！！ただの事件だよ！！」

「大丈夫よ。私は阿良々木君がカッコよくなるなら犯罪だってできるわ」

「なんだよそのヤンデレキャラは!!」

「外は雪が降って、中では血の雨が降る……風流ね」

「風流じゃねえよ!!単なる傷害事件現場だよ!!」

「さて、冗談はこの辺にしといて温かい内に食べてしまいませよ」

「あ…あぁ」

「そんなにビビらなくても大丈夫よ。そんなことするわけないじゃない。むしろ、そのカッコイイ顔に傷を付けるような人がいるなら私が一人残らず切り刻んでやるわ」

その言葉を以前の戦場ヶ原にそのまま聞かせてやりてえよ。

その後僕は、戦場ヶ原と夕食を済ませ、またくつろいでいるのであった。

てか戦場ヶ原の料理の腕が日に日に上がっているような気がする。

「阿良々木君、今日どうするの?帰る?」

「どうしようかなぁ」

「泊まっていたら?」

「うーん……じゃあ、今日ぐらいお前としようかな」

「べ、別に私は阿良々木君といたいから言ったんじゃない、夜道を歩いて帰ってコケて怪我でもしたらせっかくクリスマスなのに私が帰らせたから怪我をしたんだと思って台無しになるから私のために言ったのよ。か、勘違いしないでよね」

「今度はツンデレですか…忙しいやつだな」

「わかったら返事」

「はいはい」

「はいはいは4分の3回」

「中途半端だな！…はいのいの発音どうすればいいんだよ」

「何言ってるの？」

「いや、いいです」

そうして、僕と戦場ヶ原の二人のクリスマスは過ぎていった。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ついに現実世界の季節を追い越したな」

月火「そうだね。作者がネタが無くて仕方がないから季節を進めたんだろうね」

火憐「11月下旬頃にはこの話は春になってんじゃねえの？」

月火「リアルにありそうだね」

火憐「でも、春だったら卒業するよな？そうしたらどうするんだろ。大学編とか？」

月火「どうなんだろうね。まさかの新章突入だったりして」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「春からはどうなるでしょうか？」

火憐&月火「次回、こよみデイリー番外編3」

火憐「あ、次また番外編だ」

月火「作者は完全に忘れてたみたいだから内容が変更するかも」

こよみデイリー 番外編3 (前書き)

今回のコメントリーは誰なんでしょうか!!!

では雑談の始まりです!!!

こよみデイリー 番外編3

羽川「さてさてー今回も始まりました番外編。本日、こよみデイリー番外編3をお送りするのは私、羽川翼と」

八九寺「こよみデイリーを読んでくださってる皆さんコンバトラー。八九寺真宵です!!!」

羽川「ついに、これも3回目をやっちゃったね」

八九寺「作者は馬鹿なんですか？真正の馬鹿なんですか？いつもの本編でも誰得状態なのに、この番外編なんてそれこそ誰得なんですか!!!」

羽川「最初から飛ばすねえ、真宵ちゃんは」

八九寺「番外編をするなら、まよいサンタをするべきだと私は思っています」

羽川「この場で自分の作品をアピールしないで。いや、作品はないけど」

八九寺「羽川さんも黙っていないでもっと言うべきです。つばさパーフェクトをやれと」

羽川「私は、別にやりたい気持ちがないから」

八九寺「羽川さんは本当謙虚ですね。そんなことだから戦場ヶ原さんに阿良々木さんを盗られるんですよ」

羽川「その話はしていいのかわからないけど、とりあえず無しの方向でお願いします」

八九寺「それで、今日は何について話をするんですっけ？」

羽川「基本はフリートークだけど、こよみデイリー21〜30についての裏話とか…まあ、化物語Blue-ray or DVDのオーディオコメンタリーみたいな感じでいいんじゃないかな？」

八九寺「前回のヴァルハラコンビは大丈夫だったんですか？」

羽川「うん。神原さんはいつも通りだったみたいだけど戦場ヶ原さんが真面目にしていたみたいだよ」

八九寺「戦場ヶ原さんが神原さん側になっていたらもうめっちゃくちやだったでしょうね」

羽川「止めてくれる人がいなくなるからね」

八九寺「まあ、阿良々木さんと羽川さんのコンビも結構不安ですけどね」

羽川「どうして？」

八九寺「阿良々木さんは羽川さんを愛しすぎているんですよ。いつ暴走するかわからないですよ」

羽川「確かに私もわからない」

八九寺「実は今回は八九寺&羽川ペアではなくて阿良々木&羽川ペ

アの案もあつたんですよ」

羽川「え！？そうなの？」

八九寺「はい。ですが、阿良々木さんの暴走はもちろんです。B I u - r a y o r D V D の時みたいに羽川さんが暴走してしまう可能性もあつたので私の権力で白紙に戻しました」

羽川「さすが八九寺P。ただ、お願いだからあれは話さないでほしいな」

八九寺「いいじゃないですか。阿良々木さんは喜んでいたと思えますよ。羽川さんを足に座らせたことを」

羽川「リアルに喜んでそうだからなんか不安になる」

八九寺「話は変わりますがこの小説、最近やたら季節が進むのが早くないと思いませんか？」

羽川「そう言えばそうだね。つい最近まで夏休みの出来事だったのに今ではクリスマスだからね」

八九寺「火憐さんや月火さんも後書きで仰られていましたが、このままだと少なくとも年内には阿良々木さんは卒業してしまつて新章突入とかになるんですかね」

羽川「真宵ちゃんまで新章突入つて言い出すともうフラグとしか思えないよ」

八九寺「もしくは、阿良々木さんが留年して戦場ヶ原さんと羽川さ

「ただ卒業するパターンの新章もあります」

羽川「そんなことしたら阿良々木君は戦場ヶ原さんに半殺しにされかねないよ」

八九寺「そう言えばクリスマスの話に羽川さんは出てきませんでしたね」

羽川「逆に私が出れそうな場面がなかったしね」

八九寺「羽川さんのサンタコスも見てみたかったです」

羽川「私は絶対にしたくない」

八九寺「そんな恥ずかしがらなくても。とても似合うと思います」

羽川「恥ずかしいとか似合うとかの問題とかではなくて、阿良々木君の問題が…ね」

八九寺「ああ。確かに羽川さんのサンタコスも阿良々木さんに見せでもしたらもうそれこそ暴走しますね。初号機のように」

羽川「どういうこと？」

八九寺「食べられてしまいます」

羽川「エヴァネタを挟まないで。ていうか食べられるってただだよ」

八九寺「食べられるというのは冗談としても、サンタコスは有りだ

と思います。クリアファイルとかにして売ったらかなり売れると思いますよ」

羽川「うーん。確かに千石ちゃんとか爆発的に売れそうだね」

八九寺「いえ、以前までならそうです。千石さんは囃物語の影響もあるのでしょうかりませんよ。1番人気は羽川さんでダークホースは忍さんですね。てか、羽川さんのやつは阿良々木さんが全て買い占めそうですけど」

羽川「そこまで影響はないと思うけどなあ。あー忍ちゃんは人気ありそうだね。少女バージョンと大人バージョンの2パターンあるし。買い占めたら本気で引く」

八九寺「まあ、最終的には1番は私になりますが」

羽川「結局は自分なんだ」

八九寺「当然です」

羽川「もしかすると、阿良々木君が一番になったりするかも」

八九寺「ありえませんか！！そんなことがあるなら死んだ方がマシです」

羽川「そんなに！？なんか阿良々木君が可哀想に思うよ」

八九寺「まあ、私は死んでいるので死んだ方がマシというのは的確ではないですが」

羽川「そこはあえて突っ込まないから大丈夫」

八九寺「というか阿良々木さんがサンタのコスプレをして誰が得をするんですか？」

羽川「意外と一部では人気があるみたいだよ」

八九寺「世も末ですね。あんな変態ロリコン男が人気があるとか」

羽川「まあ、被害を受けてるのは私達だけで現実世界の人達は知らないからね」

八九寺「これはもう、阿良々木暦被害同盟を作って抗議をするべきだと私は思います」

羽川「少なくとも、戦場ヶ原さんと神原さんと千石ちゃんは入らないと思うけど」

八九寺「重要な戦力が減るじゃないですか！！」

羽川「ちなみに、火憐ちゃんや月火ちゃんもなんだかんだ言ってブラコンだから入らないと思う」

八九寺「入らない人が過半数を越えました！！」

羽川「あと忍ちゃんも無いと思う」

八九寺「残るは私と羽川さんですね」

羽川「あー私はどちらにも入る気ないから」

八九寺「裏切りです!!」

羽川「大丈夫、大丈夫。たぶん、最終的には戦場ヶ原さんが阿良々木君をいじめるために入ってくれると思うから」

八九寺「戦力的には1000人分なのですが、あの方は私のこと嫌いですからねえ」

羽川「そこは八九寺Pの腕の見せどころでしょ」

八九寺「いえ、今回は諦めます」

羽川「まあ、もう少し様子を見ようよ」

八九寺「そうですね。八九寺裁判官の判決は保護観察処分に決定です」

羽川「完全な無罪にはならないんだ。」

八九寺「それは覆りません。少しでも何かやらかしたらこよみデリーからまよいオンリーに変更です」

羽川「私欲が丸見えだよ。てか、なんだかんだ言っているうちにもうそろそろ終わりみたいだね」

八九寺「結局、私達もあんまり日常物語には触れませんでしたね」

羽川「まあ、仕方ないんじゃないかな。どうせ日常物語だし」

八九寺「羽川さんにごここまで言わせるんだからこの小説が悪いんですね」

羽川「最後までいいはちゃんとして終わろうよ」

八九寺「そうですね」

羽川「ではではー、今回こよみデイリー番外編3をお送りしましたのは私、羽川翼と」

八九寺「皆のアイドル、八九寺真宵でした!!!」

こよみデイリー 番外編3（後書き）

火憐「火憐だぜ!!」

月火「月火だよ!!」

火憐「今回、番外編3だったんだな!!」

月火「無事終わったね!!」

火憐「内容も終わってたな!!」

月火「そんなこと言うと、羽川さんや八九寺ちゃんが可哀想だよ」

火憐「でも、作者が書いたことを言わされてたんだから羽川さんや八九寺ちゃんも可哀想と言うことも事実だよな」

月火「うん。それは言ってる」

火憐「それでは、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「次回は、ついに年が明けます!!」

火憐&月火「次回、こよみデイリー31」

火憐「A HAPPY NEW YEAR!!」

月火「A HAPPY NEW YEAR!...」って言うのさすが
に早すぎ!」

こよみデイリー 31 (前書き)

やっと……やっと書けた。

とりあえず、読んで頂けたら嬉しいです。

「新しい年を迎える瞬間が阿良々木君とだなんて」

時刻は0時00分。

僕が新年一発目に聞いた声であつた。

「彼氏に対する新年一発目がそれかよ!!」

「新年早々ツッコまないでくれるかしら？」

「ツッコミをいれるようなことを言っているのは誰だよ!!」

「貴方の横には私しかないじゃない」

開き直りやがった。

とりあえず、ここまでの経緯を話そう。

12月31日、大晦日の昼頃に戦場ヶ原から電話があり、夜7時に家に集合と言われ、そこからガキ使を見ていた。

ちなみに、僕は紅白歌合戦を希望したんだが戦場ヶ原がどうしても見たいと言うことで見ていたんだが、結構酷かった……戦場ヶ原が。

「阿良々木君、ガキ使って面白いわよね」

「ああ、最近では大晦日の定番だな」

「私達もこれしない？」

「笑ったら叩かれるやつか？」

「そう。でも、一つだけルールを変更しましょう」

「どうするんだよ」

「どちらかが笑ったら阿良々木君が叩かれるルールを追加します」

「僕のお尻が新年の幕開けと共に崩れ落ちそうだよ」

「仕方ないじゃない。私が叩かれるの嫌なんだもの」

「自分勝手過ぎる！！」

「それに阿良々木君の趣味はお尻を叩かれることでしょ？」

「いつ言ったんだよ！！いつそんなドM発言したんだよ！！」

「まさか私の言うことが間違っているって言うの？」

「ああ、大いに間違っている」

「ということとは、別ルートに入り込んでしまったのね」

「いきなり厨二発言をするな。だいたい、それならその入り込む前の僕はどんなだったんだよ」

「親のスネをかじり、ロクに学校にも行かず、彼女である私にもお

金をもらい生活をしている男」

「クズじゃねえか!!」

「自覚しているのね」

「あ、いや、今の僕じゃなくてそのルートの僕に言ったわけで」

「は？別ルート？何言っているの？この馬鹿は」

「もう、泣いていいですか？」

「冗談よ冗談。それより、叩くのは痛いから辞めにしない？」

「お前には良い案だな」

「その代わりに目の前に置いたシャーペンを一回笑うことに芯を1センチ出していくってというのはどう？」

「そんな命がけでやるものじゃない!!」

「良いじゃない。命がけのゲーム。眼球に近付くことにわざわざ言い出すわよ」

「とりあえず、お前は金輪際カイジを見るな」

そして、今に至る。

「ガキ使もあと30分ぐらいよ。終わったらどうするっ？」

「何が？」

「初詣に行くか行かないかよ」

「ああ、行ってもいいよ」

「なら、これが終わったら行きましょう」

「ああ」

ガキ使が終わり、戦場ヶ原が準備をしている間、ゆく年くる年を見てから神社へと出発した。

ゆく年くる年、結構良い番組だと僕は思う。

ゆく年くる年について熱弁をしたいところだが、ここは自重しておこう。

神社に着いたのだがやはり人が多く、僕達は列に並んでいた。

「阿良々木君は何を願うの？」

「そりゃ、大学合格だろ」

「あら、そう」

「そういうお前はどうかだよ」

「私は、素敵な彼氏ができるようにお願いしますわ」

「……………」

神様、仏様、大学合格とは別に察して頂けたら嬉しいです。

「黙ってどうしたの？阿良々木君」

「わからないのか！！」

「ええ。阿良々木君みたいに馬鹿だからわからないわ」

「何故、自分のことを言うのに僕が馬鹿にされなきゃならない。てか、今年こそは汚名返上してやる」

「どの汚名？」

「何個もあるのか！？」

「というか、汚名返上って名誉が失われた状態から巻き返しを図ることを言うのよ」

「まるで僕に名誉なんてなかったって言い方だな」

「あつたの？」

「素で聞くなやー！」

「どちらかと言うと、汚名挽回の方が阿良々木君には似合っているわよ」

「その辺で勘弁してもらえませんか？ひたぎさん」

「仕方がないわね。優しいひたぎちゃんだからこれぐらいにして置いてあげるわ」

優しいやつはそんなこと言わねえよ。

「そう言えばまだ言ってなかったわね」

「あん？」

「明けましておめでとう。今年もよろしくね阿良々木君」

「ああ。明けましておめでとう。こちらこそよろしく」

「阿良々木君はもう一回3年生をよろしくしないでね」

「新年早々縁起でも悪いことを言わないでくれ」

「それより、どうするの？このあと。私の家に戻る？それとも自分の家に戻る？」

「お前さえよければ戦場ヶ原の家にお邪魔してもいいけど」

「私は構わないわよ」

「じゃあ、そうするよ」

その後、戦場ヶ原の家へ戻った僕達はテレビを観ていたが、いつの間にか寝ていたらしく朝になっていた。

「あら、起きたの？おはよう」

「ああ、おはよう。いつの間にか寝てたみたいだな」

「そうね。私も気付いたら朝だったわ」

「今何時だ？」

「10時過ぎね」

「そうか」

「お前はこれからどうするんだ？」

「お父さんは仕事だし、特にやることはないわね。阿良々木君は？」

「とりあえず、家に帰ってから考える予定だ。勉強は夜する予定だし」

「じゃあ、どこか出掛けない？」

「いいけど、何処へ行くんだよ」

「特に決めてはいないけれど、さすがにショッピングモールに行けば何かあるでしょ」

「ああ、そうだな。じゃあ、準備が出来たらまた連絡するよ」

「よろしくさん」

帰宅した僕は自分の部屋に入り、ベッドに寝転がった。

その瞬間、階段を駆け上がってくる、足音が二人分聞こえた。

「兄ちゃん！！帰って来てたなら先に言うことあるだろ！！」

「そうだよー！！」

「あー………ただいま」

「「違うー！！」」

「確かにそれもそうだけど、新年早々に言うことがあるだろー！！」

「あーはいはい。あけおめ、ことよろ」

「適當過ぎだろ兄ちゃん！！そんな適當だと今年1年よろしくしてやんねえぞー！！」

「逆にしてくれとは頼んでねえよ」

「私達がしたいんだよー！！」

「そうだよー！！お兄ちゃんがしたくなくても私達がしたいからお兄ちゃんもちゃんとやわらないとダメー！！」

「わけがわからん」

「今年1年はダンベルで起こしてほしいみたいだな、兄ちゃんは」

「明けましておめでとーございます。今年もよろしくお願いします」

「あけおめ、ことよろ兄ちゃん!」

「あけおめ、ことよろお兄ちゃん!」

「お前らは言わんのかい!」

「なんで兄ちゃん相手に言わなきゃならないんだよ」

「もういいや。用は済んだだろ」

「何だよ」。せっかくだから遊ぼうぜ」

「何が嬉しくて元日から妹と遊ばなきゃならねえんだよ。だいたい、僕はこの後予定があるんだよ」

「何の?」

「戦場ヶ原と出掛けてくる」

「ふーん。まあ私は月火ちゃんと初詣に行つて来るけど」

「勝手にしてくれ」

「何お願いするんだ?とか聞いてくれてもいいだろ?」

「何お願いするんだ?」

「新一とバレませんように」

「お前はコナンじゃない!」

「いらっしやい。とりあえず、上がった」

「ああ」

「コナンの道具の一つでもある追跡メガネってヤンデレ道具にしか思えないわ」

「急になんだよ」

てか、こいつは僕と妹の話聞いてたのか？

「だって、あれって発信器を付けるとどこにいるかわかるのでしょ？」

「ああ。距離は決まってるがな」

「恋人の持ち物にこっそり発信器を付けると見張れるじゃない」

「どごそのアプリなんだよ」

そっぴゃカレログってどうなったんだろ。

あれこそ完全にストーリーカー&ヤンデレ道具にしか思えないけど。

まあ、戦場ヶ原が知ってるわけじゃないと思うが。

「現実世界で言うとかレログっていうアプリみたいなものよね」
知っていた。

「カレログがあるなら由乃は絶対ユツキーのことずっと見ているわよね」

いきなり未来日記のネタを放り込んでくるな。

「まあ、私はヤンデレと言うよりツンデレだからそんなもの使わな
いけれど」

デレの部分が非常に少ないがな。

「何よ、さっきから黙って。引きちぎるわよ」

「どこをですか!?!」

「アホ毛」

「辞めろ!! 僕の大切な髪を引き抜こうとするな!!」

「僕の大切な本体の間違いではなくて?」

「本体じゃねえよ!! 髪の毛だよ!!」

「それより準備できたから行くわよ」

「今年も相変わらずだな」

「なに? 何か文句……いえ、意見があるの?」

「いいえ」

「そ、ならいいけど」

今年も戦場ヶ原の尻に敷かれる1年になることが決定した瞬間でもあった。

「尻に敷かれるってそんなに私の椅子になりたいの？ドMね」

「勝手に人の心の声を読んでおいてそれか！！」

「私は心の声を聞くことができるのよ」

「お前にそんな能力はない」

「新しい年になったから私もニュー私にならないとっと思ってるこの能力が使えるようになったのよ」

「そんな理不尽な理由で能力を身につけるな！！」

「うるさいわね。捻り潰すわよ」

「お前が巨人ではない限り捻り潰される心配はない」

「化物語のOPPの私ならできるわよ」

「あれは驚愕だったな」

「戦場ヶ原ひたぎの驚愕よ」

「すぐに他作品をパクるな」

「阿良々木君は警察にパクられないようにね」

「うるせえ!!」

その後、買い物へと出掛けた。

こよみデイリー 31 (後書き)

火憐「火憐じゃないぜ!!!」

月火「月火じゃないよ!!!」

火憐「年が明けたぜ!!!」

月火「明けたね!!!」

火憐「現実世界はただただどな!!!」

月火「まだだね!!!」

火憐「予告編クイズ!!!」

月火「クイズ!!!」

火憐「さて、私達は一体誰でしょう」

火憐&月火「次回、こよみデイリー32」

火憐「実は火憐だぜ!!!」

月火「実は月火だよ!!!」

じよみデイリー 32 (前書き)

最近、一気に寒くなってきましたねえ。

皆さん、体にはお気をつけてお過ごし下さい。

前もって言うておきます。今回、阿良々木君が変態になります。
いや、暴走します？

「イッテー!!!何しやがるこいつ!!!」

痛いも何しやがるこいつも、やっぱり僕であった。

「落ち着け八九寺。僕だ」

「ん……ああ……これはこれは鈴木さん」

「もう原型すらねえよ!!!もう一度言うが僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた!!!」

「わざとじゃない!?!」

「泣きました」

「ああ。僕も痛すぎて泣きそうだったよ。てか、初めの挨拶も無しで新年一発目は噛むから始まるのか」

「じゃあそれでは、改めまして初めの挨拶をしましょうか」

「ああ。そうだな」

「近寄らないで下さい。貴方のことが嫌いです!!!」

「初めは初めでも僕とお前が初めて会った時に言われたことじゃね

えか！！それが、年初めの挨拶ならこの国は終わりだよ！！」

「阿良々木さんが初めって言うから」

「普通わかるだろ。新年の挨拶だよ」

「ああ。そっちの方でしたか」

「こつちしかねえよ」

「では改めまして、明けましておめでとございます。今年もよろしく願いますね阿良々木さん」

「明けましておめでと。こちらこそよろしく」

「阿良々木さんは今からお出かけですか？」

「ああ。入試も近いし羽川と入試対策を兼ねた勉強をしに行く最中だ」

「新年早々大変ですねえ」

「まあ仕方ないよ。それより、お前この時期でも制服かよ。寒くないのか？」

「当たり前です。寒さを感じたら生きている証拠です」

「確かにそうだな」

「阿良々木さんは寒そうですねえ」

「ああ。かなり寒い」

「心と財布がですよね!!」

「財布が寒いのは否定はしないでおこう。ただ、心が寒いのは全力で否定をする!!」

「え？心が寒くて人の温もりが欲しくて私に抱きついてきたんじゃないんですか？」

「違う!!断じて違う!!」

「そうですか。もしそういう理由なら仕方がないと思ったんですけど、違うならただの変態ということですね」

「しまった!!」

「まあ、仕方がないと思ってても変態は変態ですがね」

「どちらにしろ運命は変わらなかったのか」

「というわけで阿良々木さんはこれからも変態のレールを外れることなく歩いて行って下さいね」

「待ちやがれ。何まじめに入ってるんだよ!!てか行き着く先は何だよ!!」

「刑務所です」

「捕まってるじゃねえか!!確実に僕、何かしれかしてるじゃん!

「！」

「ドンマイです」

「そんな一言で僕の人生を終わらされてたまるか」

「そんなことより行かなくていいですか？」

時計を見るとかれこれ15分程経っていた。

「じゃあ、そろそろ行くわ」

「はい。頑張ってください」

八九寺と別れ、図書館へと向かった。

「やつほー。明けましておめでとう。今年もよろしくね阿良々木君」

「明けましておめでとう。今年もよろしく」

「年末年始はどうしてた？」

「あー戦場ヶ原といることが多かったな。急に呼び出されて。あとは勉強に時間を使ってたな」

「ちゃんと勉強してたんだ。偉い偉い」

「やらないとアウトだろ」

「でも、最近の阿良々木君は学力もだいぶ上がってきてるし大丈夫だと思うよ」

「羽川にそう言われると少し安心するよ」

「だからって気を抜いちゃ駄目だよ」

「ああ。わかってる」

そこから数時間勉強をした。

「じゃあ、今日はここまでにしよっか」

「ああ」

机の上を片付け、図書館を出た。

「もう少しで卒業だね」

「そうだな。早かったなあ。特に去年は」

「いろいろあつたからね」

「体育倉庫で羽川に胸を揉まされそうになったりしたしな」

「いやいや、阿良々木君が言ってきたんだけど。まあ、結局揉まなかつたんだけど。実は、あの時私の初めてを覚悟したって言ったけ

れど、どこかで阿良々木君なら大丈夫って思ってたのかも」

「なら今あの時のお願いを聞いてもらおうか」

「嫌です」

「心配するな。ちゃんと60秒以上は揉むから」

「いや、そんな心配はしてないんですけど。てか、そういう問題じゃない」

「じゃあ、何がいけないんだよ」

「根本的なところよ！！何故、今胸を揉まれなくちゃならないのよ！！」

「え？今までの会話は胸を揉んでもらうための伏線じゃなかったのか？」

「そんなわけないでしょ。てか、戦場ヶ原さんという彼女がいるのに。バレたら半殺しでは済まなくなりそうだけど」

「僕はお前の胸になら命を賭けてもいい」

「そんなところに命を賭けないで」

閑話休題

「話は変わるけど卒業式の卒業生代表の答辞ってお前頼まれるんじゃないの？」

「うん。そのことだけだね、実は終業式の後に保科先生からは少し言われてたの」

「へえー。また断るのか？」

「うん。今回は受けようかなと思ってる」

「Really!？」

「なぜ英語!？うん。本当だよ」

「急にどうしたんだよ。入学式の際は悪目立ちしたくないとかで断ったんじゃないのか？」

「高校生活の最後くらいはいいなあと思って」

「お前も変わったな」

「というか阿良々木君と出会った人は皆変わってるよねー」

「そうか？」

「うん。特に戦場ヶ原さんなんて誰がどう見てもわかるよ」

「まあ、ホッチキスとか使わなくなったしな」

「それもあるけど、表情が豊かになっただって言うのかな」

「確かに笑う時もあるしな」

「でも、一番変わったのは阿良々木君だけだね」

「それは自分でもわかるよ。怪異のせいだ。羽川の胸を揉みたいとか言ってしまう時あるし」

「いや、それは阿良々木君の問題でしょ。怪異のせいにしていい」

「おいおい、こんな紳士な男子高校生が本心でそんなこと言はずないだろ」

「紳士な男子高校生は女子高生の眼球を舐めたいとか言いません」

「そ、それも怪異のせいだ!!」

「そうなの?じゃあ、別に大学に合格しても舐めなくてもいいんだよね?」

「羽川、実は僕、紳士な男子高校生ではないんだ。そして、今まで言ったことは怪異は全く関係がない。全て本心だ」

「全くこの男は…」

「だから、舐めさせて下さい!!」

「私って男を見る目が全くないような気がしてきた」

「え?どうしたんだよ急に……まさか、好きな男が出来たのか!?僕は認めないぞ!!どこの馬の骨ともわからんやつに羽川をやらん!!そして、羽川の眼球は僕が守る!!」

「貴方は私の何なのよ。あと別に他に好きな人なんてできてないから。だいたい、眼球を舐めたがる人は阿良々木君以外はいないから」

「他に？」

「あ、えーと……ううん、なんでもない。じゃあ、私こっちだから。またね阿良々木君」

「ああ」

羽川と別れた僕は帰宅した。

帰宅した僕は休憩のため、ベッドに寝転がった。

「お前様」

「なんだよ忍」

「まだ貰ってないんじゃないか」

「何を？」

「正月と言えばあれじゃろ」

「ああ。おせちっごまめぐらいなら残ってるやつがリビングにあるぞ」

「違っわい！！お正月と言えばお年玉じゃろ！！」

「怪異が何を欲しがってるんだよ!！」

「だってお年玉というものをもらっことがないから1回くらいはもらいたいと思ってるな」

「そりゃ、貰わないだろ。」

「だって怪異だもん。」

「別に大きい金額を要求しているわけじゃないんじゃないぞ? ちょっとでもいいからもらってみたいのじゃ。気持ちの問題じゃな」

「まあ、そういうことなら僕は忍の掌に100円玉を1枚置いた。はずだったが、気が付くと痛みと共に僕のおでこに100円玉が付いていた。」

「こんな金額でミスドが買えるか!！」

「やっぱり金額の問題じゃねえか!！」

「仕方がないのぉ。お年玉はもうよいからミスドを買ってくれんか?」

「結局、それが一番の目的なんだな」

「バレたら仕方がない。そうじゃ、お年玉なんかどうでもよいわい! !ミスドが欲しいのじゃ! !」

「上目遣いで可愛く言ったら買ってやるよ」

「ミ、ミスドが食べたいから買ってくれんか?お願い」

「忍、好きなだけ買ってやる」

「言われてやった僕も悪いんじゃないが……なんというか……お前様は本当に救いよりの無い人間じゃな」

「よし、今からデートに行くか!」

「気持ち悪い!」

「幼女に罵倒された……」

「(少し言い過ぎたかのお)」

「なんだか興奮する!もっと罵ってくれ忍!」

「駄目だこやつ……早くなんとかしないと」

「お前、さては2ちゃんねる見ているな」

「うむ。そういや最近知ったんじゃが、ネットでは頻繁に祭りがあるそうじゃぞ?楽しそうじゃな」

「その祭りは違う祭りだ」

「なんじゃ、そうなのか」

「ああ。それはそうと早く罵ってくれ。もしくは、足で踏みつけてくれてもいいぞ」

「お前様の変態度が猿の娘を追い抜きそうな勢いで進んでいるな」

「僕が神原を追い抜きそうなくらいに変態だと！？おいおい、新年早々変な冗談は言うなよ」

「残念ながら本当のことじゃよ」

「それは忍から見てだろ？他の人は違うはずだ！！」

「心配せんでも読者は全員お前様にドン引きじゃわ」

「そんな馬鹿な！！こんなに真摯で紳士なのか！？」

「幼女に踏まれたがる紳士がどこにおる！！」

「どこにいるじゃないか」

「いるのは変態じゃよ」

「あ、あれだ！！受験と言つ名の怪異に取り憑かれているに違いない！！！」

「まあ、そのジューケンというものが辛いつていうのは見ていたらわかるが、怪異のせいにするでない」

「なんだよ…じゃあ、僕の好感度は下がりはなしじゃないか」

「今更何を言うか」

「忍ーどうにかしてくれよ」

「僕に言われてもどうにもできんわい。ただ…」

「ただ？」

「ただ、僕とお前様は切っても切れん仲なのじゃから僕はお前様から離れはせん」

「し、忍…」

忍に抱きつこうとした瞬間、僕の記憶が途絶えた。

ああ、そつだ。

忍の必殺技、吸血鬼ぱんちを食らって、意識が無くなったのだ。

ただ、幸せだった。

こよみデイリー 32 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「冬はやっぱ寒いな!!」

月火「寒いね!!」

火憐「でも、実は寒い寒いって言うから寒いんだぜ」

月火「じゃあ、暑いと思ったら耐えられるかな？」

火憐「そこで、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「冬の雪山で水着で暑いと思いながら山小屋から出た!!どうなった!？」

火憐&月火「次回、こよみデイリー33」

火憐「3秒で死ぬかと思ったぜ」

月火「当たり前だよ」

こよみデイリー 33 (前書き)

クリスマスが今年もやってくる

とりあえず、リア充は爆発すれば良いよ。

……リア充は爆発すれば良いよって言っている僕ですが、街でリア充を見ると何故かほっこりします。

運命の受験が終わり、一段落ち着いた。

やるだけのこととはやったし、後は結果を待つのみである。

そんな僕はと言うと、いつも通りなのかどうかかわからないが戦場ヶ原の家にいる。

「入試はどうだった？」

「ああ、やるだけのこととはやったよ」

「そう、一人で会場に行けたのね。偉いわよ阿良々木君」

「僕を初めて一人でおつかいができた子供のように言っな。受験をなんだと思ってやがる」

「私にかかれば受験なんて自販機でジュースを買うようなものよ」

「お前は今、全国の受験生を敵に回したぞ」

「上等よ。私は仲間がいない方が強いのだよ」

「お前はどごその漫画の主人公だよ!!」

「え？化物語だけれど」

「化物語は漫画ではなく小説だ!! だいたい、化物語の主人公は僕だ!!」

「言っておくけど、阿良々木君は脇役よ」

「なら、その脇役が毎回の様に脇役を中心に話が進んでるんだよ」

「使い勝手が良いからよ」

「言い方が酷い!!」

あれ？以前若干だがデレた戦場ヶ原はどこに行ったんだ？

ああ、冬だから冬眠してるんだな。

………デレって冬眠するの？

「そんなことより」

「あん？」

「そんなことより、卒業旅行の計画を立てるわよ」

「はい？」

「あら、日本語がわからないのかしら、この馬鹿は」

会話に悪口を入れないと話せないのか？こいつは。

「いや、それはわかるけど、まだ合格したって決まったわけじゃないから行けるかどうかなんてわからないじゃないか」

「大丈夫よ。阿良々木君は合格しているわよ」

「何を根拠に」

「私が認めた男だからよ」

「全然根拠になっちゃいないが、そう言ってくれると嬉しいよ。で、どこに行くんだよ？」

「北海道よ」

「北海道!？」

「そう。以前行ったでしょ？北海道に蟹を食べに行きましょって」

「ああ、なんか2回ぐらい聞いたな」

「もう少ししたら授業も終わりで、卒業式まで休みでしょ？」

「ああ、まあ別にいいけど。てか、お前よくそれだけお金あるよな」

「冬休みにお父さんの仕事をまた手伝わせてもらっていたから」

「そうか」

「そんな阿良々木君もよくあるわね」

「僕は、子供の時から特に欲しいものとかなかったから貯めていたんだよ」

「そう。これからは、そのお金は私に食い潰されるのね」

「酷い!!--というか、その言い方だとお前の好感度が下がる一方だ」

と思うぞ」

「他人の好感度なんていらないわよ。阿良々木君の好感度があれば、だいたい、私のファンはこれを含めてファンなのよ」

「お前にはマイナスになる行動がないだと!？」

「当然よ。まあ、阿良々木君は何もしなくても現在進行形で下がっているけれど」

「僕が何をしたって言うんだ!？」

「何もしていないわよ」

「じゃあ、なんで下がっているんだよ!？」

「ほら、モノって買った瞬間の時より時間が経つにつれ価値が下がっていくでしょ?」

「だから何だよ!!僕の好感度をモノみたいに減価償却するな!!」

「好感度は向寒の候ね」

「うるせえ!!」

閑話休題

「阿良々木君は北海道で行きたい場所とかあるのかしら?意見を聞いてあげる」

「クラーク博士の像はやっぱり生で一回見てみたいかな」

「少年よ、カイジを描けだつたかしら」

「青年よ、大志を抱けだよ!!」

「じゃあ、小樽に行きましようか」

「結局、僕の意見は無視かよ!!」

「意見は聞くと言ったけれども、異見は認めないわ」

「じゃあ、聞くな!!」

「冗談よ。ちゃんと候補に入れておくわよ」

「あ、ありがとう」

「礼を言うなら金をくれ」

「候補の際には登録料がいるのか!？」

「ちなみに、阿良々木君から徴収したお金は全て募金します」

「あれだけ好感度なんて要らないと言いなから好感度を取りにきた
だど!？」

「私が総理大臣になった暁には、阿良々木暦の税率を100%に
します」

「その瞬間に僕は国外退去を命じられたのと同じだ!!」

「何よ、そんなに私と離れたいわけ？」

「離れさすようなことを言っているのは誰だ!!」

「私よ」

「よく理解しているじゃねえか。じゃあ、言うことがあるよな」

「阿良々木暦の税率を10%にします」

「税率の増加率の問題じゃねえよ!!」

「大好きよ阿良々木君」

「……僕も好きだ!!」

結局、戦場ヶ原のペースに持っていかれ、僕が悪い感じになってしまった。

「そう言えば話は変わるのだけれど」

「何だよ?」

「最近、アニメにハマっているのよ私」

「だいぶん前にも似たようなことを聞いた気がするが」

「あれは私は意外とアニメオタクなのよって言いたかったのよ」

「結局、クイズは何一つ合わなかったけどな」

「そんなことも合ったわね。でも、今の私は前よりもパワーアップしてるわよ」

「へえ」

「セーラーMoonって知ってる？」

「ああ、妹がよく見てたな。僕は見ていなかったけど」

「やっぱりセーラーMoonと言えばあの決め台詞よね」

「それは僕でも知ってる」

「土に埋まって星を見な」

「それは知らない！！何だよ、そのヤクザ紛いな台詞は！！子供に見せねえよ！！」

「あら？そうだったかしら。でも、誰かが言いそうな言葉だと思わない？」

「お前だよ！！」

「か弱い女の子に対してそれは失礼じゃないかしら？阿良々木君」

「か弱い女の子は、ホッチキスで口を綴じたり、シャーペンで眼球

を刺そうとしねえよ!!」

「不審者から身を守る当然の行動よ」

「通り魔も同然の行動だ」

「わかりました。ホツチキスの件は私に100%非があります。しかし、シャーペンの方は違うわよ」

「じゃあ、何だよ」

「眼球をえぐりだして目玉の親父みたいになれば阿良々木君が二人に増えるみたいで私ホイホイじゃない」

「怖いこと言うなや!!」

「鬼太郎みたいに片方目は隠れてるから丁度いいじゃない。鬼太郎木君」

「僕の名前は阿良々木だ!! だいたい、あれは漫画の世界であって、現実になると大量出血と失明と激痛しか残らねえよ!!」

「そう。せつかく体の方を神原にあげようとしたのに」

「僕の体をモノみたいに扱うな!! しかも、お前は眼球を選ぶんだな」

「当たり前よ。阿良々木君に何でもしていいと言われたら眼球を舐めることを選ぶわ」

「誰にかけようとして誰にかけたんだ？」

「阿良々木先輩にかけたつもりで、神原駿河、いつもの様にエロ奴隷として扱ってくれ阿良々木先輩。と言ったところ、今度あの男とは相談をしなければならぬわね。と返ってきたのだ」

「それってまさか……」

「うん！！戦場ヶ原先輩だ！！」

「一番間違っではいけない奴に一番間違ったことを言っちゃった！！」

「大丈夫だ。阿良々木先輩から言ってきたのではなく、私からエロ奴隷にしてくれと頼んだのだ。と言っておいたから」

「その前に僕のエロ奴隷だということを撤回しろよ！！」

「あ、でも、戦場ヶ原先輩は阿良々木先輩のことを、「しかし、神原。あの男は私のクソ奴隷だから別に構わないわよ」と言っておられたぞ」

「奴隷のうえにクソまで付くんだ」

「羨ましい限りだぞ阿良々木先輩」

「そんなことで羨ましがるな！！で、用はなんだよ？」

「ああ、そうだそうだ。阿良々木先輩、戦場ヶ原先輩と北海道に行くんだってな」

「情報早！！誰がそんなこと……って一人しかいねえか」

「うむ。さっきまで戦場ヶ原先輩のノロケを聞かされていたところだ」

「そして、どっだけ喋るんだよ」

「いやあ、戦場ヶ原先輩と北海道に行くだなんて羨ましい」

「お前も来るか？」

「いや、それは遠慮しておく。さすがに二人の邪魔をするのは気が引けるからな」

「僕は全然構わないぞ」

「ふむ。阿良々木先輩は戦場ヶ原先輩と私と3PW」

「やっぱり来なくていい」

「まあ、それにBL本の発売日だから行けないのだ」

「行けない理由は完全にそれが本命だろ」

「いや、フラゲをすれば行けるのだがフラゲは私のポリシーに反するのでやらないことにしているんだ」

「んなこと、知ったこっちゃねえよ」

「まあ、阿良々木先輩がどうしても言うならフラゲしても構わないが」

「発売当日に買ってゆっくり読んでくれ」

「そうか。助かる」

「んで、用件はそれだけか？」

「この他に何かあるって言うのだ？」

「いや、だいたいわかってたけど。じゃあ、切るぞ？」

「もう少し話そうではないか阿良々木先輩」

「お前と話していたらめっちゃくちやになりそうで怖いから切りたいんだが」

「何！？私をめっちゃくちやにしたいだど！？いや、阿良々木先輩なら大歓迎だ」

「時既に遅しかよ！！」

その後、神原との会話は1時間にも及んだ。

内容？そんなものここに載せられるわけないじゃないか。
載せた時は、それが最終回になるだろう。
とりあえず、戦場ヶ原との『相談』がないことを祈るばかりである。

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

月火「火憐ちゃん、ニュースだよ!!」

火憐「どうした、月火ちゃん!!」

月火「ついに!!」

火憐「ついに?」

月火「登場人物が私達ファイヤーシスターズとお兄ちゃんの短編小説が決定したよ!!」

火憐「マジで!? 西尾先生最高だな!!」

月火「あ、ゴメン。西尾先生じゃなくて、この日常物語を書いているクソ野郎」

火憐「え!? えくやだやだく。西尾先生が良い!!」

月火「まあ、今回は我慢してあげようよ」

火憐「仕方ねえな。ま、出番をくれたのは喜んでやるよ」

月火「じゃあ、予告するよ火憐ちゃん!!」

火憐「そうだな」

火憐&月火「妹物語 こよみシスターズ 近日公開!!!」

月火「いやいや、じゃなくて本編の予告しないと!!!」

火憐「あー悪い悪い。つつい」

月火「もう。じゃあ、気を取り直して」

火憐&月火「次回、こよみデイリー34」

月火「実は、私も嬉しかったり」

火憐「だろっね」

「特別編」 聖物語 まよいサンタ (前書き)

つい暇だったので書いた。
後悔はしている。

次回予告でこよみデイリー34と言ったにも関わらず、違うものを
記載することになり申し訳ないですm()m

はい。

なんせ累計時間5時間程で書き上げたので全然内容が無いんですよ
wwww

まあ、こよみデイリーの続きがあがるまでの繋ぎとして適当に読ん
で頂けたら幸いです。

ちなみに、語り部を代えただけで会話部分はこよみデイリー30と
全く一緒です!!

最後に一言……このまよいサンタが失敗したからって離れて行か
ないでー!!

「特別編」 聖物語 まよいサンタ

001

今日、12月24日はクリスマススイブで、カップルは仲良く過ごしたり、サンタさんにプレゼントをお願いをする子供もいます。しかし、私には関係がありません。

私には、クリスマスだろうがお正月だろうが関係ないのです。私、八九寺真宵には。

昔は、それはクリスマスやお正月は嬉しかったです。楽しかったです。

プレゼントが貰えたり、お年玉が貰えたり、家族でクリスマスパーティーなんかもして。

しかし、それは突然私には関係の無いものになりました。

あの事故以来

それからというものの私はずっと一人で過ごしてきました。

春夏秋冬、季節に関係無く。

今年もそうだと私は思っていました。

1月1日から今年も何も変わらない日常が始まるのかと思っていました。

今年も、誰かを迷わさないように、あの言葉を言わなければならぬのかと思っていました。

あの方に会うまでは。

002

その人は、阿良々木暦と言います。
今年の母の日に知り合いました。
いつも通り私は迷っていました。

その時、阿良々木さんは話しかけてきました。
いえ、話しかけてきてくれました。

しかし、私はいつも通り答えるしかないのです。

「話しかけないで下さい。貴方のことが嫌いです」

彼は、一旦は帰って行きました。

しかし、しばらくすると帰ってきました。

彼は、もう一度私に話しかけてきました。

しかし、私は、無視をしました。

そうすることで諦めてくれると思ったからです。

普通の人ならそれで諦めていたでしょう。

むしろ、1回目で諦めていたはずです。

彼は、諦めるどころか、暴力を振るってきました。

そして、セクハラをされました。

この文章だけを見ると事件の被害者に聞こえるので、それは違うと
いうことを一応言っておきます。

その後、私はお母さん、綱手家の家を、その時は以前は綱手家があ
った土地になっていましたが、ようやく辿り着くことができました。

それ以来、私は阿良々木さんに会うために街で待つようになりまし

た。

そして現在、12月24日、今日も目の前には阿良々木さんがいます。

私にとっては、何年ぶりかはわからないのですが、少しの間だけでも一人じゃないクリスマスを過ごせることになりました。

003

私は、阿良々木さんの為にサンタの衣装を来て登場することにしました。

理由は一つです。

ロリコンの阿良々木さんが少女のサンタコスで喜ぶと思ったからです。

阿良々木さんは自分はロリコンではないと否定していますが、彼は100%ロリコンだと確信しています。

別に阿良々木さんがロリコンでも構いません。むしろ、その方が私は助かりますが。

ただ、阿良々木さんの将来が心配なのです。

数年後、児童わいせつ容疑で捕まらないかと。

まあ、大丈夫だとは思いますが。たぶん。

「何してるんだよ八九寺」

「これはこれは腹巻きさん」

「僕をお腹に巻く布みたいな名前と呼ぶな。何度も言っているが僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた!!」

「わざとじゃない!?!」

「蟹食べた」

「えらく豪勢な食事だったんだな」

私はこのいつもの掛け合いをする時が一番楽しい時です。今日は、襲ってこなかったですね。どうしたんでしょうか？

「どうしたんですか？今日は」

「何がだよ」

「いつもならを強制わいせつをしてくるじゃないですか」

「って私は何を聞いているんですか!!」

「これじゃ、まるで私が期待しているようじゃないですか!!」

「その言い方は辞めろ！！僕が捕まるだろ！！」

はい。

他の人にしたら確実に捕まりますね。

「捕まるようなことをしているのは誰ですか」

「はて？なんのことだろう」

「最低です！！この男、とぼけやがりました！！」

「それより、八九寺何だよその格好は」

「ああ。どうですか？クリスマス仕様でサンタコスプレを試してみました」

「誰得なんだよ」

「何を言ってるんですか！！今頃、八九寺ファンは私のサンタコスプレを想像してハアハアしているところですよ」

「ちなみにその表現はアウトな」

これはさすがに自分でもアウトだと思いました。

「阿良々木さんこそ何をしていますか？」

「ああ、戦場ヶ原の家に行く途中なんだよ。ただ雪だから歩くのがな……」

「ああ、雪だから滑らないように気をつけなければなりませんね」

「う…そ、そうなんだよ」

かなり滑るといふ言葉に反応していますね。

やはり受験生ですね。

しかし、ここで辞める八九寺真宵ではありません。

いつもの仕返しをするのです…！

「コケると危ないですから滑るのには気をつけて下さいね…！滑るのには」

「お前、わざと滑るとか言ってるだろ」

「何を言っているんですか…！私は阿良々木さんが大学に落ちないように気をつけて下さいなんて一言も言っていないですよ」

「それだよ…！」

「すみません、噛みました」

「違う、わざとだ」

「はい…！わざとです」

「そこは嘘でも否定してくれ…！」

「それより、私のサンタコスは貴重ですよ。この際、QQOカードやポスターを作りましょう。そうすれば私は印税生活を送ることができます」

「何、勝手に話を進めてるんだよ」

「特別に今ならタダで写真を撮らせてあげますよ」

「僕はロリコンではないからそんな趣味はない」

「本当にいいんですか？真宵サンタを撮るチャンスは二度とないですよ。真宵サンタ……阿良々木さん！！偽物語の次にまよいサンタをアニメ化しましょう！！」

「するわけねえだろ。原作すらないのに」

「なら、本家の西尾先生に次の恋物語と同時進行で書いてもらいましょ」

「西尾先生を殺す気か！！」

「なら、この日常物語の小説の作者に書いてもらいます」

この時は、さすがの私も本当に書くとは思っていませんでしたよ。

「まともな話にならないぞ」

「う……確かにその可能性は大ですね」

なのに、今こうして書かれてるんですけどね。

「だいたいどんな内容になるんだよ」

「私のクリスマスの日の行動を分刻みで書いていきます」

「誰も興味ないし、細かすぎだよ!」

「だって、1日の出来事だとすぐ終わるじゃないですか」

「なら、短編小説でいいだろ」

「それは駄目です!」

「なんでだよ」

「阿良々木さんはこよみデイリーで連載しているのに私のまよいサ
ンタが短編小説だなんて負けた気分になるからです」

「知ったこつちやねえよ!」

「仕方がないですね。今年のサンタさんへの願い事はこよみデイリ
ー打ち切り、まよいサンタ連載開始にしましょう」

「その願い事はたぶん叶わねえよ」

「願い事は叶えてもらうんじゃないんですよ。自分の手で叶えるん
です」

「綺麗に終わらそうとしたのはわかるが、意味がよくわからないか
ら結局決まっていないぞ」

「それは阿良々木さんが馬鹿だからです」

「人のせいにするな」

「それでは阿良々木さん。ここでずっと話しいるとさすがに寒いし遅れると戦場ヶ原さんに悪いので私はここで失礼しますね」

「ああ、じゃあまたな」

004

こうして、あっという間に阿良々木さんのクリスマスイブが過ぎていきました。

しかし、私はそれでも満足でした。

なぜなら、今まではずっと一人きりのクリスマスだったからです。

それが今年は少しだけでしたが、阿良々木さんと過ごすことができました。

今日はクリスマスイブで子供達がサンタさんをお願いをする日でもあります。

もし、サンタさんがいるなら私なら

来年も阿良々木さんに会えますように

とお願いしようかね。

「特別編」 聖物語 まよいサンタ (後書き)

八九寺「画面の前の皆さんコンバトラー！！皆のアイドル八九寺真宵です！！」

阿良々木「えーいつも日常物語を読んで頂いている皆さん、そして今回、まよいサンタを頂いた皆さん。どうも阿良々木暦です」

八九寺「あの一阿良々木さん。一ついいですか？」

阿良々木「わかってる。お前が言いたいことはわかってる」

八九寺「でも、言わないと気が済みません」

阿良々木「わかった。じゃあ許そう」

八九寺「では……なんですか！！このクオリティの低さは！！」

阿良々木「うん。今回はお前に同情するよ」

八九寺「私はもっと良いものが出来上がると思っていたのに、このザマですよ！！」

阿良々木「八九寺、言いたいことが山ほどあるのはわかるがここは後書きだから、後で個別で僕が聞いてやる」

八九寺「仕方ないですね。それで手を打ちましょう」

阿良々木「こよみデイリーの続編はちゃんとしたやつに仕上げるよ

うにと作者に嚴重注意しておくから我慢してくれ」

八九寺「頼みますよ」

阿良々木「ああ。ちなみに、次回はこよみデイリー34か妹物語か
決まってるないみたいだぜ」

八九寺「最近、また不安定になってきましたね」

阿良々木「そうだな。とりあえず、締めるだけ締めとこうか」

八九寺「そうですね」

阿良々木& amp ;八九寺「では、次回もよろしく」

「特別編」 妹物語 こよみシスターズ (前書き)

新年あけましておめでとございますm(´`´)m

今年もよろしくお願いします!!

とりあえず、新年1発目は2本立てです!!

まず、1本目は特別編で妹物語 こよみシスターズ です!!

どうぞ!!

「特別編」 妹物語 こよみシスターズ

子供の頃は、誕生日になるとプレゼントがもらえたりするので誕生日が嬉しかったが、18年も生きていれば、誕生日なんてどうでも良いと今日、改めて思った。

そう、僕は今日、18回目の誕生日を迎えた。

休日ということもあり、朝はゆっくり寝ていた。

まあ、いつもギリギリまで寝ているんだけど。

そして、いつも通り妹達に叩き起こされる僕がいた。

無理矢理起こされた僕は朝食を摂り、現在は自分の部屋にいる。

午後からは戦場ヶ原に行く予定だが、午前中は特にやることがないので勉強をしようと机に向かった。

その瞬間、毎度お馴染みの様にドアが勢いよく開けられた。

「兄ちゃん!!」

「お前は僕に勉強させたくないんだな!? そうだな!?」

「今日は兄ちゃんの誕生日だな!!」

「僕は受験生なんだ。お前は中3なんだから何が必要かわかるよな?」

「仕方がないから私達が兄ちゃんの誕生日を祝ってやるよ!!」

「頼むから投げたボールを返してくれ」

「え？ボールなんて投げられてねえけど？」

本気でわからないみたいらしく真面目に聞き返してくる妹。

「言葉のボールだよ！！」

「これが本当の言球ことだまだな！！」

「何も上手くねえよ」

「そんなこと言ってる誕生日を祝ってやんねえぞ」

「別に祝ってくれなんて一言も言っただけよ」

「本当は祝って欲しいんだろ？素直になれよ兄ちゃん。男のツンデレは要らないぞ」

「いや、本気でいらぬ」

「そんなこと言わないよ。じゃあ、私はどうしたらいいんだよ」

「大人しく自分の部屋へ帰れ」

「じゃあ、兄ちゃんは一人寂しく誕生日を過ごすんだな」

「いや、昼から出掛ける」

「ああ、外に出て人がいるところに行つて、僕は一人じゃないって

思いつのか」

「寂しすぎるわ!!そんなことするぐらいなら一人で家にいるよ!」

「わかってんなら家にいろよ」

「戦場ヶ原の家に行くんだよ」

「そついや今年は戦場ヶ原さんがいたか……じゃあ、兄ちゃん!!」

「何だよ」

「私達と戦場ヶ原さん、どっちが大切なんだよ」

「戦場ヶ原に決まってるんだろ」

「いつからウチの兄ちゃんはそんな兄に……私はそんな兄ちゃんに育てたつもりはない!!」

「お前は親か!!お前に育てられたことなんて1ミクロもねえよ!」

「いやいや、今の兄ちゃんがあるのは私と月火ちゃんです育てたと言っても過言じゃねえよ」

「過言だよ!!てか、人を犬みたいに扱うな!!」

「でも、この前戦場ヶ原さんが家に来た時に、「お兄さんは犬なのに、火憐さんと月火さんは立派ね」って言ってたぞ?」

あいつ僕の妹達に何を吹き込みやがった。とりあえず、今日行ったら説教してやる。

「あいつの言うことは信用するな」「でも、あの戦場ヶ原さんが言うんだし」

「おい、でっかいの。僕と戦場ヶ原の言うことどちらを信用するんだ？」

「戦場ヶ原さん」

「即答だど！？それに実の兄の方が信用ないだど！？」

「まあ、兄ちゃんだし」

「理由が適当過ぎだろ！！」

「それより、本当に何か欲しいものとかして欲しいこととかないのかよ？」

「ああ無い。あるとすれば今から勉強がしたいから部屋から出て行ってくれ」

「仕方がないな。じゃあ、私は自分の部屋に戻ってやるよ」

やっと自分の時間が作れるな。と思いつながら机に再び戻った瞬間

「お兄ちゃん！！」

「お前ら姉妹は揃って僕を合格させたくないんだな!!」

「そうやって落ちた時の言い訳にしようとしてるの?」

「だったら勉強させてくれ」

「私は今日はお兄ちゃんの誕生日だから何か欲しいものがあるか、して欲しいことがあるか聞きにきただけなのに」

「だから、勉強をする時間をくれ」

「他にないの?」

「ない!!」

「妹の下着が欲しいとか」

「どんな兄貴だよ!!変態じゃねえか!!」

「いや、変態でしょ」

「変態じゃない!!」

「じゃあ、妹の眼球を舐めたいとか」

「う…それは悩むなあ」

「悩むな!!それこそ全力で否定しろ!!変態兄貴!!」

「僕は紳士だ!!」

「どこが紳士だ!!誰だよ偽物語で妹の胸を揉んだやつは!!」

「誰だそんなけしからんことをするやつは!!僕が説教してやる!!」

「てめえだよ!!バカ兄貴!!」

「僕がそんなことをするわけないじゃないか」

「やってんだよ!!今すぐ本屋に行って買って来い」

「まあまあ、今はそんなメタ話は止そうじゃないか」

「逃げた!?!」

「そんなことよりTPP問題について話し合おうじゃないか」

「あからさまに話を逸らすな!!てか、朝っぱらからどこに経済について語り合う兄妹がいるんだよ!!」

「ここにいるじゃないか。もしかして、月火ちゃんはTPPもわからないのか?仕方ない。紳士なお兄ちゃんが教えてあげよう。簡単に言うと英会話教室だよ」

「それはECCだよ!!」

「悪い悪い。間違った。高速道路のノンストップ自動料金收受システムのことだ」

「それはETCだ!」

さすがは僕の妹。
ツッコミがなっている。

「本当にTPPのことお兄ちゃん知ってるの?」

「ああ、知ってるとも。なんなら本当に今から語り合つか?」

「いや、遠慮しとく。そんなことより、やって欲しいことがない」とはわかったよ。何か欲しいものは?」

「うーん……ない」

「本当お兄ちゃんって無欲だよな」

「そうだな。まあ、あるっちゃあるんだけどな」

「なにになに!?!」

「いや、言っても無理なことだし別にいいよ」

「いいから言ってみてよ!?!」

「でも言いつらいし」

「まさか、お兄ちゃん私の処女が欲しいとか!?!無理無理無理。兄妹でそういうのは無いわー」

「違えよ！！自転車だよ！！自転車！！勝手に話を進めんじゃねえ！！！」

「え！？自転車？自転車には処女とかないよ？」

「とりあえず、お前は頭の中から一時的に処女という単語を忘れろ」

「よし！！忘れた！！！」

「早っ！！！」

「で、なんで自転車なの？」

「ほら僕、マウンテンバイク潰して今はママチャリしかないじゃん」

「そっぴやそうだったね。ちょっと待ってて」

そう言いながら、部屋を出て行く妹。

まあ、出て行ってくれたなら有難い。

と勉強に戻ろうとした瞬間、また戻ってきた。

「ゴメンね、お兄ちゃん。火憐ちゃんのお金を合わせても少し足りないや」

「いや、だから別にいいって。気持ちだけ受け取っておくよ。ありがとう」

「うん！！！」

笑顔になった月火ちゃんは部屋を出て行った。

ふう、やっと勉強ができるな。

「兄ちゃん!!」

「……………」

無視をして勉強に取り組む僕。

「兄ちゃん!!!!」

「……………」

「無視かよ!!」

「……………」

「クソっ、こっぴごうなったら」

と言ってから咳払いを数回して

「ちょ、兄ちゃん…やだ…そんなとこ触らないで…あん」

「ストーーーーップ!!」

「お、やっと返事した」

「変な声を出すんじゃないよ!!勘違いされるだろうが!!」

「いや、兄ちゃんが返事してくれないから」

「返事しないからってやり過ぎだろ！！何してんだ！！」

「何って、兄に襲われる妹を演じてみた」

「誰かに聞かれたらどうすんだ！！」

「それはそれでドンマイだな」

「そんな一言で僕の人生を終わらせてたまるか。で、今度は何しに来たんだ？」

「そうそう。月火ちゃんが兄ちゃんが妹の処女をどうのこうのって言ってたから」

「うわー。」

「ややこしいことになってきた。」

「もう、本当めんどくさい。」

「何？今日厄日？」

「誕生日なの？」

「早く午後になつてくんねえかなあ。」

「まさか戦場ヶ原さんという彼女の存在が居ながら妹に手を出さなんて失望したぜ兄ちゃん！！」

「僕はお前の頭に絶望だよ」

「いや、いくら中の人と一緒にだからって」

「絶望先生じゃねえよ！！」

「それより、兄ちゃんも先輩みたいなプロポーズをした方がいいぜ」

「いきなりなんの話だよ。そして、先輩って誰だよ!!!」

「日向先輩だよ!!!最後の最後まで一緒にいたのに忘れるなんて酷いな!!!」

「いくら中の人共演したからってAngel Beatsを持ち込むじゃねえよ!!!」

「杏子さんのパフェを作らないと」

「頼むからこれ以上掻き回さないでくれ。この小説が何が元ネタかわからなくなる」

「何って私達ファイヤーシスターズの新作だから元ネタが無いに決まってるじゃん」

「違うよ!!!物語シリーズの二次創作だよ!!!だいたい、お前達の話は偽物語で完結だよ」

「ズルいー。他の人はセカンドシーズンあったのにー」

「仕方ないだろ」

「仕方ないで済まされるだど!?もう妹なんてやってられるか!!!やめだやめだ!!!」

「そんなことで妹を辞めようとするな!!!」

「そんなこと！？主人公の兄ちゃんにはわからないに決まってるんじゃないか。だいたい、いいよな兄ちゃんは。彼女とイチャイチャして、後輩とイチャイチャして、学級委員長とイチャイチャして、拳げ句の果てには小学生とまでイチャイチャして、全てを通してイチャイチャしてるだけじゃねえか！！」

「お前は僕の活躍を見ていなかったのか！？」

「怪異から救っただけじゃん」

「それだよ！！」

「まあ、恋物語では兄ちゃんも降板したしな」

「降板って言うな。僕が一番ビックリしたんだから」

「私だってビックリだよ。絶対語り部は私だと思ったのに」

「偽物語でもなかったのに1億%ねえよ！！それより、そろそろメタ話を切り上げていいか？」

「そうだな！！」

これ以上は本当に何をメインにしているかわからなくなる。

「とりあえず、月火ちゃんから聞いた処女の話は全く関係ないから気にするな」

「わかった！！」

早っ!!!

今までのグダグダトークは何だったんだよ。

「月火ちゃんではないってことは……まさか私のか!? いやいや、いくら歯磨きプレイで寸前までいったからって無理だって!!…まあ…兄ちゃんがどうしてもって…言うなら…考えなくも…ない…けど」

全然理解していなかった。

「おい、でつかいの。とりあえず、そこに座れ」

「え? え? …いや…その…まだ…心の準備ができてないから」

「いらねえよ!! 勝手に話を進めんなや!! いるとしたら説教される準備だけだ!!」

「え? 今から私説教されるの?」

「ああ。そして、お前に今回の件に関して細かいところまで説明してやる」

「なるほど…説教プレイか!! 新しいな!!」

その瞬間、はつきりとわかった気がした。

コイツら（特にでつかい方）が、こんなにややこしくなったのか。うん。

神原に違いない。

「とりあえず、お前は一旦黙れ」

それから少し、コイツに説明をした。

「なるほど!!そういうことか!!悪かったな兄ちゃん!!」

「まあ、ややこしかったって言ったらややこしかったしな」

「で、兄ちゃん本当に何もいらないのかよ」

「ああ、気持ちだけで十分だ」

「なんなら、歯磨きプレイ券でもやるうか?」

「それを使った瞬間に月火ちゃんから千枚通しのプレゼントがくるから要らない」

「妹のパンツも?」

「お前達はどれだけ僕を変態兄貴にしたいんだ!!」

「ちゃんと脱ぎたてを渡すぜ」

「黙れ!!」

「そっか。なら仕方ねえな」

「ああ」

そう言って部屋から出て行った。

ようやく勉強ができる。

そう思い時計を見ると11時を指していた。
戦場ヶ原との約束は12時。
もうできないじゃん。

仕方なく勉強の用意を片付けて戦場ヶ原の家に行く準備をした。
玄関の所まで行くと妹達が部屋から降りてきた。

「兄ちゃん今から行くの？」

「ああ」

「ちゃんと勉強もしなきゃ駄目だよ？」

「させなかったのは誰だよ!？」

お互いの顔を見合わせる二人。

「両方だ!!!」

「そんなことより、今日はお兄ちゃんの誕生日なんだから遅くならないでよね!!!」

「別に僕の誕生日でもお前達は関係ないだろ」

「お兄ちゃんの誕生日だから私達の相手をしてって言うてるの」

「それだとどっちが誕生日かわからないよ」

「まあ、あれだ。言いたいことは彼女もいいけど私達も構えてこ
とだ!!!」

「いつも構ってるだろ。特にさつきまで」

「口答えは無用！！男なら一言はいと言いやがれ！！」

「はいはい。わかりましたよお嬢様達」

「わかったならよろしい」

「じゃあ」

と火憐ちゃんが言ったあと、二人で声を合わせてきた。

「「行つてらっしゃい！！」」

まあ、なんだかんだで可愛い妹達なんだよな。

「ああ、行つてきます」

18歳の誕生日、僕は妹達に見送られながら戦場ヶ原の家へと向かった。

ママチャリを漕ぎながらパーカーのポケットの中に封筒が入っているのに気が付き、自転車を降りて確認をする。

裏には、火憐、月火の文字。

手紙か何かか？

と思いつながら中を開けると一枚の紙が入っていた。

紙を広げると文字が書かれていた。

「えー……とりあえず、帰ったら覚えてるよ」

書かれていた文字は

変態兄貴

「特別編」 妹物語 こよみシスターズ (後書き)

妹物語 こよみシスターズ でした!!

いかがでしたでしょうか？

さあ、体力がある人は続けて本編のこよみデイリー34へGOー!
!

にょみデイリー 34 (前書き)

2本立ての2本目です!!

今回は若干なめになっていますm ((m

卒業式2週間前、無事大学に合格した僕は戦場ヶ原と共に北の大地へと降り立った。
現在は小樽にいる。

僕の住んでいる街も相当寒いところだと思っていたけど、北海道へ来てみると桁外れだ。

さすがは北の国北海道。

「ねえ、阿良々木君。ちょっと思ったのだけれど」

「どうした？」

「この小樽運河に人を落としたらどうなるのかしら」

「死ぬよ！！確実に死ぬよ！！」

北海道じゃなくても死ぬよ。

「北海道の場合は、溺死？それとも凍死どちらになるのかしら」

「知るか！！そんな話をするために北海道に来たんじゃない！！」

「じゃあ、阿良々木君で試してみましよう」

「ヤダよ！！何で北海道まで来て自殺行為をしなきゃなんねえんだよ！！！！だいたい、僕は吸血鬼の血の残りで泳げなくなっただよ！！」

「お前も知ってるだろ？」

「ええ、知ってるわよ。だから何？」

「だから何じゃねえよ！！結果判明したじゃねえか！！溺死だよ！！」

「溺れるってさんずいに弱いつて書くのよ」

「だから何だよ」

「阿良々木君にピッタリね」

「黙れ！！」

「でも、心配しないで。あなたは死なないわ…だって、私が守るもの」

「そのお前によって今現在進行形で死に近づいてんだよ！！」

とりあえず、シンジ君とレイに謝れ。

「さて、ホテルのチェックインまで時間があるし、その辺ブラブラする？」

「そつだな」

そつして僕達は、小樽市内を散策することにした。

「ところで阿良々木君」

「ん？」

「冬って寒いにも関わらず何故かアイスが食べたくなるのは私だけかしら？」

「あーでもそれわかるかも。僕は炬燵こたつに入りながら雪見大福を食べるのが好きだな」

「あら、奇遇ね。私も好きよ。あとかき氷とか」

「かき氷を冬に食べるのはまだ経験ないな」

「そう。なら今から経験する？」

そう言いながら道端でしゃがみながら雪を集める戦場ヶ原。
その雪を丸めて僕に渡す。

「はい」

「これは？」

「氷がないから雪で我慢して頂戴」

「雑!!」

ただの雪玉じゃねえか!!

「いらないの？」

「あ…いや…外では遠慮しておくよ。寒いし」

「そう。阿良々木君、後ろ向いてくれる？」

「何だよ」

「いいから」

「まさか、その雪玉をぶつけるんじゃないだろうな？」

「そんなことしないわよ。蟹に誓って」

「蟹…ねえ」

言われるがまま後ろを向く僕。

すると、首の部分の部分に隙間ができた。

次の瞬間

「&#%¢\$ ¥@!~!!」

小樽市内で絶叫する僕。

「どうしたの？阿良々木君。そんなに悶えて」

「何しやがるんだ!!」

「え？雪を服の中に入れたのだけれど」

「その行動に何の意味があるんだ!!」

「阿良々木君がどんな反応をするか気になったから」

「それで実験結果はどうだったんだよ」

「ええ、予想通りの反応だったわ。面白くないわ」

「僕だって面白くないよ!!てか、風邪ひくわ!!」

「え?阿良々木君って風邪ひかないんじゃないの?」

「いや、吸血鬼の残りがあるといっても風邪はひくから」

「そういう意味じゃなくて」

「じゃあ、どういう意味だよ」

「馬鹿だから風邪をひかないんじゃないの?ってことよ」

「ひくよ!!風邪ぐらいひくよ!!」

「そうなの!??」

「ビックリするなや!!」

「てことは、阿良々木君は馬鹿ってことね」

「風邪をひくってことは馬鹿じゃないんじゃないのかよ!!」

「馬鹿だから体調管理ができないから風邪をひくのよ」

言い争った結果、僕が馬鹿という運命は変わらなかった。

「そんなことより阿良々木君」

「今度は何だよ」

「お昼がまだだったわね」

「そう言えばそうだったな」

「では、食べに行きましょう」

「何が食べたいんだ？」

「知ってる？阿良々木君。北海道ってラーメンも美味しいのよ」

その一言で昼食は決まった。

こういった決断力のある人間がいると本当に助かると思うのは僕だけではないはずだ。

「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
」

昼食を摂るために、とあるラーメン屋さんに入った。

店内はお客さんで結構一杯だったが、なんとか待たずに座ることができた。

北海道と言えはやっぱり味噌ラーメンになるのか？

ほら、CMでもサッ○ロー番味噌ラーメン っって言ってるし
そう思った僕は味噌ラーメンを頼んだ。

そして、戦場ヶ原も同じものを頼んだ。

それは、ほんの10分ぐらい前であった。

そして今、僕の目の前には味噌ラーメンが2つあるはずであった。いや、正確に言うところにはあるのはある。

ただ、戦場ヶ原の方の味噌ラーメンは、見事な味噌の色のラーメンである。

片や僕のラーメンは真っ赤に染まった、見ただけで汗が出てきそうなスープの色である。

もちろん、運ばれてきた時は戦場ヶ原と一緒に味噌色のスープであった。

「何故、僕の味噌ラーメンは真っ赤になっているんだ」

「え？一味が入っているからに決まっているじゃない」

「普通に一味を入れても真っ赤にはならねえよ!!」

今はお前は七味じゃなくて一味派なのなという意見はスルーさせてもらう。

何故、僕の味噌ラーメンが唐辛子ラーメンになったのかと言うと、ラーメンが運ばれて来て食べようとした時に戦場ヶ原が七味か一味を入れるとより美味しいと言ったので僕は一味を入れようとしたが、戦場ヶ原が先に手に取り

「私が入れてあげるわよ」

って言うてきたので断る理由も特に無かったので頼んだが、それが失敗であった。

戦場ヶ原は、蓋を開け大量に出ないようにしている白い部分までも取り、満タンに入っている一味を全てスープの中に放り込んだのである。

「ごめんなさい。手が滑ってしまっただわ」

「嘘つけ！！かなり手際が良かったじゃねえか！！」

「あ、ありがとう」

「照れるとこじゃねえよ！！」

「だいたい、これ店の人に見つかったらヤバいだろ」

「それなら大丈夫」

と言った直後、戦場ヶ原は店員を呼んだ。

「すみません。一味を入れようとしたら中の蓋が取れて全部出てしまったんですけど」

店員は少し慌てながら

「申し訳ありません。すぐに新しいのと交換しますね」

「いえいえ、別に大丈夫ですよ。この人辛いのが大好きなんで。ね？」

と、ものすごいオーラを出しながら聞いてくる戦場ヶ原

「は、はい。全然大丈夫…です」

「し、しかし」

と、困惑する店員

「ただ、一味を全部使ってしまったので謝りたかっただけです」

「そちらに関しては全然大丈夫ですよ」

「そうですか。ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ申し訳ありませんでした」

「そんな気になさらないで下さい」

「ありがとうございます」

と店員は仕事へと戻って行った。

「ほら、大丈夫だったでしょ？」

「やりたい放題だな！！結局、この一味ラーメンは残ったままじゃねえか！！」

「でも、阿良々木君大丈夫だってさっき言ったじゃない」

「あの場の空気で交換して下さいなんて言えるか！！」

「わかったわ。じゃあ、私がそれを食べるわ」

「い、いや、それは悪いから僕が食べる」

「そ、ありがとう」

と落ち着いたところでラーメンを食べ始めた戦場ヶ原と僕であった。

戦場ヶ原はとても幸せそうな顔で美味しそうに食べていた。

その顔を見ていると今までのことを全部許さざるを得ないと思った。ただ、食べ終わった後も僕の額から汗がしばらく引くことはなかった。

こよみデイリー 34 (後書き)

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ついに妹物語公開されたな!!」

月火「やっとだね!!」

火憐「あれだけ書いてないと言っていたからもう少しかかると思ってたけど」

月火「無理矢理書かせたからね」

火憐「本当にはともあれ公開されて良かったな」

月火「まあ、筆者は公開して後悔してるみたいだけど」

火憐「知るか!!」

月火「知るか!!」

火憐「では、予告編クイズ!!」

月火「クイズ!!」

火憐「次回の私達の物語名はなんでしょうか？」

月火「え？またするの？」

火憐&月火「次回、こよみデイリー35」

火憐「次は何の話を書かせようかなあ」

月火「少しは休ませてあげて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1128u/>

日常物語

2012年1月6日09時52分発行